

研究紀要

平成23年度
第35号

静岡県博物館協会 研究紀要 第35号



静岡県博物館協会
研究紀要

第35号 / 平成23年度
表紙 / 菱垣廻船模型 財団法人 清水港湾博物館蔵

目次

2	特集:「まちと博物館」I 博物館のメタモルフォーゼ	常葉学園大学 造形学部長 日比野 秀男
12	特集:「まちと博物館」II 地域を活かすエコミュージアム	丹青研究所研究顧問 里見 親幸
18	特集:「まちと博物館」III 松本まるごと博物館の歩みと実践活動から	松本市立博物館長 窪田 雅之
28	特集:「まちと博物館」IV 学校と地域博物館の「連携」から生まれるもの	美濃加茂市民ミュージアム 可見 光生
36	学校と美術館の連携について ～鑑賞教育指導者研修会の実践報告～	静岡県立美術館 学芸課 主査 鈴木 雅道
60	静岡近代美術年表稿 昭和戦前編 2	立花 義彰
81 (1)	城景茂肖像画について	財団法人清水港湾博物館 椿原 靖弘

編集・発行
静岡県博物館協会(事務局)
〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
静岡県立美術館
電 話・054-263-5857 FAX・054-263-5742

デザイン 有限会社サイズ
発行日 2012年(平成24年)3月31日
印刷 株式会社アプライズ

特集:「まちと博物館」I 博物館のメタモルフォーゼ

常葉学園大学 造形学部長 日比野 秀男

はじめに

「博物館のメタモルフォーゼ」などと耳慣れない言葉を使って恐縮であるが、博物館が求められている役割が、従来の社会教育機関としての博物館、あるいは文化財保存施設としての博物館などから大きく変容、変身、転生（独語、Metamorphose）することが求められていることから、どのような言葉が適切であるかといういろいろ考えた結果、本稿のタイトルにメタモルフォーゼという言葉が適切ではなかろうかと考えた。

私が、メタモルフォーゼという言葉を使ったのはゲーテ（ドイツの詩人、小説家、政治家、自然科学など多彩な才能の人物。1749-1832）の自然観察の解説を知り、ゲーテが説く植物のメタモルフォーゼは極めて重要であるということが耳に焼き付いていたからである。

本稿のタイトルの「博物館のメタモルフォーゼ」は、博物館そのものが生物のごとく、常に変容して活動してゆくことが求められていることを示し、実際、新たな「…博物館」と名付けられた博物館活動に類した活動を見てゆくとメタモルフォーゼという言い方が適切であると感じる。

そのような博物館の様々な活動を知っていただき博物館のおかれた現在の状況を的確に知る手掛かりとして、本紀要で「特集：まちと博物館」として組んでいただき 4 編の原稿を掲載させていただいた。

「博物館のメタモルフォーゼ」では、今日における様々な地域の文化資源の保存と活用に連携した活動に取り組んでいる事例を紹介し、多様な博物館活動に類した活動からさらなる次への変容の必要性について論じる。

「地域を活かすエコミュージアム」では日本で初めてエコミュージアムを紹介し、推進してきた一人である里見親幸氏にエコミュージアムの歴史と今日的な取り組みの事例を紹介し

ていただいた。今日の町おこしや地域活性化の方策としてエコミュージアムの考え方を取り入れている事例が数多く見られるが、基本的な考え方を無視し長期的なビジョンの無いまま取り組んでいる事例への警鐘として、改めてエコミュージアムとは何かという観点から原稿をいただいた。

「松本まるごと博物館の歩みと実践活動から」は地域の博物館連携を実現し、文化資源の活用さらに地域社会の活性化に努めている松本市の取り組みについて、窪田雅之氏に寄稿いただいた。

「学校と地域博物館の「連携」から生まれるもの」は博物館活動と学校との交流を明確なコンセプトのもとに実施し、児童生徒の博物館利用の典型を確立している美濃加茂市民ミュージアムの活動について可見光生氏に寄稿していただいた。

本特集で紹介されている取り組みはまさに「博物館のメタモルフォーゼ」と呼ぶにふさわしい活動であり、どのような博物館であっても何らかの形で自館の活動に取り入れてゆくことによって大きな変容、変身、転生が図られると思われる。

1.まちと博物館

シンポジウム「まちと博物館」(注1)



写真1 「まちと博物館」シンポジウム

シンポジウム「まちと博物館」が平成22年12月11日(土)、常葉学園大学を会場として開催された。このシンポジウムでは「街かど博物館」「田園空間博物館」「まるごと博物館」「観光と博物館」「エコミュージアム」「博学連携」などをキーワードにして博物館を取り巻く様々な活動を紹介し、その現状を分析し、そこから出てくる課題を明らかにし今後の展望を図ろうとするものであった。このシンポジウムは以下のプログラムで開催された。

第1部 地域と博物館

発表I 「博物館と地域との連携」に関わる今日的課題
日比野秀男

発表II エコミュージアムとまるごと博物館の歩み
里見親幸

第2部 学校と博物館

発表III 博物館と地域における生涯学習
可見光生

発表IV 静岡県立美術館と学校
鈴木雅道

第3部 パネル討議

このシンポジウムの概要報告(注2)は別途、発表しており、ここでは多様な博物館活動の現状について事例を述べつつ検討することとしたい。

まるごと博物館

インターネットで「まるごと博物館」で検索すると実にたくさん事例が見られる。前述したシンポジウムで「街かど博物館」「田園空間博物館」「まるごと博物館」など様々に言われていることを紹介したが、結局は地域全体の文化資源のネットワーク化、文化資源の活用、地域の活性化を図っているのである。

「まるごと」をはじめ「街じゅう」「まちかど」など様々なタイトルがついてはいるが、地域全体を博物館化しようとするのである。その地域全体つまり「まるごと」ということは、文化資源を選別するのではないことから、ある意味からいえば古いものから新しいものまで、美術でいえば芸術的価値の高いものから児童生徒の作品まで、評価という視点よりもどのように

取り上げるかが問題とされる。資料という存在は重要ではあるが、それよりも資料にまつわる情報、つまり人びととどのようななかかわりの中で地域と資料が存在するかということを一層重視する視点である。また、地域とのかかわりを重視する視点から伝統ともかかわりをもち、地域のマイスターという視点も出てきている。

ここでいくつかの事例を具体的に見てゆくこととしたい。

「松本まるごと博物館」

別の論考で窪田雅之氏が詳細に論じているが、松本市を訪れた一人の旅行者という視点からの感想を述べてみることにしたい。

市町村合併により松本市も博物館施設が一気に増えた。これまで各市町単位で設立されていた博物館、資料館の施設が当然のことながら整理の対象となってくる。施設を統合し、職員も整理すれば合理化が進み行政改革の進展となる。しかしながら、それらの施設に集められた実物資料はもとより写真やビデオなどの映像資料、地域の個別情報など長い時間をかけて集積された資料が失われることとなってしまふ。市町村合併によって博物館、資料館の統合廃止だけでなく具体的に一番困るのは収蔵された資料をどのようにするかということであろう。

松本市も市町村合併によって博物館施設も増え、現在17施設がある。

基幹博物館として松本市立博物館があり、その他の館との連携が明確な形となって活動している様子が知られる。優れた文化資源が豊富で、もともと観光都市として発達してきた松本市ならではの博物館の連携活動であるといえよう。

「松本まるごと博物館」では、観光客の誘致あるいは地域の活性化という視点だけではなく、市民とりわけ未来を担う子供たちとのかかわりを重視している。市内の小中学生の親子に博物館に足を運んでもらいたいということで「博物館パスポート」(小・中学生親子、博物館等優待券)を市内の全小中学生に配布している。松本市立博物館から市内に所在する博物館あるいは旧開智学校、国宝・松本城など17の施設の優待券となっている。この博物館では山国の生活を積極的に記憶の中に残す展覧会や冊子の刊行などをするとともに

注1 共同研究「まちと博物館」として平成22年度常葉学園大学共同研究助成事業として採択され、シンポジウムを実施した。共同研究者 日比野秀男、猿田真嗣、安藤雅之、渋谷恵

注2 「常葉学園大学研究紀要(教育学部) 第32号」(平成24年2月)

地域に根ざした活動を継続的に実施していることに注目したい。ただ、観光客向けだけの活性化ではなく地域住民の活性化と結びついた活動といえるのではなからうか。

松本市立博物館の歴史は古く、ある意味で言えば地域密着型の博物館である。そうした中で博物館活動のメタモルフォーゼを実現してきている。

詳しい内容については窪田氏の論文を参考とされたい。

「三浦半島まるごと博物館」

これは神奈川県横須賀三浦地域県政総合センターが推進している活動である。博物館という名称がついてはいるが箱モノの博物館があるわけではない。自然、歴史、生活文化などに関わる団体が加盟している連絡会である。同連絡会で発刊した『とっておきの三浦半島 アラカルト みうらはんとう』の「はじめに」で連絡会の目的などについて次のように述べられている。



写真2 『とっておきの三浦半島』

三浦半島まるごと博物館連絡会の持つ役割とは、同じフィールド内で違った視点をもつ者があらゆる角度からそのエリアについて学びあい、情報を交換する場であろうと思っています。(山本詔一)

ここで述べられている通り神奈川県の三浦半島という地域で自然・地質・環境・歴史・民俗・文学など様々な分野で活躍している団体の連絡会である。

地域的には横須賀市・鎌倉市・逗子市・三浦市・葉山町の4市1町で参加団体数としては51団体(平成21年12月現在)が加盟している。同連絡会の発刊している冊子は次のとおりである。

『とっておきの三浦半島』(平成19年3月)

『とっておきの散歩道』(平成20年3月)

『とっておきの風景』(平成21年3月)

『とっておきのはなし』(平成22年3月)

合計4冊のガイドブックが刊行されているが、参加団体が自然、歴史など多様であることを反映して内容的にも多様である。『とっておきの三浦半島』では、三浦半島全体の概要を解説している。同書の「はじめに」の冒頭に次のようにある。

三浦半島まるごと博物館連絡会が発足して丸2年が過ぎようとしています。横須賀・鎌倉・逗子・三浦・葉山の4市1町で自然・環境・歴史・民俗・文学などそれぞれの分野とフィールドで活躍されている38団体が自分たちの会をより多くの人たちに知ってもらうことを目的にして、この冊子を作りました。

そのために、それぞれの会のとっておきをここに披露してもらい、私たちが住んでいる地域がいかに恵まれた環境にあり、またこの環境を次世代に残すことがいかに大切なことであるかを知ってもらうことの第1歩として発行します。

ここに述べられている通り関係する団体が自然・環境・歴史・民俗・文学など多彩であることが特色の一つであるといえよう。これまでこのような団体が結成する場合、自然ならば自然系の団体、歴史ならば歴史系の団体などと分野が近い団体が集まる傾向が一般的である。この分野が横断的であることによって、どのような形でまとめたかについて次に見ることしよう。

私自身は、この連絡会に加盟している「猿島の会」のガイドツアーに参加したのであるが、これらの冊子の中で、「猿島の会」がどのように紹介されているかを見てみよう。

『とっておきの三浦半島』(平成19年3月)では「1、横須賀(横須賀市の概要)、鎌倉(鎌倉市の概要)、逗子(逗子市の

概要)、三浦(三浦市の概要)、葉山(葉山町の概要)」というように三浦半島を市町ごとに紹介しており、猿島は「1、横須賀(横須賀市の概要)」の中で紹介されている。内容は「1 要塞、2 海、3 植物、4 地形・地質、5 ペリー提督、6 伝説、7 ウミウの越冬、8 環境問題、9 戦争」などが2ページにわたって紹介されている。ここで見る通り、自然、歴史、環境問題、伝説などを紹介し昭和20年8月30日、イギリス軍によって接収されたことを記す。

『とっておきの散歩道』(平成20年3月)

散歩道として一般的には利用されていないことから紹介記事はない。

『とっておきの風景』(平成21年3月)

「5 猿島の「砂浜と要塞」として、「砂浜と電柱」「レンガ造のトンネル」の2枚の写真を紹介し、猿島の歴史と現状について解説している。

『とっておきのはなし』(平成22年3月)

「8 猿島に伝わる話」として日蓮上人伝説、大蛇伝説、ホラガイ伝説、猿島まで泳いで行ったよ！などの話が紹介されている。



写真3 猿島ツアー

このように猿島という島を紹介するだけでも多彩な視点から紹介している。猿島の歴史、伝説、自然など様々な内容である。猿島全体を知ることのできる内容である。つまり「まるごと猿島」の紹介であるといえよう。学問の研究分野が細分化し、各分野の連携が見失われてきている。猿島について知ることには軍事施設としての興味、あるいは優れた自然環境の紹

介など、いくつもの視点がある。私が参加した「猿島ツアー」はレンガ作りの軍事施設の見学が主であったが、ガイドの方は植物や海の生物などについても紹介していた。参加者も要塞に興味をもって参加した方が多かったのであろうが、植物や海の生物についての解説もあつと驚くようなものであったに違いない。

『とっておきの三浦半島』(平成19年3月)の「はじめに」の末尾で「三浦半島まるごと博物館連絡会の持つ役割とは、同じフィールド内で違った角度からそのエリアについて学びあい、情報を交換する場であろうと思っています。今回の冊子が、この手引となり、いくつかの会が共同で違った角度から同じエリアを見直すことで、よりよい生活環境を築き、それを次世代に送るパイプの一助となればよいと思っています。」と述べられている。

毎年3月に開催されている「三浦半島まるごと博物館連絡会フォーラム」においては加盟会員が参加し、前半は活動事例発表があり、後半は関連する講演がなされる。

「三浦半島まるごと博物館連絡会 フォーラム2010 よこそ！エコミュージアムへ〜気づいていますか？あなたのまわりの地域資源(たからもの)」の内容は以下のとおりである。

- 講演 『文化財から文化資源へー三浦半島まるごと博物館の居場所ー』
東京大学大学院教授 木下直之
- 事例紹介 横浜国立大学大学院教授 大原一興
- 活動事例発表 エコミュージアム活動団体
三浦半島の今昔写真展ほか

などの内容である。さらに「連絡会つうしん」(A4、4ページ)が6月、9月、12月、3月の年間4回発行され、ホームページなどとともに会員の情報を紹介し、各イベントの紹介をしている。会員あるいは一般参加者にとっても最も大きいメリットは、このイベント情報である。

この「三浦半島まるごと博物館連絡会」はこれまで考えられてきた博物館とは全く異なっている。地域の文化団体の連絡会であり、「まるごと博物館」という名称について適切であるかどうかという疑問も出てくる。しかしながら既存の博物館

が実施してきた活動を発展させたものであるといえ、広い意味での博物館活動であるといえよう。

「松本まるごと博物館」は博物館同士の連携を強めた活動を実施してきていることから、これまで「博博連携」と言われた博物館同士の連携をより一層強め、地域全体の博物館の連携をはかったものである。

「三浦半島まるごと博物館連絡会」の成立に神奈川県が存在が大きかった。現在も情報センター、あるいは連携活動の中心を占めており、行政の役割が大きかったことが知られるのである。今後、この連絡会が自立できるのか、あるいは行政の果たす役割が引き続き必要とされ、そうした全体的な枠組みで進展してゆくのか注目したい。

田園空間博物館

「まるごと博物館」あるいは「エコミュージアム」をキーワードとしてインターネットで検索してみると「田園空間博物館」というものが出てくる。(注3)

農林水産省の「農山漁村の活性化」事業の中で推進されてきているものである。平成23年10月現在、全国31県で56か所設置されている。滋賀県では5か所、静岡県では遠州南部、奥浜名湖、駿河岡部の3か所に設置されている。その趣旨は以下のとおりである。

農村には、美しい景観や豊かな自然のほか、人びとの営みによって長い間に培われてきた伝統や文化など、様々な魅力が存在しています。これらの様々な魅力を博物館の展示物と見立て、農村地域を一つの「屋根のない博物館」として保全・活用しようという取組が「田園空間博物館」です(農水省ホームページより)。

さらに、「田園空間博物館の基本的な考え方」として以下のように述べている。

農業、農村の営みを通じてはぐくまれてきた「水」と「土」と「里」が織りなす地域資源を歴史的・文化的視点から見直し、伝統的な農業施設や美しい景観を空間全体として整備・再生し魅力ある田園空間を生み出す取り組みです。これらの取り組みの中では、地域住民が主体的に地

域資源を活用して歴史教育、都市との交流、自然観察、体験活動などを展開しています。

静岡県藤枝市岡部町に所在する「駿河岡部」の説明は以下のようになっている。

概要

朝比奈川流域に広がる地域で、河川の周囲に僅かに広がる平坦部で米をつくり、斜面を切り開いて茶やミカンを育ててきました。限られた生産基盤のなかで、独自の高品位な特質化に努めた結果、「玉露茶」や良質なミカンの産地を築きあげてきました。

さらに、歴史的特質として以下のように加える。

本地域は、わが国における東西文化交流軸の沿線に位置することから、多様な農村文化や農業技術が伝えられてきた地域です。

藤枝市岡部町と静岡市の境にある「宇津ノ谷峠」は、東西交通の要路として貴重な位置にあり、東海道の難所の一つとなっています。在原業平が「伊勢物語」で「駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」と詠んだ、平安時代の官道である「葛の細道」は、奥の細道、大和山辺の道と並んで日本三細道と呼ばれ、文学散歩のハイキングコースとしても人気があります。その後、豊臣秀吉が小田原征伐のため旧東海道を開き、明治時代にはトンネルが掘られ、昭和、平成と時代の要請を受けて新たなトンネルも開通しました。これらの外道はその形を変えつつ、農業・農村の歴史を現在に伝えています。

こうして、コア施設の展示となるが、また、地域の散歩コースの紹介ともなっている。「豊かな自然と親しむ」「人びとの営みと文化を感じる」「土地の歴史に触れる」「体験する」などが紹介されている。

「駿河岡部」のコア施設は旧東海道(旧国道1号線)の岡部宿のほぼ中央に所在する。現在は観光案内所を兼ねており、必ずしも活発な活動をしているようには見えなかったが、「遠州南部(とうもんの里)」(掛川市山崎に所在)ではNPO法人 とうもんの会が中心になって活発な行事が組まれている。



写真4 「田園空間博物館・駿河岡部」

例えば、平成22年度の年間事業では「イベント」「農業体験」「食体験」「自然観察部」「企画広報部」「歴史を訪ねて」「そば打ち体験講座」「手しごと講座」「ばあばの料理講座」「食加工講座」「ガーデニング講座」「エコな暮らし講座」などの行事が、ほぼ毎月各1回ずつ組まれている。平成23年1月では以下の行事が組まれている。

食体験部	7日	七草粥を作ろう
ばあばの料理講座	8日	旬菜料理
企画広報部	9日	親子で楽しむ昔ながらの遊び
そば打ち体験講座	16日	そば打ち体験
歴史を訪ねて	21日	城主の墓所巡り
食加工講座	22日	干し芋
エコな暮らし体験	23日	風呂敷を楽しむ

このように実に多彩な内容のイベントが組まれている。これまでの社会教育施設で実施されてきた行事でもあり、博物館で実施されてきた行事でもある。そのほかの行事としてはNPO法人の研修旅行、役員会、全体会などの行事も生まれ、他県からの視察の対応にも追われているようである。

また、年間行事として、「朝採り昼市」では、季節野菜、加工品、鰻、しらす、手工芸品などを販売(毎週金・土・日、9:00~17:00)している。その他、「農業体験」「農村・自然観察」「食加工体験」などの体験イベントも組まれている。

これまで見てきたとおり「田園空間博物館」の活動はこれまでの博物館活動の教育普及活動、あるいは体験講座とい

うものに突出した活動であるといえよう。地域の資源を生かし、地域の人材を活用し、農山漁村の活性化という目的にもかなう活動である。

つい最近、袋井市浅羽町の静岡県指定文化財となっている「中新田命山」(注4)を見たとき、田園空間整備事業として駐車場、解説看板などの整備がされていることに気がついた。地域の文化財保護が静岡県中遠農林事務所の事業ともかかわって整備されていることは文化財の活用の観点からも貴重な試みであると感じた。

農水省の「農山漁村の活性化」という施策は16件挙げられているが、文化財保護行政あるいは地域の活性化の事業と関わりをもって進んでおり、相互の連携がさらに進展することにより多角的な視点からの文化遺産の保護がなされてゆくであろう。



写真5 「中新田命山全景」



写真6 「中新田命山解説板」

注3 以下の文章は注2に「まちと博物館」のタイトルで発表したものから一部引用させていただいた。

注4 「命山」という名称には驚く。つまり命を守ってくれた山である。この地域は地盤が低く、大潮のときは一面に海水につかる。確かに小高い「命山」から周囲を見渡すと一面、広い田んぼである。今日でも僅かに高いところは国道のみである。人の手によって大潮から避難するために小高い山を作ったのである。

街かど博物館

「田園空間博物館」が農山漁村の活性化と結びついた活動であるのに対し、街中の活性化と結んでいるのが「街かど博物館」などと呼ばれるものである。

ここでは東京・墨田区の「小さな博物館」と神奈川県小田原市の「街かど博物館」の2例を紹介することとしたい。

「小さな博物館」



写真7 両国駅近くにある案内所

東京都墨田区の両国界隈は下町情緒が残り、伝統的な商工業の町である。産業と文化を見直し、それを礎にして町づくりを図っている。「小さな博物館」と名が付いている通り、各お店が工房であり、小売店であり、さらには博物館的に産業を紹介するようになっている。

名前を見ても例えば、「桐の博物館」「相撲写真博物館」「羽子板資料館」「両国花火資料館」など両国という土地に結びついた文化、産業そのものを紹介する小さな博物館である。

『すみだ新発見ものづくり探訪』（小さな博物館、工房ショップ、すみだマイスター）を参考にして内容についてみてみよう。ここにある通り、3つのキーワードを使って墨田区を紹介しようとしている。

「小さな博物館」運動

墨田区の産業や文化に関するコレクションを紹介する「小さな博物館」運動。優れた職人技や珍しいコレクションの数々があなたの目の前に！展示品にまつわるエピソードや

こぼれ話を館長さんから直接聞いたり、まったく異なるジャンルの博物館を”はしご”して歩いたり…区民の手による地域に根ざした小さな博物館には、大きな博物館にはない魅力が満載です。

相撲写真博物館、足袋博物館、桐の博物館など24館が参加している。



写真8 足袋屋店頭での展示風景(右側に相撲取りの足袋を展示)

「すみだ工房ショップ」運動

「すみだ工房ショップ」は、工房（製造現場）と店舗が一体化した新しいスタイルのショップです。ショップでは、オリジナル商品が創られ、自らの手で消費者に販売されています。消費者には、ものづくりの現場を自らの目で確認し、オーダーメイドできるメリットがあります。「工房ショップ」運動では、個々の顧客のニーズに応えながら、ものづくりの楽しさ・素晴らしさを伝えていきます。

羽子板の鴻月、江戸木箸・大黒屋、向島めうがや、など22工房が参加している。

「すみだマイスター」運動

墨田区では、付加価値の高い製品を創る技術者を「すみだマイスター」に認定しています。墨田の産業を支えてきた優れた「技」を普及・継承するとともに、墨田を代表する産業に育てることを目指している。

羽子板づくり、革製品、建築漆工などの技術者38人が認定されている。

このようにして、両国に根付いた産業と文化を紹介してい

る。この墨田区の活動で最も注目すべき点の一つは見学コースを徹底的に設置していることである。「歴史文化探訪コース」として以下のようなコースを設定している。

1、両国・回向院コース(約1.5時間)、2、吉良邸・勝海舟コース(約1.5時間)、3、本所築地奉行コース(約1.5時間)、4、葛飾北斎コース(約1.5時間)、5、職人工房 北コース(約2時間)、6、職人工房 南コース(約2時間)、7、大相撲体験コース(約4.5時間)、8、鬼平と歩く両国 堅川(昼)コース(約4時間)、9、鬼平と歩く両国 堅川(夕)コース(約3時間)、10、鬼平と歩く両国大横川(昼)コース(約4時間)

また、「ぶらり両国街歩きツアー」として墨田区観光協会が募集するツアーがあり、「両国北コース」ではJR両国駅近くにある両国観光案内所から旧安田庭園、横網町公園、徳山稲荷神社、八角部屋・錦戸部屋、葛飾北斎生誕の地、津軽上屋敷跡、江戸東京博物館を徒歩で見学するコースとなっている。これは土日祭日と大相撲東京場所開催日に実施されているが、5名以上のグループであれば、ガイドによって案内してもらえるようになっている。

いずれにしても墨田区の「小さな博物館」は地場産業と文化と密着した活動である。

「街かど博物館」

神奈川県小田原市の『街かど博物館ガイドマップ』に以下のように解説している。



写真9 小田原街かど博物館ガイドマップ

「街かど博物館」とは

小田原には古くから栄えた産業文化を今に伝える地域資産がたくさんあります。かまぼこ、漬物、菓子、ひもの、塩辛、そして木工などの地場産業がその代表的なものです。工夫を凝らした展示、お客様との会話、さらには体験を通して、小田原の産業にかかわるひと・製品・ものづくりの結びつきを知ってもらうことにより、小田原の魅力を高めようとするのが「街かど博物館」です。是非このガイドブックを片手に「街かど博物館」めぐりをして下さい。

このガイドマップは「小田原駅周辺エリア」「旧東海道エリア」「板橋・早川エリア」の3エリアに分けて紹介している。

小田原駅周辺エリア

- ①塩から伝統館(小田原みや吉兵衛)
- ②倭紙茶舗(江嶋)
- ③菓子どころ小田原工芸菓子館(栄町松坂屋)
- ④漆・うつわギャラリー(石川漆器)
- ⑤漬物・佃煮・惣業工房(田中屋本店)
- ⑥砂張ギャラリー鳴物館(柏木美術鋳物研究所)



写真10 小田原宿なりわい交流館

旧東海道エリアには7か所、板橋・早川エリアには5か所の施設がある。いずれも販売する商品があり、それを購入するあるいは体験するなどの工夫がなされている。また、ほぼ中央に「小田原宿なりわい交流館」がある。この施設は昭和7年に建設された旧網問屋を再整備し、市民や観光客の「憩いの場」として、平成13年9月に開館した場所である。1階は

「お休み処」(畳15畳)で無料の休憩所でお茶の無料サービスがあり、パンフの配布や案内をしている。2階は「イベント会場」(板の間27畳分)である。板橋・早川エリアは歩いて探訪するには少し離れているが、ほかの2か所は歩きあるいは自転車で散策するのにちょうどよい距離に各施設が所在している。

2. 博物館のメタモルフォーゼ

これまで紹介してきた活動は博物館という名称についてはいるが、これまでの博物館活動のある部分を突出させて活動をしている。以下のように整理ができればよい。

- ① 既設の博物館の連携を強化し「まるごと博物館」として活動をしている。
- ② 地域の文化団体の連合体として組織化し、各団体の活動を支援するとともに地域の文化資源の保存と活用、普及啓発に資している。
- ③ 地域の地場産業の育成と活性化に努めている。これは商店街の活性化だけでなく、農山漁村の活性化も同様である。

既存の博物館は施設があるということから文化資源の保存や展示活用には適した施設である。しかしながら一番の弱い点であった、現場から離れざるを得ないという弱点があった。産業として「かまぼこ」を紹介するには写真、パネル、レプリカなどで「かまぼこ」を紹介せざるを得なかった。これまで紹介した現場に所在する博物館は製造を体験し、匂いをかぎ、商品を購入するということが可能となったのである。ここで紹介した施設の多くが体験あるいは実物を見るということが可能であった。

各地で「博物館」という名称を使用していることは「博物館」に対する魅力を感じているからこそ「…博物館」という名称を付けているのであろう。地域の文化資源は歴史あるいは文化的な遺産のみが文化資源ではなく、商業や産業遺産も貴重である。その貴重さの水準をどのように考えるかで各地域の「…博物館」の一員に加えられたり、伝統的な技術の伝承者としての認定などの制度ができていく。

「三浦半島まるごと博物館」の各文化団体の連合体は相互の情報交換あるいは研修の機会となっているのであろう。

私が参加した「猿島」の見学ツアーではほかの団体の会員が参加していた。これは、ほかの団体がどのようにツアーを行っているか実際に見る機会であった。

これまで見てきた各地の「…博物館」はエコミュージアムを起点として巧みに変容し「地域の活性化」を図っている。各地の商業、文化の振興に柔軟な姿勢で対峙してきているのである。既存の博物館側から「エコミュージアム」に対してはあまり関心もたれなかったという里見氏の指摘はとりまおさず今日における観光、地域振興などの視点が必ずしも十分でない状態となっていることは否めない。また、その辺が限界であるかもしれない。そういった意味から学芸員の存在や保存研究施設、展示施設などをもち、さまざまな機能を有している博物館の存在が改めて重要であることを気づかせてくれるのである。

ここで紹介した活動の基本はエコミュージアムの考え方にあった「サテライトとサテライトを結ぶトレイル」つまり点と点を結ぶ線を重視していることである。「三浦半島まるごと博物館連絡会」は各団体のツアーを積極的に紹介している。「小田原街かど博物館」では3つのエリアに分け案内をしている。多くの場合、徒歩が移動手段である。両国小さな博物館もそうである。点と点の間にある道筋にも大きな魅力があるかどうかである。現場での体験重視とウォーキングの楽しみが重要な要素となっている。

おわりに

木村直司編訳『ゲート形態学論集 植物編』(ちくま学芸文庫)を読み返してみると、各地の「まるごと博物館」活動が旧来の博物館活動の変容であることを改めて認識させてくれた。そのような活動を植物のメタモルフォーゼと同列に論じることは無理かもしれないが、ある点では共通するようにも感じられた。そのような活動を似非博物館活動と見るのかというところばかりも言えない。実際問題として、それらの活動が地域の活性化あるいは地域資源の保存活用に貢献しているからである。

既存の博物館の入館者数は一般的には減少傾向が大きいく、いかに対応したらよいか関係者にとっては頭の痛い問題である。様々な変容している活動を逆に博物館側が取り入

れてゆくと新たな展開がみられるのではないかとも思われる。

今日の様々な「まるごと博物館」と呼ばれる活動を見てきたが、それぞれの良い点と課題が見えてきた。既存の博物館側から地域全体の活性化を目指した活動が求められていることは言うまでもないことである。

付言

本文でも触れたが「常葉学園大学研究紀要(教育学部)第32号」(2012.3)で発表した「まちと博物館」と一部、重複する部分があることをお詫び申し上げるとともに、同紀要に掲載されている猿田真嗣、安藤雅之、渋谷恵の各氏の論文も併せてご一読いただければ幸いである。

特集:「まちと博物館」II

地域を活かすエコミュージアム

丹青研究所研究顧問 里見 親幸

I. エコミュージアムとは

1. エコミュージアム誕生の背景

エコミュージアムは、フランスのジョルジュ・アンリー・リヴィエールによって、1960年代に誕生したミュージアムの理念である。原点は北欧のオープンエアミュージアムにあると言われていた。リヴィエールは、世界の博物館をリードする国際博物館会議(ICOM)の初代会長として世界の博物館を指導していた。当時のフランスは、非常に中央集権的な色彩が濃い時期で、民主化してより住民に開かれたミュージアムをつくらうという動きがあった。エコミュージアムというのは「エコロジー」という言葉と「ミュージアム」という言葉の合成語である。エコロジーの語源は、ギリシア語のオイコスと言う言葉につながる。オイコスとは、家とか家族とか家計という意味であって、オイコスから導いたドイツ語のオコロギーは生態学、オコノミーは経済学であり、この2つの言葉を合わせて、よりよい人間の生活を築こうということで、エコミュージアムという言葉が誕生した。ここでは、エコという言葉は社会環境、自然環境を含めた人間環境という視点を示している。

2. エコミュージアムの定義

エコミュージアムの定義は、自らを映し出す鏡であると言っている。これは自己のアイデンティティを写し出し、自分と出会う場ということであり、エコミュージアムの展示や活動の中に、住民の心を反映させようとするものである。また、自然環境と人間生活の表現の場と定義し、現在を豊かに生きることとしている。そして、時間と空間の表現という定義は、過去から今日までの住民の歴史を踏まえ、地域の中の自然や文化を有機的に繋げて時代に合った新しい価値を生み出し、よりよい未来を築いてゆくとしている。

3. エコミュージアムの目的

これまでのミュージアムは、文化や学術・教育に寄与するという目的があるのに対して、エコミュージアムでは、地域社会の発展・振興に大きく寄与するという目的がある。従来のミ

ュージアムの目的を手段とした地域の振興、あるいは地域の発展のためのミュージアムである。今までのミュージアムが、行政主導でつくられ運営されるのに対して、行政の力と住民の力、これを両方合わせて一体化して、ミュージアムをつくり運営することから、フランスでは「二重入力方式」という言い方で表現している。今までは、行政内部で何もかも決めてしまい、住民と行政が時間をかけ合意し一致点を見出していこうという努力が十分ではない。自分たちで苦勞してつくりあげる実感がなければ、博物館への愛着が住民の心の中に育ちにくい。エコミュージアムは、住民が自分たちが生きている歴史的空間を確認して、地域アイデンティティを確立し、そこから未来の地域を創造していくという市民の主体的取り組みを最も重視している。

4. エコミュージアムの構造

<テリトリー・コア施設・サテライトミュージアム・ディスカバリー・トレイル>

今までの博物館が、一つの建物であるのに対して、エコミュージアムは面としての広がりを持つミュージアムである。したがって、まずミュージアムの範囲を決めることから始まる。この範囲をエコミュージアムでは、テリトリーと言っている。テリトリーは、一市町村の中にあるもの、市町村を丸ごとテリトリーに定めるもの、数市町村に跨るものなどさまざまである。エコミュージアムの領域は、生活圏とか文化圏を中心に設定されるのが一般的である。その領域の中に「コア」という核ミュージアムがあり、従来のミュージアム機能のほかに、エコミュージアム全体の総合案内センターや、分散するサテライトミュージアム事業を含めた全体企画の運営を行う。コア施設の周辺にあるのが、「サテライト」と呼ばれるものである。サテライトの対象となるものは、自然遺産、文化遺産、それに産業遺産等が挙げられる。これらの遺産は、現地保存が原則となっており、現地の環境のなかで整備して、見せていこうというものである。そして、これらのサテライトは、地域に点在しているので、それを見学するコースとして、「ディスカバリー・トレイル」(発

見の小径)をつくり、観察の対象に応じたルートの整備を行なって、いくつかのコースを設定することになる。

5. エコミュージアムの機能

エコミュージアムの機能は、研究機能、保存機能、学習機能の3つの機能がある。

(1) 総合的に地域を研究する機能

地域に残る貴重な資料も、調査研究活動を通して初めてその価値が判り、調査研究の充実によって資料に命が吹き込まれる。調査研究によってより質の高い展示や教育普及活動が行われ住民に還元されるということは自明である。エコミュージアムの研究機能は、深く細分化された学術内容について研究するのではなく、各学問を連ねて全体として判断する統合化の研究を重視している。一般的にミュージアムは大学と違い統合化する研究が多いのであるが、地域の発展を目的とするエコミュージアムは、学際的な研究がさらに重要である。地域の歴史、文化財、自然、産業などを、学際的な科学のフィルターを通して、複合的研究の成果が地域全体を振興させ発展させる。学芸員や研究者による地域研究だけにとどまらず、住民と連携できるプログラムを提供し、多くの人が積極的に参加できる活動を根付かせることが重要な鍵となる。今日の厳しいミュージアム運営予算の中で調査研究が十分に進められない現実ではあるが、大学や研究機関等との共同研究のテーマを探り積極的にネットワークを図り進めてゆく工夫が必要である。

(2) 自然や文化財の保存機能

エコミュージアムの保存機能は、地域の自然保護、文化財保護などに対して、中心的役割を果たすなど地域の保護センター的な役割をもっている。また、保存するとともに積極的に活用するプログラム開発が求められる。地域に残されている様々な自然遺産、文化遺産、産業遺産は一ヶ所に集めるのではなく、現地において整備保存し、守るだけでなく活用することによりその価値を広く伝えていくための保護育成機関である。原則は現地保存であるが、ものによってはコア施設の展示室で保存科学上の安全性や背景となる情報を加え、より深い理解を図るなど、サテライトとコア施設の実物資料の在り方を研究した上で、柔軟に考えて展示は行われる。

地球環境を考えることも、エコミュージアムの重要な保護育成機能である。

今日のグローバルな世界は相互に大きく影響しあい、水不足の問題、食料の不足や汚染の問題、資源の枯渇、エネルギー問

題等々、未来を生きる子ども達にとって大きな不安の中にある。エコミュージアムは人間と人間をとりまく環境との関わりを考え、身近なところから出発して自然や環境に負荷を与えない共存する暮らしについての価値観を育て考える活動が重要である。

(3) 生涯学習の機能

住民が生活の場である地域の中に埋もれている「もの」や「こと」を理解し、再度光を当てて、アイデアを練り、ストーリーをつくり、その地域ならではの「宝」に仕上げていくことが重要である。これらの過程はコンサルタントに任せるとはならず、住民が中心になって考えるということが継続性という点において欠かせないことである。コンサルタントには、アイデアのヒントや進め方及び他の事例を学ぶ意義は大きい。後は自らが主体となって生涯を通して推進していくことで、継続的に世代間を紡いでゆくことが可能になる。エコミュージアムは行政、住民、専門家をコーディネートし、地域住民への各種情報の提供、自発的学習活動や研究活動への助言など、市民とのコミュニケーションを深めながら、豊かな地域を創造していくところに、エコミュージアムの生涯学習機能の意義がある。

そして、子どもの時からエコミュージアムに親しみ、それぞれ発展段階に応じて学校や地域社会を通して自己学習能力を身につけ、その学習の成果が地域やエコミュージアムに蓄積され社会に還元されていく。さらに深く学習が進められ活用されていくことにより、個人や社会をより豊かにしていく。こうしたエコミュージアムをめぐる生涯学習サイクルを構築することが重要である。

6. 時代のニーズに合った新しいミュージアムへ

創設者のリビエールは、エコミュージアムの定義を作成するあたり、次のように述べている。「エコミュージアム、それは時代とともにたゆまず発展していく機関である。よって常に新しく、活力あふれた姿がはつきりと現れてくる。私はエコミュージアムの定義を準備し、それをその都度、エコミュージアムづくりに取り組むグループに委ねる。(中略)ある時が来れば、彼らが彼らのやり方でエコミュージアムの概念を打ち立て、それをさらに充実させ、そして、修正していくことを願う。」このように、リビエールが考えるエコミュージアムとは、理念的には統一するが、その実態・形態はそれぞれのエコミュージアムの自由裁量とする意図があり、恒常的、画一的な博物館ではなく、人間が成長し社会環境が変化をしていくように発展していくもので、時代により地域によって、様々なエコミュージアムが生まれることを推奨しているものと考えられる。

イギリスの博物館学者であるケネス・ハドソンは「世界の博

博物館関係者の多くがエコミュージアムの効果に気づき始めている。それは、指定したある地域の生態と環境、自然と人間、歴史、伝統及び現在の関心事まで含め、広範囲な知識を与えようと試みており、関連する諸科学を網羅した社会指向型博物館を、明快に言い当てているからである」と述べている。エコミュージアムの考え方の延長上に、「新しい博物館学」のイメージが垣間見えるからであろうと思う。また、ノルウェーのエコミュージアム研究者であるマルク・モールは、「今日、多くの国々で同時平行的に、博物館の社会的役割についての論議がなされ、人々は、博物館が現実的問題への参加の欠如について、非難を行っている。博物館は、新たなモデルの創造という形のもとで、変化するための機が熟しているように思える。エコミュージアムは、ミュージアムの新たなパラダイムとして、ヨーロッパでは捉えられてきている」と述べている。そして、「美術史、考古学、民族学、動植物学、地質学、などの単一分野の博物館から、新しい博物館は、学際的で生態学的な取り組み方を優先する。つまり、人間と自然・文化環境との間の関連性に、重きが置かれる」としている。新しい考えのミュージアムの利用者は、「一般公衆(public)という第三者的立場から、企画・運営に関係する住民(population)へと、変化すべきである」として、「博物館は、住民の文化的、経済的、社会的発展の当事者であり道具である。」とも述べている。

II. エコミュージアムによる地域づくりの進め方

1. 「素材探し」・「仲間づくり」・「展示技術」

成功している地域づくりには、「素材探し」・「仲間づくり」・「展示技術」を踏まえた進め方が行われている。「素材探し」は、自分たちの住んでいる地域の宝を掘り起こす作業であり、歴史・文化・自然・産業等々の地域特有のものを確認することである。「仲間づくり」は、共感して活動へ参加する人づくりである。成功している地域には中心になり、情熱を持って引っ張っていく多くの人がいる。「展示技術」は、素材をもとにアイデアを練る「魅せる技術」である。そして、この地域づくりは地域住民が主体になるべきであると言われるが、いかに地域住民の多くの理解を得るかということが重要で、参加してもらうには人をその気にさせなければならない。エコミュージアムの勉強会、地域づくりサークル交流会、共同調査などを通して共感が生まれ、地域の遺産に強い思い入れを持つ人が仲間となり、組織化していきアイデア集団、実働組織へとなっていく。様々な地域発見の観察会、ウォークラリーなどのミニイベントやシンポジウムなどのビッグイベントを開催し、なるべく

多くの地域住民の参画を促進して活動のすそ野を広げる。

自分達の地域にはこれと言った宝はないとよく耳にするが、地域に残る歴史遺産、文化遺産、自然遺産、産業遺産の中には、「地域の宝」に再生できる多くのものがある。気づかないだけで様々な専門家から知識を得て、新しい時代の光を当てると無用の長物だと思われていたモノやコトが地域づくりに活かせるという自信が湧いてくる。それを通して地域づくりの機運を高めていくことが大事である。まちづくりリーダーを中心としながら、地域住民向けの普及活動を展開し、支援組織の充実を図り、これらの組織化によって素材探し、仲間づくり、魅せる技術をどこまで高められるかが、地域づくりの成否のカギである。

2. エコミュージアムの基本構想・計画づくり

まずエコミュージアムの基本構想をつくることである。エコミュージアムの考えによる地域おこしを成功させるためには、本来のミュージアムのあるべき姿である事実に基づいた科学的な手法で地域づくりに取り組み、そして息の長い活動の蓄積がなされなければならない。今日の地域づくりに欠けている点は、多くの場合将来を見据えた「何のために存在するのか」「どのように機能すべきなのか」といった哲学や理念がない点である。哲学や理念が無ければ一過性になりがちで持続性がない。そして、地域づくりのために中心となるリーダーの養成、活動を推進する組織作り、ビジョンを実現するためのステップを踏んだ進め方について十分に検討する事が大事である。

個性ある地域づくりの為には、基本理念に基づいて地域資源リストを整備し作成することである。住民とのワークショップの中から活用したい要素であるモノやコトの洗い出し、評価を行いリストをつくり、周辺情報を整理(地域資源カード化)する。次に地域資源リストからバラバラにあるコトやモノを集め編み、全体テーマを浮かびあがらせ、そこから各項目別のテーマが設定されることになる。それに基づいて活動構想、施設構想、運営構想を定めて全体のエコミュージアム基本構想書にまとめ地域の進むべき方向性が示されることになる。次は基本構想を具体的な基本計画にする作業である。構想という夢の部分予算などと照らし合わせ、実行可能なものに細部にわたり深く掘り下げた調査を行うのが基本計画の作業である。コア施設、サテライト施設、ディスカバリー・トレールの機能や活動、施設整備方針などについて具体的に検討がなされる。ここまですべてがコンセプトづくりで、これ以降は具体化のための設計や工事及び製作作業に入る。

III. 国内外のエコミュージアムの展開

1960年代後半にフランスで生まれたエコミュージアムは、現在、フランスにおいて138ヶ所(2006年丹青研究所調べ)が誕生し、ベルギー、ポルトガル、ノルウェー、カナダ、そして南米、アジアの諸国など世界に拡大している。海外事例としてフランスにおける代表的な2つの事例を以下に示す。

1. クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ・エコミュージアム



写真1 クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ・エコミュージアムのコア施設

初期のエコミュージアムは、都市住民がバカンスの為に滞在できるよう地方自然公園の中にエコミュージアムを誕生させたが、1972年、パリトリオンの中に位置するブルゴーニュ地方に設置されたクルゾー・モンソ・レ・ミーヌ・エコミュージアム(以下クルゾーと略)は、公園型エコミュージアムと異なる都市型エコミュージアムとして新しい展開を見せた。鉄鋼業の町クルゾー、石炭業の町モンソ・レ・ミーヌという2つの町の住民が核となり、地域の工業遺産を保存し、曾ての住民の誇りだった産業を再確認し未来に繋げていこうと周辺の16のコミューン(市町村)が連合してエコミュージアムがつくられた。所管は公園型エコミュージアムを管轄する環境省から文化省に移管され、クルゾーの誕生以降エコミュージアムは地域振興を目的とした新しいタイプの博物館として世界に注目されるようになった。初期の多くのエコミュージアムは住民参加を前提とする考えを実現することが難しかった。しかしクルゾーは最初から住民を主体とするアソシエーションが運営する博物館として自主的、民主的な運営形態をとったことが注目された。1901年に制定されたアソシエーション法は、日本のNPOと考えが近い組織であるが、結成・活動の自由が大きく保証され、活動に公益性が認められれば補助金などの助成を得ることもできる。クルゾーは、運営などさまざまな新しい試みを意欲的に行ってきたことから「クルゾーの冒険」と呼ばれ、その後世界の多くのエコミュージアムに影響を与えた。今日のフ

ランスでは住民が積極的に参加するアソシエーション型エコミュージアムが8割とも言われる状況になってきている。

2. アヴェノワ地域エコミュージアム



写真2 アヴェノワ地域エコミュージアムのコア施設

産業遺産を中心とするフルミ・トレロン・エコミュージアムは、1981年以来26年にわたり活動を続けてきたが、現在、地域を拡大してアヴェノワ地域エコミュージアムとして新しい展開を図っている。ベルギー国境近くのフランス東北部(ノール地方アヴェノワ地域)に位置し、パリからは約2時間半ほどの距離にある。フルミ・トレロン地域は、羊毛織物、ガラス産業を中心に19世紀には大きく栄えた歴史を持っている。とくにフルミ地区は世界でも有数の毛織物工業地帯であったが、1970年代には衰退してしまった。こうした地域で、エコミュージアムが設置されることになったのは、かつて地域の誇りだった工場の解体に端を発し、工場と紡績機械を遺産として保護するために、地域住民を中心にフルミ・トレロン地域エコミュージアム協会が結成されエコミュージアムとして設立されたのである。開館までの活動として注目されるのは、小学校と組んで「フルミ地方の100年の社会経済生活」と名付けて子ども達に祖父や父親がどのような仕事をし、どのような暮らしをしていたかを学び考える過程を共有したことである。そして、その結果において資料収集に繋がった。エコミュージアムに集まった資料5万点は、全て市民の寄贈によるものである。また、60才以上の人たちを中心にアソシエーションが結成され、失われた庶民の記憶を収集する活動や子ども達の集めた資料に地域特有の意味づけを行って遺産に価値を与えていくという作業がなされた。これらの一連の活動はアイデンティティ形成というプロセスであり、住民の力量そのものを育て住民の意識をさらなる高見に押し上げる結果になるものであろう。

3.山形県朝日町エコミュージアム



写真3 山形県朝日町エコミュージアム「ビーズファーム」

日本でエコミュージアムの実践を最初に取り組んだのが山形県朝日町である。朝日町は最上川が町の真ん中を流れており、日本海側には、国立公園の朝日連峰が聳え、自然に恵まれたリンゴとワインの里として有名である。エコミュージアム研究会を通して、地域に残る歴史、文化、自然、産業を一つの理念で統一して町を見直そうという運動が起こり、行政と住民が一緒になって、町づくりが行われ、平成元年にエコミュージアムの構想が作られた。サテライトには、県重要文化財で現在も人が住んでいる庄屋であった佐竹家住宅や、自然のサテライトとしては、大正14年に国の名勝に指定された浮島の大沼が上げられる。風と共に湖面を島が移動するという大変珍しい現象が見られる。また、新しくサテライトを作りだしたものに、「のんぼかの森」というのがある。農協が設置したもので、のんびり、ほか〜んとする、くつろぐ場所を意味したもので、ここには、温泉、レストラン、炭焼き小屋、リンゴ博物館、農業研究所などがある。空気神社というサテライトも新しく創っており、ご神体は空気こそ私たちの守神であり、きれいな空気を作り出す自然に感謝する心を育てるシンボルになっている。山頂には社の代わりに10メートル四方の大きな鏡面のステンレス板が平らに設置され、空、あるいはブナ林の四季の変化を写し出している。また、養蜂業の人によるビーズファームと呼ばれるサテライトがあり、六角形の形をした蜂蜜の家では蜜蝋作りが行われている。ここでは学校の環境教育の一環として、子供達がおとずれ、蜂を題材に人間と自然との共生を一緒に考える場になっている。朝日町エコミュージアムは現在、NPO法人が運営する自然環境型のエコミュージアムとして活動している。

4.観光とエコミュージアム

わが国の成長産業として、ものづくり立国の先の展望として

観光立国への変貌に力を入れている。世界は大交流時代に突入しており、それぞれの国は独自のアイデンティティ形成を打ち出して、いかに魅力ある観光地を形成するかが課題となっている。国内各地の観光地づくりにおいては、国際観光にうち勝てる質の高さを備える必要が求められる。観光振興とは、従来の名所旧跡に頼るだけでなく、本来それぞれの地域が独自の輝きを高めることであり、観光地で成功しているスペインや南仏などを見ると生きている生活文化そのものに魅力があるところに人々は引き寄せられ、人が集まることにより地域が活性化することが確認されている。従って観光に活路を見いだそうとする各地域は、人が来たいと思う前に、まず自分たちの生活に喜びを感じる地域であるか、そうになっているかが重要で、文化遺産のようなものとおのずと気候や環境の中で生み出された暮らし良さに旅行者は魅力を感じるものである。これからはそれぞれの地域における暮らし良さと景観に磨きをかけることが大切になる。

エコミュージアムづくりは自ずから地域のアイデンティティを浮き彫りにする作業になる。計画段階から住民主体のワークショップをはじめ、住民と行政が一体となって将来の地域社会へのビジョンを描くことにより、観光地づくりと地域づくりを一体化させることができる。エコミュージアムには「記憶を前面に」という言葉が大切にされ、失われた記憶の再現を重視している。

これまでの「ものづくり」中心の世界では、人は語らないでモノに語らせれば良かった。国際競争に勝つための大量生産に適した人は、できるだけ均質で平均値が高い方がよかった。しかし、人が直接競争することになると、個人としての人の力が試されることになり、一人一人がより個性的で魅力的であることが重要な要素となってくる。エコミュージアムでは人づくりへの役割も大きい。究極の観光資源は人であり、私たち一人一人がどれだけ魅力的になれるか、人づくりのソフトを充実させることこそ観光の将来を決定することになる。

5.鳥羽エコミュージアム

美しいリアス式海岸を持つ鳥羽市は、戦後、伊勢志摩国立公園の指定を受けて以来、三重県内有数の観光地として発展してきた。鳥羽市を訪れる観光客は年間500万人前後で推移しているが、近年では景気低迷、観光のあり方の多様化などにより観光客数は減少傾向にある。そのような中で国土交通省の「観光ルネサンス事業」の支援を受け、鳥羽商工会議所の主導で新たな観光資源の掘り起こしや、観光地の魅力アップを図る取り組みが進んでいる。地域に残る自然、文化、歴

史、産業を洗い出してストーリーを紡ぎだし、観光資源のネットワークを図り、テーマに沿った見学コースを作って地域全体を活性化させるエコミュージアムの考えに基づく取り組みである。



写真4 鳥羽エコミュージアム「相差海女文化資料館」

鳥羽エコミュージアムのテーマは「海(あま)文化のくに青都とば」とし、海と共に生きてきた人々の生活と環境に焦点を当てている。「青都」とは青の持つ若々しい様、自然の豊かさ、大和朝廷及び伊勢神宮の真東に位置する鳥羽の五行思想による「青龍」にあたる意味あいなど鳥羽を表現するに相応しいところから名付けられている。エコミュージアム事業による観光まちづくりの展開は、まず市域を文化的特色のある11の地区に分け、歴史や文化の掘り起こしを行い、それぞれの地域には、コンセプトを明快にしたテーマが設定されイメージを膨らませるアイディアと見せる技術の工夫という新しい光を当て、少しづつではあるが確実に進められている。浦村地区では和歌の散策路の整備に向けて、自然の草花や海辺の景観を楽しむ歌碑が設置された。石鏡地区では海女が体を休める海女小屋と漁師が魚群の回遊を見張る魚見小屋の再現整備。鳥羽地区では画家であり、風俗研究家でもあった岩田準一がその大半を過ごした家を「鳥羽みなとまち文学館」(2003年開設)として保存し、内部では彼の絵画や研究資料、交流のあった江戸川乱歩や竹久夢二などとの書簡を展示。相差地域には女性の願いなら必ず一つは叶えてくれるといわれる石神さんと呼ばれる小さな社がある。伝承や伝説も重要な遺産に位置づけるエコミュージアムにとって重要なサテライトであり、マラソンの金メダリスト野口みずきさんが所持したというお守りを求めて全国から多くの女性が訪れている。2007年4月「相差海女文化資料館」もオープンした。国内で海女が最も多いのが三重県であり、鳥羽にはその

半数を超える海女がおり、豊かな海の恵みと共に生活を営んできた。ここでは、妻として、母として、経済的にも家族の暮らしを支えた海女の大きなところが伝わってくる。まちを歩き人々と語り、海女小屋で海女さんの話を聞きながら新鮮な魚貝類に舌鼓を打ち、地域の人々の暮らしに共感する新しい観光の形態が生まれつつあることを実感する。

おわりに

地域づくりは、エコミュージアムが強調する学際的な連なる学問が不可欠であり、産業、経済、文化、教育、防災等々に対して深い洞察が必要である。そしてミュージアムの持つ理念・哲学、科学性を基本に据えて永続的な活動が重要だ。さらに常に新しい時代に合わせて柔軟に見直してゆくことが求められる。フランスと日本では、歴史もシステムも違う。だが、住民が中心となり、自らの地域をより高めて行くエコミュージアムは、あきらかに21世紀のまちづくりに大きく寄与するのは間違いないであろう。

参考文献

- ・Meryl Davies,M(1996)「エコミュージアムを定義する」エコミュージアム研究1
- ・Maure,M.(1993):「Ecomusee,quelques reflexions sur l'apparition, la signification, la diffusion et l'utilisation de ce terme dans divers pays.」
- ・Nabais,A.(1985):「The development of ecomuseums in Portugal. Museum誌:148
- ・Riviere,G.H.(1989): LA MUSEOLOGIE (博物館学)
- ・丹青研究所編 ECOMUSEUM
 <里見親幸-週間教育資料
 「ミュージアム・ナウ」連載記事 教育公論社>
- ・クルゾーモンソレミアヌエコミューゼ
 週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200706
- ・アヴェノワ・エコミュージアム
 週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200705
- ・朝日町エコミュージアム
 週間教育資料「ミュージアム・ナウ」199111
- ・観光とミュージアム
 週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200801
- ・鳥羽エコミュージアム
 週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200707

特集:「まちと博物館」Ⅲ

松本まるごと博物館の歩みと実践活動から

松本市立博物館長 窪田 雅之

はじめに

松本市は、長野県のほぼ中央部に位置するまちで、西に日本の屋根・北アルプス、東に美ヶ原高原を望める。平安時代末期に信濃国府が置かれ、江戸時代には四通八達の地、6万石の城下町として発展した。明治を迎えると筑摩県庁所在地を経て長野県に併合、明治40年(1907)に市制施行した。現在、学都・岳都・楽都の3つのガクトとして知られ、古い歴史や豊かな自然によって育まれた独特の文化が息づき、訪れてみたいまちとして毎年ランキングの上位にあげられている。

市制施行より7か月前、明治39年9月21日、松本市立博物館(以下「本館」と略す。)は当時の松本尋常高等小学校(以下「小学校」と略す。)内に明治三十七、八年戦役記念館(以下「記念館」と略す。)として誕生した。以後、館の名称は何度か変わったが、本館は100余年にわたり学都松本の屋台骨を連綿と支え続け、現在に至る。現在、重要文化財旧開智学校校舎など14館を分館とし、平成12年策定の松本まるごと博物館構想(以下「まる博構想」と略す。)に基づく中核施設として事業を展開している。

まる博構想は、市域全域を屋根のない博物館としてとらえ、市民の暮らしをより豊かにするため従来の博物館とは異なる価値を見出し、未来を創造するための博物館を目指すもので、エコミュージアム的な考え方を援用して策定した地域振興及び生涯学習の推進を含む総合的な博物館整備の基本構想である。以後、本館と分館は一体となってまる博構想の具現化に努めてきた(1)。いっぽう、構想策定から10年以上が経過し、見直しも必要となっている。

1. 明治から続く資料の集積と情報発信

1・1 明治三十七、八年戦役記念館の誕生

記念館誕生の契機は、日露戦争に出征した松本町出身の兵士のほとんどが小学校の卒業生で、彼らが敵兵の肩章などを母校に参考品として寄せたことによる。三村寿八郎小学校長は卒業生の行為に感激し、明治38年(1905)10月に寄贈品を校舎の一室に陳列して時局室とした。その後、資料の寄贈は増加し、時局室は狭隘になったため、三村はこれを機に独立の陳列館設立を計画した。施設は明治三十七、八年戦役記念館として同39年9月に開館した。(写真1)館名は当時の世相を色濃く反映しているが、実物を学校教育に活用したことは注目される(2)。明治期、郷土に目を向けた博物館が開館し現在でも活動している例は地方都市では稀で、本市の博物館設立は日本博物館史上草創期にあたる。



写真1 明治三十七、八年戦役記念館(左)と松本尋常高等小学校

1・2 県内の博物館活動をリード

記念館はのちに長野県から通俗教育奨励金の交付を受け、資料も郷土資料が増加するなど、社会教育の成立を背景として教育陳列場的な戦役記念館から郷土博物館へと発展していく。それは、松本藩士族で文部次官、東北及び京都帝国大学総長を歴任した沢柳政太郎が『松本記念館』(大正8年・1909)に寄せた序文「松本記念館ハ地方稀ニ見ルノ博物館ナリ(略)亦尠カラス其社會教育ニ裨益スル誠ニ大ナルモノアリ(略)今ヤ松本ニ遊フ者ノ必ス訪フ所トナリ松本ニ記念館アリト事廣ク知ラルニ至レリ(略)」からもうかがえる。

昭和6年(1931)、記念館は小学校から独立して本市の直営施設となり、12年から翌年にかけて松本城二の丸(現在地)に移転した。昭和22年、松本博物館と改称し、このとき館長に就任して新たな博物館運営の指揮をとったのが一志茂樹であった。一志は、教育者かつ「わらじ史学」者としての複眼的な視点を持って新生博物館の立上げに邁進し、翌年に館名も新しい時代にふさわしく松本市立博物館とした(3)。27年7月に博物館法による県内登録第1号の博物館となり、以後県内の博物館活動をリードした。とりわけ民俗資料の充実は見るべきものがあり、30年に七夕人形コレクション45点、34年に農耕用具コレクション79点と民間信仰資料コレクション293点が国重要民俗資料(現重要有形民俗文化財)に指定された。

昭和30年代に入ると明治期に建築された学校校舎を転用した本館の老朽化・狭隘化が進み、新館(現施設)は明治100年にあたる昭和43年4月に開館した。

2. 松本まるごと博物館構想の策定

2・1 馬場家住宅整備がきっかけ

平成3年(1997)、江戸時代末期建築の豪農住宅・馬場家住宅の屋敷地半分とそこに所在する建造物6棟が本市に寄附され、博物館として活用するため整備することになった。整備事業は、この年に本館から教育委員会事務局に異動した筆者が担当した。かねて関係者から整備後に重要文化財

指定との声があり、筆者は文化庁建造物課(当時、現参事官付)から指導を得るために何度も足を運んだ。その折、建造物課長さんから「松本市は個々の文化財ばかり大切に、点から線、線から面へというように文化財と博物館を結びつけて利活用を図るという青写真がない」との指導を受けた。それを受け、筆者はたまたま知ったエコミュージアムの考え方を援用し、市域に博物館群が点在、活動する本市の特長を活かそうと計画した。馬場家住宅の利活用を想定し、文化財と博物館を結びつけた利活用の青写真を描き始め、「先人が遺したモノ=文化財が豊富である」+「その遺産を大切にできた風土がある」+「モノを保存し情報を発信する博物館が多い」=松本まるごと博物館、との考えに至った。時間を要したが、平成7年度からまる博構想を市実施計画の組上りにのせた。いわば、この構想策定のきっかけは、馬場家住宅整備にかかわる文化庁建造物課長さんの指導にあったのである。平成8年になると馬場家住宅整備がほぼ完了に近づいたので、筆者は松本市のまちづくりに提言というかたちでまる博構想の概要を市民講座のなかで明らかにしてみた(4)。

2・2 増える博物館施設

時期は前後するが、昭和29年(1954)に本市と中山村が合併し中山考古館を、40年に重要文化財旧開智学校校舎を分館とし、松本市の博物館は本館を中心に3館体制がしばらく続いた。その後、58年に松本民芸館を寄附受入し、61年に中山考古館を廃止して考古博物館が、平成元年(1989)にはかり資料館が開館するなど分館が増えた。平成12年のまる博構想策定当時、本市域の博物館施設は市教育委員会所管13館(うち博物館所管8館)、市長部局2館園、財団立2館の17館園であった。

2・3 市全域を屋根のない博物館に

2・3・1 博物館利用向上対策と「松本市博物館の日」制定など

先にふれたように、まる博構想は平成7年度から市実施計画で策定に向けて検討され始めた。いっぽう、博物館職員や関係職員は、いくつかの博物館利用向上対策を実施しな

1 松本まるごと博物館構想策定の経過、同構想の事業展開は、松本市・松本市教育委員会「松本まるごと博物館構想」(平成12年)をはじめ、拙稿a「松本まるごと博物館構想を考えるー博物館都市松本をめざしてー」(『博物館研究』35-11)平成12年、b「博物館が輝くまち・松本にふさわしい基幹博物館創りを目指して」(『博物館研究』39-1)平成16年、c「松本まるごと博物館の取り組みについて」(『博物館研究』44-2)平成21年、d「松本まるごと博物館」が目指すもの」(『LASDEC』39-5)平成21年などを参照されたい。また、この構想にかかわる事業展開の成果及び課題について、筆者は国立教育政策研究所で「博物館経営の実際」(平成21年7月)、日本博物館協会研究協議会で「次代につなぐ先人の遺産ー松本まるごと博物館の資料データベース化と情報発信」(平成22年12月)と題して講演、事例発表を行った。

2 『明治三十七、八年戦役記念館一覽』明治39年によると、開館時の資料概要は軍事関係1,308点、風俗関係315点、植物標本2,091点、雑73点の合計3,787点を収蔵し、うち1,991点を陳列していた。

3 一志は博物館長の経験を踏まえて、「地方博物館のありかた」(『信濃』1-3)昭和24年を著した。

4 「文化都市・松本のまちづくりに提言 市域まるごと博物館構想」(『市民タイムス』平成8年9月26日付)。松本市全域を大きな「屋根のない博物館」とし、過去から現在まで市民の営みの中で創造され、また現在使われている文化財を保存、活用しようという「市域まるごと博物館」構想が浮上している、と報道された。

がらまる博構想策定に向けて水面下で努めた。

平成8年度からは「小・中学生親子博物館パスポート」を配付し、個人利用の場合にパスポートを提示すると無料入館できるように環境整備に努めた。平成11年度からは本市へ転入する新市民(家族)に松本を知ってもらうには博物館を訪れてもらうのが良いと考え、「転入世帯博物館パスポート」を転入手続きする際に配付している。さらに、平成18年の成人式から式に出席し希望のあった新成人に「成人式記念博物館パスポート」を配布している。

また、利用向上対策を考えると、博物館の存在と活動を市民により周知することが必要との結論に達し、平成11年度に9月21日を「松本市博物館の日」(以下「博物館の日」と略す。)に制定した。これは、先にふれた記念館の開館日による。初年度は、入館者への記念品進呈、記念講演会を行い、記念館の企画展示を行った。以後、企画展示、記念品進呈を継続している。また、平成18年の本館開館100周年記念特別展「博物館100年モノ語り」の開催を機に博物館の日を全施設無料とした。23年からは、新たな取り組みとして「学芸員の眼で見る資料の見方・楽しみ方」講座を開講した。

2・3・2 まる博構想の策定へ

さて、少し時間が経過するが、本市は平成11年度に(仮称)松本市美術館(現松本市美術館)、(仮称)世界古時計博物館(現松本市時計博物館)の開館を14年度中と決定した。しかし、議会から個々の施設整備計画よりも全体計画をとの指摘があり、さらに市内部でもかねて博物館全体の具体的な将来構想が求められていた。詳細は省くが、私たちが市実施計画のなかで論議したことがようやく認められ、平成11年10月に学識経験者や市民代表の13人を委員に委嘱してまる博構想策定委員会が設けられ、翌12年にまる構想が策定された(5)。

まる博構想は、くり返しになるが、市全域を屋根のない博物館としてとらえている。本市の場合、図1のように既存の博物館施設を核として恵まれた環境や豊富な文化遺産などをネットワーク化して保存・活用をはかり、さらに博物館が「ひとつくり」・「まちづくり」に寄与する博物館整備構想で、中核施設は有形・無形の資料の蓄積を図り、情報の発信と収集に努

めるとしてある。策定当時、自然・産業を重視する事例、比較的過疎地での地域おこしの事例はあったが、本市のように観光都市の顔をもち、かつ既存の博物館群を核とする事例は見当たらず、関係者の注目を集めた(6)。

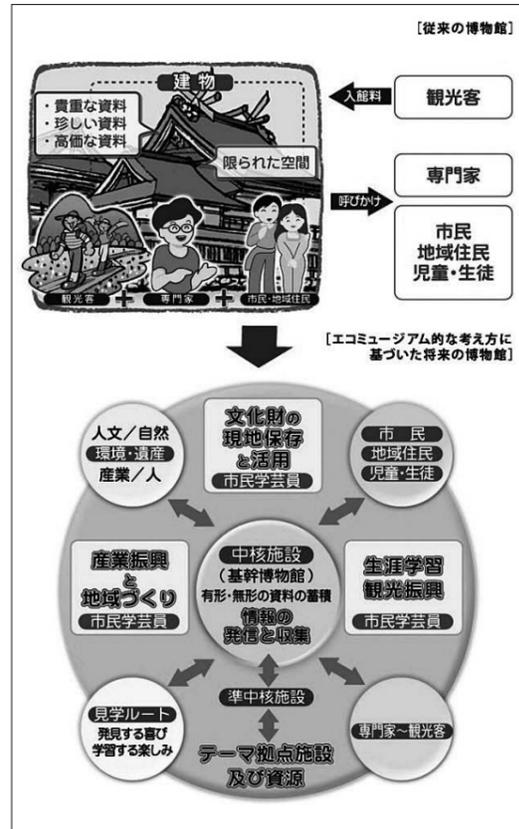


図1 「施設的な考え方から松本まるごと博物館」への概念図

3. 構想の具現化に向けての実践と課題

3・1 博物館都市の様相

現在、表1に示すように本館は14館もの分館を有し、地方都市でこれだけの分館をもつ中核博物館は皆無であろう。本市の博物館施設は公立がほとんどだが、公私立を合わせて23館園となり、まさに博物館都市の様相を呈している。さらに個人店主がミニ博物館的に公開している施設や学校法人の校史記念室などもあるので、それらを含めれば実数は増えるだろう。博物館が多いこと=博物館を利用する市民が多いこと、とはなかなかならないが、本市の特長である「石を投げれば博物館に当たる」環境に感謝し、より活かしたい。

No.	施設名	開館年月日	備考
1	松本市立博物館	明治39年 9月21日	松本まるごと博物館本館・中核施設〔登録〕
2	重要文化財 旧開智学校校舎〔*〕	昭和40年 4月 1日	旧市立開智小学校校舎の保存・転用、昭和24年に重要美術品、36年に重要文化財指定
3	小鳥と小動物の森	昭和53年 9月15日	本館附属動物園を発展的解消
4	日本浮世絵博物館	昭和57年 4月28日	財団法人〔登録〕
5	松本民芸館〔*〕	昭和58年 4月 1日	昭和37年個人創館、敷地・建物・コレクションを市に寄附
6	山辺学校歴史民俗資料館	昭和58年10月 1日	旧市立山辺小学校校舎の保存・転用、長野県宝
7	松本市科学博物館	昭和58年10月 1日	松本市教育文化センター内に設置
8	松本市立考古博物館〔*〕	昭和61年10月 1日	中山考古館(旧中山村考古館)を廃止、新築〔登録〕
9	松本市はかり資料館〔*〕	平成元年 8月 4日	当初、旧度量衡店を借用して開館、建物・度量衡資料を市に寄附、平成22年に旧三松屋蔵座敷を移築
10	松本市旧司祭館〔*〕	平成 3年12月 1日	市に寄附、移築、長野県宝
11	窪田空穂記念館〔*〕	平成 5年 6月 5日	窪田空穂は歌人・文学者、空穂会の協力で新築、生家は市に寄附
12	旧制高等学校記念館〔*〕	平成 5年 7月10日	旧制松本高等学校記念館を発展的解消、全国の旧制高等学校OBらの協力で新築〔登録〕
13	鈴木鎮一記念館	平成 8年 4月12日	鈴木鎮一はスズキメソッドの創始者、居宅を市に寄附
14	重要文化財 馬場家住宅〔*〕	平成 9年 4月 8日	江戸時代末期建築の民家、屋敷地西半分と所在建造物6棟を市に寄附、平成8年に重要文化財指定
15	松本市歴史の里〔*〕	平成14年 4月 1日	旧財団法人が建造物6棟・資料を市に寄附、旧長野地方裁判所松本支部庁舎は長野県宝〔登録〕
16	松本市美術館	平成14年 4月21日	美術資料を本館から移管〔登録〕
17	松本市時計博物館〔*〕	平成14年 9月 1日	本田(古時計)コレクションを本館から移管、中心市街地に新築
18	松本市四賀化石館〔*〕	平成17年 4月 1日	旧四賀村立、合併時に市に移管
19	松本市安曇資料館〔*〕	平成17年 4月 1日	旧安曇村立、合併時に市に移管
20	梓川アカデミア館	平成17年 4月 1日	旧梓川村立、合併時に市に移管
21	東洋計量史資料館	平成17年 5月 1日	法人立
22	松本市山と自然博物館〔*〕	平成19年 5月 3日	アルプス山岳館を廃止、自然・山岳資料を本館から移管、新築
23	松本市高橋家住宅〔*〕	平成21年 5月 2日	江戸時代中期建築の武家住宅、建造物を市に寄附、市重要文化財

1) 施設名に〔*〕がある施設は松本市立博物館分館

2) 平成17年の合併時に旧奈川村から移管した奈川歴史民俗資料館は平成20年に、同自然学習館は平成21年に用途廃止

表1 松本市域の博物館施設一覧

3・2 いくつかの実践事例から

3・2・1 市民協働=ひとつくり

(1) 市民学芸員

平成16年度の友の会発足後に会員などから学芸員的な業務に携わりたいとの申し出や、まる博構想にある「市民学芸員制度」とあるがどうするのかなどの質問があった。いっぽう、それより前、本館では平成10年、11年に「あなたもマチの学芸員 見つけにいこう!松本の七夕さま」講座、15年、16年に「街を歩いて松本の地図をつくろう」講座などを開講し、市民学芸員養成講座はスローテンポだが歩み出していた(7)。

市民学芸員養成講座は平成18年度から開講し、22年度末で61人の市民学芸員が誕生した。ただ、私自身は「養成」という言葉になじめないが、23年度も15人が受講中である。

(写真2) 現在、講座を修了した市民学芸員の有志は歴史の里、考古博物館、本館などで展示解説や体験学習の講師として活動している。建造物を5棟有する歴史の里では平成19年4月のリニューアルオープン時から1期生が各建造物や展示の解説を始め、現在は旧製糸場の建物で糸織りの体験学習の講師も務めている。(写真3) 21年には同所で活動する市民学芸員が自主グループを結成し、自主研修なども行っている。現在、市民学芸員有志から活動内容について提言や要望があり、24年度からそれを反映できるように協議する予定である。

5 本市での博物館行政の所管は教育委員会だが、他都市では首長部局所管としているところがある。たとえば、大宰府まるごと博物館構想を推進する太宰府市、萩まちじゅう博物館構想を推進する萩市では、構想や博物館を市長部局が所管している。

6 例えば、長野県内の事例をみても平成10年設立の安曇野アートラインをはじめ、SUWAKOアートリング、善光寺平アートラインなどがありそれぞれ一定の成果をあげているが、「アート」とあるように美術館中心の傾向が強い。まる博構想はベースの部分で異なる。

7 この間の動きについては、拙稿「市全体が屋根のない博物館—歩み出した市民学芸員—」(『文化庁月報』442)平成17年を参照されたい。



写真2 市民学芸員養成講座「松本まるごと博物館を学ぶ」[平成23年4月]



写真3 歴史の里で活動する市民学芸員(左)[平成23年11月]

(2) 楽知ん見遊会

この会は、まる博全体を盛り上げるパートナーにと市民が平成22年に結成した。メンバーは歴史研究者、小中学校教員、主婦、都市計画家、友の会員、市民学芸員など10人ほどである。この年から本館と協働で長野県元気づくり支援金の交付を受け、「子どもまる博ガイドブック《もっと知りたい まつもっとー行って見て松本》」の作成に取り組んでいる。このガイドブック作成は22年度から10年間継続して作成し、市内の小中学校5年生全員と各校図書館などに配布する予定である。第1集は「水と暮らしー泉こんこん・水の都ものがたり」で、一般への販売もとの要望を受け本館のミュージアムショップで扱っている。

まる博構想での市民協働は、市民と博物館という異なる主体が協力し適切な役割分担をするなかで、双方の良さを持ち寄って成果を出していくことになろう。上記で紹介したほかにボランティア団体エムの会、松本まるごと博物館友の会との市

民協働があるが、実践事例は別稿(8)にゆずる。

3・2・2 地域との連携=まちづくり

(1) 特別展開催と地域連携

博物館は、図書館・公民館と比べると地域、住民と遊離した施設ともいわれてきた。本市もまた例外ではなく、いわゆるまちづくりに寄与する視点が欠けていた。

本館では特別展開催時に商店街を中心として地域との連携事業を展開してきた。直近では平成20年に開催した特別展「信州と味噌」で、本館周辺にある商店、飲食店とタイアップした連携事業を行った(9)。また、平成14年に中心市街地に開館した時計博物館では立地条件を活かし、翌年から周辺商店街組合と協働で館主催の「あめ市展」開催中に商店街での買物客に招待券、優待券を贈呈するのをはじめ、「サイトウ・キネン・フェスティバル」や「ごみゼロ運動」期間中に参加者対象に入館料割引の実施、商店街での買物特典券の進呈などを行っている。これらは、いわば経済的視点によるまちづくりへの寄与である。

(2) 新たな年中行事「七夕人形のある風景」によるまちづくり

さて、本館には先にふれたように、国文化財指定の七夕人形コレクション45点が収蔵されている。年中行事は時代の流れのなかで変容し、七夕に人形を飾ることも昭和30年代を境にあまり見られなくなった。本館に近い商店街・みどり町の親睦団体みどり会から住民を対象とした七夕(人形)学習会を共催したいと依頼があったのは、昭和61年の初夏であった。本館はこの依頼を受け、この年の8月から「松本の七夕を考える会」を共催し、学芸員がいわば出前講座を行って住民と職員が交流した。この会はみどり会の事情で平成5年に中止になったが、七夕人形は現在も店頭飾られ、市民・観光客の目を楽しませている。

平成17年は七夕人形コレクションが国文化財指定50周年の節目の年であった。本館では、記念事業として文化庁芸術拠点形成事業の助成を受けた特別展「七夕と人形」を開催した。特別展は館内展示・分館6館との連携をはじめ周辺商店街、大規模小売店舗、ホテルなどの協力を得て、店頭・ウインドー・ロビーなどに七夕人形を飾る新たな年中行事を創出した。本館に通じるメインストリート大名町に七夕人形をかた

どった写真パネルを飾って笹竹を立て、空き店舗のショーウインドウにも七夕人形を飾るなどした。(写真4)これら七夕人形のある風景は評判を呼び、「博物館からまちへ」、「まちから博物館へ」と、まる博構想のめざすまちづくりに寄与できる事業であった。文化庁の助成は17年度限りであったが、18年度を迎えると周辺商店街の関係者から新たな年中行事「七夕人形のある風景」を一緒にとの依頼があり、以後、毎年「松本の七夕〇〇〇〇(西暦)」として協働事業を行っている。七夕人形飾りなどで協力・連携する範囲は広がり、この協働事業は新たな年中行事として定着しつつある。(写真5)これは、いわば文化的視点によるまちづくりへの寄与である。

なお、平成22年度から3か年にわたり本館の「七夕人形を活用した地域連携事業」が文化庁の地域伝統文化総合活性化事業の助成を受け、最終年度の24年度に総括的な特別展を開催する予定である。



写真4 空き店舗のショーウインドウに飾られた七夕人形[平成17年8月]



写真5 店頭飾られた七夕人形[平成23年8月]

3・2・3 学都松本創造事業

(1) 市民みんな学芸員、みんな利用者

平成22年、本市教育委員会では「学都松本」の考え方を整理し、その実現に向けて事業を行うことになった。博物館ではこれを受けて、「市民一人ひとりの学びを地域や行政が協働してサポートし、『共に学ぶまちづくり』を推進するまち」などを目指し、改めて博物館を市民の学びの場、研究の場としてとらえ、学都松本を創造する事業を展開することにした。本市の「学都松本」に向けてのキャッチフレーズ「いつでもどこでもだれでも、みんな先生・みんな生徒」に倣えば、「市民みんな学芸員・みんな利用者」ということになり、このような環境整備を担うのが博構想の具現化でもある。また、学都を支える博物館としてのキャッチフレーズを職員が考え、本館ならば「松本は屋根のない博物館!松本の歩みと文化を知る。松本の今にふれ、未来を思う。一まるごと松本を知る旅のスタート地点です。」というように、新年度からリーフレットに印刷し、施設正面に掲示するなどしてPRをする予定であるが、一部可能なところは実施している。

(2) 博物館「勸館楽学」対談

地域文化や博物館などにかかわる「学び」と「実践」をテーマに、市民と学芸員が対談し、そこに参加者も加わって文字どおり「侃侃諤諤」の話し合いをするもので、平成22年から始めおおむね月1回のペースで行っている。当初、学芸員が講演・講義を行う計画があったが、一般論として、学芸員が話す「上から目線」でかつ一方通行的になってしまうので、それを避けて双方向でという意図があった。ここでは、市民が主役、学芸員が黒子で、会場は本館のほかにテーマと関連ある分館を会場としている。(写真6)なお、この対談は松本が生んだ博学多識の人・胡桃沢勘内、池上喜作らが中心となり、昭和4年から約10年間にわたり中央から名士を招き学びあった知識の饗宴・話をきく会(10)の活動を参考にして始めた。

(3) 博物館「学芸員松本モノ語り」

本館・分館の学芸員がそれぞれのキャリアの中で体得した知識や技能、研究成果をもとに語るもので、平成23年から始めおおむね隔月に1回のペースで行っている。上記の「勸館楽学」では市民が主役、学芸員が黒子であるのに対し、この「モノ語り」は学芸員が主役(?)である。博物館資料モノと

8 詳細は前掲註(1)拙稿cを参照されたい。エムの会は平成10年に結成された。友の会は昭和28年に一度結成され、県内では先進的な活動をしたが諸事情により解散した。まる博構想策定を受けて、平成16年から友の会が復活し、名称はまる博を意識して松本まるごと博物館友の会とした。

9 詳細は前掲註(1)拙稿cを参照されたい。このときは、本館周辺で味噌及び関連商品を販売している商店、飲食店20店と協力し、「みそしるラリー」を行った。商店で買い物、食堂で食事をし、本館に入館すると「Misoしる男」・「Misoしる子」いずれかのシールがもらえ、3枚シールを貼った方にオリジナル「味噌ティラミス」をプレゼントした。景品の味噌ティラミスは松本大学栄養学科の開発商品で、提供を受けた。

10 話をきく会に招かれたのは、柳田国男、折口信夫、渋沢敬三、新村出、金田一京助、武者小路実篤、河東碧梧桐など、限られた分野だが各界の指導的立場にあった人物たちである。この会については、松本市立博物館「胡桃沢コレクションI」平成15年などを参照されたい。なお、平成22年の本館特別展「胡桃沢コレクションII」開催を機に、学都松本の一端を担った胡桃沢らのいとなみを復活することになった。本館では、市民に学びの機会を提供するために70年ぶりに話をきく会を復活させ、「復活 話をきく会」第1回を開催した。

市民とのインタープリットに目的を絞った語りとし、学芸員が博物館を利用した市民の学び、研究にどのように貢献できるかを決意表明する場としている。



写真6 勸館楽学対談「古時計修理40年」[平成23年6月]

3・2・4 市民の蔵としての博「物」館から情報発信

(1) 博物館資料は市民の財産

一般に博物館はモノを収集・整理保管・分類・普及する空間で、いわば博「物」館=市民の蔵という認識がある。本市の場合、本館と分館には市民から寄贈された資料が30万件近くあり、貴重な市民の財産となっている。しかし、施設別に分かれて資料収集を行い、資料整理の統一基準が明確でなかったこともあり資料整理に支障をきたしていた。なかでも本館は100余年にわたり数多の資料が寄附され続け、資料整理も明治時代の台帳をもとに数回にわたり行った経過がある。

(2) 情報の収集と発信の拠点へ

まる博構想策定後、基本理念にある「情報の収集と発信の拠点」となるために本館と分館で資料とそのバックグラウンドにある情報を収集し、統一体系のもとに資料を管理し、資料整理の効率化、まる博全施設でデータの共有化を図ることが急務となった。いっぽう、市民からは博物館へ付託した資料の情報を市民に還元し、資料活用の推進と博物館活動の裾野を広げて欲しいという要望や、「博物館の情報がわかりにくい」などの声があった。これを受けて市実施計画で論議を重ね、全施設をネットワーク化するまる博ウェブサイト構築する計画をたて、平成14年が実質のスタート年となった。この時

点で大きな目標は、内部基盤の整備、外部公開の実施の2項目であった。外部公開の準備は平成19年からの事業として①デジタルミュージアムによる情報発信及び公開、②博物館利用者への情報発信及び公開、の2項目であった。

(3) Matsu-haku.Comを開設

以上のいとなみを経て、20年5月にポータルサイトMatsu-haku.Comを開設し、①市全体を屋根のない博物館としてとらえる、②有形・無形の資料を蓄積し、情報を発信する、③教育、観光、研究、市民生活、産業振興など多方面に活かす、という3つのコンセプトのもと情報発信を始めた。これは、まる博事業のなかでも特長あるもので、本館と10館以上の分館が一体となって取り組んでいる。今後は博物館側の発信情報と市民側からの情報がバランスよく共存できる場として、また観光振興面でも活用したいと考えている。資料整理は年次計画を策定して実施中で、現在10万件弱の資料検索が可能である。資料検索を充実させていく予定だが、受入資料が多く整理が追いつかないのが現実である。

4. 具現化にかかわる課題

4・1 まる博構想の見直しと基本計画の策定

以上、本市が推進するまる博構想について重複もいとわず私見を述べた。市域全域を屋根のない博物館とする大きな考え方のもと、表2に示すようにまる博構想の具現化を図るなかで一定の成果をあげたと考える。しかし、まだまだ市民に認知されていない現実もあり、平成24年4月1日施行の地域主権第2次一括法において博物館法の一部が改正されることになったので、文字どおり「隗より始めよ」で平成24年2月市議会に松本市立博物館条例の全部改正を議案として上程した。第1条の目的にまる博構想の推進を加えるなどし、第1条は「この条例は、市域の自然環境や文化、産業等の遺産の保護活用を図り、もって市民の生涯学習と地域の振興に寄与するため、博物館法～」とした。遅きに失した感はあるが、まる博構想の主旨である「ひとつくり」・「まちづくり」を明文化し、改めてその具現化に努めることにした。最後に、このまる博構想の具現化にかかわる課題を述べる。

まる博構想を策定した平成12年(2000)から10年以上が経過し、まる博をめぐる環境が変わった。なかでも影響が

大きかったのは、隣接1町4村との合併である。市域が広がり、合併地区から移管された施設に加え、旧松本市でも新設、リニューアルした施設もあり、指定文化財も合併で増えている。さらに、施設面でみると、法人立博物館の開館など新たな動きもある。それに対し、博物館としてほとんど対応できなかった。まる博構想に位置づけた構想具現化のための組織運営・施設整備・事業推進・ネットワーク化の4計画を策定

できず、これらを総合的に進める基本計画・(仮称)博物館整備全体計画の策定も未着手である。今後、現状に即して、かつ学都松本創造事業を意識したまる博構想を見直し、早急に基本計画を策定しなければならない。

4・2 基幹博物館の整備

現在、本館は施設の老朽化・狭隘化などが進んでいる。ま

年	博物館にかかわるのうごき
昭和61年	第1回松本の七夕を考える会開催(～平成5年)[*]
平成3年	馬場家住宅整備事業開始(平成8年重要文化財指定)[*]／文化庁から市全体の文化財、博物館等を結びつけて利活用を図る青写真の作成について指導を受ける[*]／旧司祭館開館(平成18年長野県宝指定)／『まちなかウォッチング 松本ってどんなまちQ&A』刊行(まる博案内書①)
平成4年	市組織改正により松本民芸館、はかり資料館が博物館分館
平成5年	旧制高等学校記念館開館(平成18年に分館)、窪田空穂記念館開館
平成7年	まる博構想について市実施計画で検討開始[*]／「ぐるっと!MUSEUMまつもと博物館まつぶ」(現「まる博マップ-まち全体が博物館」)作成配布
平成8年	まる博構想について市民講座で提言[*]／「小・中学生親子博物館パスポート」配布[*]
平成9年	重文馬場家住宅開館
平成10年	「あなたもマチの学芸員 見つけにいこう松本の七夕さま」講座開講(～平成11年)[*]／博物館ボランティア・エムの会発足
平成11年	松本市博物館の日制定[*]／「転入世帯博物館パスポート」配布[*]／美術館、時計博物館の開館が14年度中と決定[*]／松本まるごと博物館構想策定委員会設置[*]／松本城およびその周辺の整備計画策定[*]
平成12年	松本まるごと博物館構想策定[*]
平成13年	教員用博物館利用案内書[*]さあ、博物館へ行こう」刊行(市内小中ほか全教員に配布)／『松本まるごとウォッチングQ&A』(まる博案内書②)刊行
平成14年	歴史の里、時計博物館、美術館開館
平成15年	「街を歩いて松本の地図をつくろう」講座開講(～平成16年)[*]／松本民芸館リニューアル開館
平成16年	松本まるごと博物館友の会発足／考古博物館リニューアル開館
平成17年	隣接4村と合併し、四賀化石館等の5館が市に移管され分館／文化庁芸術拠点形成事業七夕人形コレクション国文化財指定50周年記念特別展「七夕と人形」開催、以後継続して地域連携事業開催[*]
平成18年	基幹博物館基本構想策定委員会設置／本館、分館に「まる博コーナー」設置／博物館開館100周年記念特別展「博物館100年モノ語り」開催／開館100周年記念式典挙行／市民学芸員養成講座開講[*]／「成人式記念博物館パスポート」配布[*]／市組織改正により旧制高等学校記念館が分館
平成19年	基幹博物館基本構想策定／同基本計画策定委員会設置／山と自然博物館開館、歴史の里リニューアル開館
平成20年	基幹博物館基本計画策定[*]／ポータルサイトMatsu-haku.Com開設[*]／特別展「信州と味噌」開催にかかわり味噌シールラリー開催[*]／『松本まるごと博物館ガイドブック』(まる博案内書③)刊行／奈川歴史民俗資料館用途廃止／梓川アカデミア館を美術館に所管替え
平成21年	市重文高橋家住宅開館／奈川自然学習館用途廃止
平成22年	学都松本創造事業の一環として博物館「勸館楽学対談」開始[*]／文化庁地域伝統文化総合活性化事業「七夕人形を活用した地域連携事業」開始(～平成24年)[*]／楽知ん見遊会との協働事業「子ども用まる博ガイドブック作成」開始(～平成31年)[*]／はかり資料館リニューアル開館
平成23年	博物館「学芸員松本モノ語り」開始[*]／学都松本を支える博物館キャッチフレーズ掲示、リーフレットへの印刷一部実施[*]／はかり資料館敷地内に旧三松屋蔵座敷移築復元
平成24年	松本市立博物館条例の全部を改正[*]

末尾に[*]がついている事項は本文のなかで言及

表2 松本まるごと博物館構想推進関連年表

る博構想の中核施設機能を十分に発揮できず、また国史跡内に位置することから、平成11年策定の「松本城およびその周辺整備計画」と整合を図るなかで移転、新築することになっている。平成20年11月に基本計画策定委員会から「松本市基幹博物館基本計画提言書」が市と市教育委員会へ提出されたが、昨今の経済状況などもあり進捗していない。基幹博物館は市域の風土を概観できる総合センター機能を有する施設で、性格はア.調査研究型、イ.交流型、ウ.学習型、エ.キャリア支援型ミュージアムと位置づけている。さらに、旧来の博物館機能に加え、本市にふさわしい博物館とするため「交流・情報交換」、「観光・集客」の2機能を加えてある(11)。

おわりにー結衆の原点として

先にふれた胡桃沢勘内の著作に、大正4年(1915)に刊行された『松本と安曇』がある。ここに「道祖神は塞の神にしてすなはち旅人と郷人との間に立ちたまへり、吾がせちに心をよする人々の幸をいで此神にいのらばや」との一節がある。牽強付会を承知で言えば、旅人=外から松本に訪れる人々、郷人=市民とすれば、道祖神という神は博物館の資料・組織と考えられないか。だとすれば、旅人と郷人の両者=利用者同士を仲介するのが博物館で、松本市立博物館全施設は松本地方という地域社会のなかで多くの人々を招き寄せて交流を図る結衆の原点としての役割が求められる。道祖神という神は境の神としてムラを守る役割もあるが、逆に境を開いて交流を仲介し、外から文化的・経済的な繁栄をもたらす神としての役割もある。

私は20年近くまる博にかかわり、時間の流れのなかで変わらない博物館、変わる博物館をより意識するようになった。前者は市民の「蔵」としての博物館。「松本の歩みを収集・保存」+「(美術館に比べ地味だが)豊富な資料を仲立ちに先人の暮らしを検証+有形無形の遺産を次世代に伝え+情報を収集・発信」する意味では、いつまでも変わらない博物館でありたい。後者は市民の学び、研究の場としての博物館。地域にこだわることは不変だが、時間の流れのなかで常に市民の学びや研究の動向にシフトし「市民フォーラム」の場であり続ける意味では、いつでも変わる博物館でありたい。

本市において、まる博構想の具現化が、博物館が結衆の原

点となって、博物館をただ存在するだけの文化の殿堂から交流する空間、市民フォーラムの場へと変えることになるのだろう。おそらく、それはゴールのないレースであろうが。

本来は将来展望を述べるつもりが、足元の泥濘ばかりが気になりそこに筆が走ってしまった。大方のご教示をお願いしたい。

附記 平成22年12月11日に静岡市の常葉学園大学で開催されたシンポジウム「まちと博物館」に参加させていただき、大変勉強になりました。その折の講師の先生方の発言内容、小稿の執筆を薦めていただいた日比野秀男先生に感謝申し上げます。

引用文献

- 拙稿 「学芸員のノートから1・松本地方の七夕行事」(八十二文化財団『地域文化』13)平成2年
- 拙稿 「松本を『まるごと博物館』にー松本市博物館の日設立によせてー」(松本市立博物館『あなたと博物館』104)平成11年
- 拙稿 「道祖神のように愛され、親しまれる博物館に」(松本市立博物館『あなたと博物館』139)平成17年
- 拙稿 「学都松本ー変わらない博物館、変わる博物館」(松本市立博物館『あなたと博物館』170)平成22年
- 拙稿 「新副会長としてー博物館個々の活動から群としての活動を考えるー」(長野県博物館協議会『博物館の友』42)平成23年

11 詳細は松本市「松本市基幹博物館基本計画」平成21年を参照されたい。設置場所は市民の利用しやすい場所、観光客の来訪に便利な場所、中心市街地の活性化に寄与できる場所として集約されている。

特集:「まちと博物館」Ⅳ

学校と地域博物館の「連携」から生まれるもの

美濃加茂市民ミュージアム 可児 光生

1.美濃加茂市民ミュージアムの活動

(1)館の概要

2000年(平成12)10月に「みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアム」はオープンした。地域の自然史、考古、歴史民俗、美術などを分野とする市直営の「地域博物館」である。美濃加茂市は、岐阜県のほぼ中央部の南端に位置する人口約55,000人の自治体である。学校数は小学校9校、中学校3校(うち1校は隣町との組合立)、児童生徒数は5,090名(2011年4月現在)である。



写真1 みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアムと子どもたち

みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアム(以下「文化の森」写真1)は、展示棟、学習棟、実習棟のほか、昭和30年代の養蚕家屋を復元した生活体験館「まゆの家」+民具展示館、アーティストが滞在して制作できるアトリエ棟などで構成され、約9ヘクタールの里山に囲まれた身近な自然を体感できる空間となっている。館の設立理念は①自然との共存②学校教育との連携③市民参画④地域づくりの4つであり、現在の活動の柱となっている。

開館の年が「総合的な学習の時間」の試行の年(のち2002年導入)であったことが開館後の活動の方向性に大きな影響を与えた。開館の数年前に学芸部門と学校部門の両方で協議する場を設け、学習指導要領を基本に「博物館を利用して学習すること」「社会見学でなく教育課程に位置づけ

計画的に授業を博物館でおこなうこと」の意味と効果について議論を重ね、両部門の意識の共有化を図ろうとした。この準備段階の出来事が前述の基本理念②に繋がり、現在の学校活用の基盤となっているといえよう。

(2)スタッフと設備

館には学校の活用を担当するセクション「学習係」が置かれている。係は現在5名(うち非常勤3、係長は学芸係長と兼務)で、学校との連絡調整や学習内容の検討、来館する児童生徒の対応を行っている。

学校と同様、授業を中心に進めるのは担任教師(T1)であるが、学芸員(T2)、学習係(T3)、ボランティア(T4)が支え、T1~T4がチームとして授業を行う。文化の森には「展示ガイド」「アート」「生活体験」「伝承料理」「学習支援」「イベント」の6分野のボランティア(完全無償、2010年度登録者数160名)がある。学校活用においては主に学習支援ボランティア(登録21名)が、活動の見守りや学習の補助などのサポートを行い、内容によっては「生活体験」など他のボランティアも支援することがある。

組織として「文化の森活用委員会」を置いている。市内の小中学校の教師14名で構成、館と学校間の連絡のほか、新規の活動プラン作りや活動の評価などを行っている。

児童生徒の交通の便宜を図るために準備段階からの要望で導入したのが博物館専用のバスである。2005年度からは運行が外部委託になったが、市内学校と博物館の間の送迎、必要に応じて他の学習施設への運行も行っている。また、実習棟に給食用ワゴンや冷蔵庫等を用意し、学校同様に市の給食センターから必要数の昼食を配送するシステムをとり、終日にわたる学習活動に対応できるようになっている。

(3)準備

幅広い体験学習と深まりのある学習は、学校が文化の森を計画的に利用することが前提となる。ここでの学習は、学校の年間指導計画(カリキュラム)に位置付け、単元の目標

を達成するためのものである。

活用の前年度、3月までに学校の行事予定を考慮して学習係と調整を行い日程がほぼ決まる。利用日が近づくと文化の森でどの教科(領域)でどのような活動を行いたいのか、学校から学習係へ連絡がある。

授業のおよそ3週間前までに館において打ち合わせを行う。

時には学芸員(6名)も参加し、学習のねらいをチームとして共通理解し、内容や時間配分のほか、関わる人々の役割分担を確認する作業をおこなう。その事前打ち合わせをもとに、学習係が学習活動の細案を作成し授業に臨む。学校は文化の森での活動に備えて事前の学習をおこない、また終了後は学校で事後学習を行うよう心がけている。

2010年度 学習内容【『みのかも文化の森 活用の手引き・活用実践集(平成22年度版)』より4月~7月分抜粋・後半略】

※総合=総合的な学習の時間 図工=図画工作 生活=生活単元 学活=学級活動 「」は単元名

月	日	曜	学校・学年	学 習 内 容
4	14	水	太田小なかよし	生活「タケノコ掘りしよう」:タケノコ掘りと山菜とり、タケノコのした処理、タケノコの味噌汁作り、インタビュー、文化の森探検
	15	木	山之上小6年	社会「米づくりのむらから古墳のくにへ」:常設展示室・土器整理室・保存住居跡の見学、縄文土器づくり
	16	金	吉井小おぞらさくら	生活「たけのこ掘りしよう」:タケノコ掘り、山菜探し、試食
	20	火	蜂屋小3年	図工「切って切ってトントン」:小刀の使い方と小枝での作品作り、社会「わたしのまちなみのまち」:タワーからながめる、国語「きつづきの商売」:声の「ドラマ」の会による朗読指導
	22	木	伊深小6年	社会「米づくりのむらから古墳のくにへ」:常設展示室・土器整理室・保存住居跡の見学、土偶作り
	23	金	三和小5・6年	学活「五平餅づくり」:カマドでご飯を炊く、薪割り体験、五平餅を作る
5	30	金	山手小6年	社会「米づくりのむらから古墳のくにへ」:常設展示室・土器整理室・保存住居跡の見学、遺物探し、土笛づくり
	7	金	加茂野小3年	社会「わたしのまちなみのまち」:タワーからながめる、理科「チョウをそだてよう」:チョウの観察、図工「切って切ってトントン」:小枝の鉛筆作り
	11	火	吉井小4年	社会「水はどこから」:昔の水についての話、山之上浄水場見学
	12	水	太田小6年	総合「日本の文化を知る」社会「古墳時代から奈良時代へ」:茶の湯体験、墨絵体験、常設展示室・保存住居跡の見学、遺物探し
	13	木	三和小3・4年	社会「わたしのまちなみのまち」:タワーからながめる、美濃加茂市内の施設調べ
			美濃加茂中1年	総合「地域を知る」:調べ活動、企画展示室・常設展示室の見学
	14	金	山之上小2年	生活「はるのずかん」:春の草遊び、春みつけビンゴ、しおり作り
			蜂屋小6年	社会「米づくりのむらから古墳のくにへ」:古墳見学、常設展示室・土器整理室・保存住居跡の見学、古代人体験、遺物探し
	18	火	三和小1・2年	生活「なかよくあそぼう」:内山りゅう写真展見学、南の森たんけんビンゴ、文化の森館内探検
			下米田小6年	社会「米づくりのむらから古墳のくにへ」:常設展示室・土器整理室・保存住居跡の見学、縄文土器作り、遺物探し
	19	水	伊深小5年	総合「知恵を引き継ぐ〜五平餅づくりを通して〜」:カマドでご飯を炊く、まき割り体験、五平餅をつくる、民具展示館見学
	20	木	太田小3年	社会「わたしのまちなみのまち」:タワーからながめる、国語「きつづきの商売」:朗読練習、発表、理科「チョウをそだてよう」:チョウの体の仕組み
21	金	白川町立藤原小6年	社会「米づくりのむらから古墳のくにへ」:常設展示室・土器整理室・保存住居跡の見学、土笛づくり	
26	水	山手小2年	生活「みんなで出かけよう」:春の草花遊び、虫の話、南の森ビンゴ、内山りゅう写真展見学	
27	木	下米田小4年	社会「ごみのしよ理と利用」:ささゆりクリーンパーク見学、昔(約60年前)のごみの話、内山りゅう写真展見学	
		太田小4年	昼食(浄水場見学)	
28	金	吉井小2年	生活「春のずかん」:春の草花遊び、虫の話、文化の森ビンゴ、内山りゅう写真展見学	
6	1	火	太田小5年	総合「昔の知恵や暮らしを知ろう」:年配の方の知恵を見つける(衣、住、生活の話)、げんこつ作り
	2	水	吉井小4年	社会「ごみのしよ理と利用」:ささゆりクリーンパーク見学、昔(約60年前)のごみの話、内山りゅう写真展見学
	3	木	山之上小4年	社会「ごみのしよ理と利用」:ささゆりクリーンパーク見学、昔(約60年前)のごみの話
	4	金	蜂屋小5年	社会・家庭科「わたしたちの生活と食料生産」:カントリーエレベーター見学、カマドでご飯を炊く、薪割り、カマド・民具展示館見学、おにぎり作り、米作り・古代米の話、内山りゅう写真展
	8	火	加茂野小1年	生活「なかよくあそぼう」:常設展示室・生活体験館・タワーの見学、内山りゅう写真展、森の散策
	9	水	伊深小3年	社会「わたしのまち・みんなのまち」:タワーからながめる、理科「こん虫をしらべよう」:美濃加茂市の学習、チョウ・昆虫の話、内山りゅう写真展見学、美濃太田駅・商店街・市役所の見学
	10	木	加茂野小2年	図工「どんどんらべて」:木の枝や葉っぱをならべる、生活「生きものをかおう」:北の森と南の森のしぜんで遊ぶ、むしみつけ、内山りゅう写真展見学、読み聞かせ
	11	金	下米田小3年	社会「わたしのまちなみのまち」:タワーからながめる、理科「こん虫をしらべよう」:チョウの学習、市内の見学
	15	火	蜂屋小開発学級	生活「かまどごはん」:カマドでご飯を炊く、薪割り、おにぎり作り、試食・片付け
			のぞみ教室	「葉っぱのお皿作り」:粘土板を作る、お皿を作る、昔の遊び・タワー・常設展示室の見学
	16	水	蜂屋小4年	社会「ごみのしよ理と利用」:ささゆりクリーンパーク見学、昔(約60年前)のごみの話
	17	木	山之上小3年	社会「わたしのまちなみのまち」:タワーからながめる、みのかもすぐろく、市役所見学、市内見学(バスから)
	18	金	山手小1年	生活「なかよくあそぼう」:常設展示室・タワーの見学、生活体験館で昔の遊び、森の散策
	24	木	蜂屋小3年	社会「わたしのまちなみのまち」:美濃加茂市の学習、市内見学、図書館見学、見学のまとめ、みのかもすぐろく
	25	金	太田小4年	社会「ごみのしよ理と利用」:ささゆりクリーンパーク見学、昔(約60年前)のごみの話

月	日	曜	学校・学年	学 習 内 容
6	29	火	双葉中1年	総合「文化の森体験」:デジカメを使ってアニメーション作り、勾玉作り、植物と人との関わり
	30	水	加茂野小6年	社会・総合「日本の文化を体験しよう」:茶の湯体験、生け花体験、墨絵体験
7	1	木	蜂屋小2年	図工「かたぬき かたおし」:粘土の板をのし棒やたたら板を使ってのぼす、型抜きを使って作品作り
	6	火	加茂野小4年	社会「水はどこから」:山之上浄水場見学、昔(約60年前)の水の話
	7	水	西中開発学級	生活単元「茶の湯体験」:茶の湯体験、常設展示室・タワーの見学
	9	金	山之上小4年	総合「加茂川」:加茂川の見学、見学のまとめ
			山手小3年	社会「わたしのまちなみのまち」:タワーからながめる、みのかもすごろく、理科「こん虫をしらべよう」:チョウの学習
	13	火	山手小ひまわり	生活「冷やしうどんを作ろう」:うどん作り、常設展示室・タワーの見学、片付け
	14	水	蜂屋小4年	社会「水はどこから」:山之上浄水場見学、昔(約60年前)の水の話、文化の森の水道について(職員の話・施設調べ)
	15	木	東中開発学級	生活「抹茶茶碗作り」:作り方の説明、作品づくり、片付け
	22	木	美濃市かえで保育園年長	卒園制作「葉っぱのお皿づくり」
	29	木	関市むげがわ保育園年長	卒園制作「葉っぱのお皿づくり」

(後半省略)

(4) 状況

2010年度の利用現状は次のとおりである。

- 総利用者数 8,713名
- 内訳 [小学生7,987 中学生337 幼保389]
[市内7,291 市外1,422]
- 学級数 320
- 利用率 83%(活動日数÷来館可能日数)
- 支援ボランティア数 延べ299名

開館以来の利用者数87,722名で、年平均すると7,975名である。中学校は授業時間割りが柔軟に組めないため、「総合的な学習の時間」での利用などにとどまっている。

2010年度は160プログラムを実施した(別表参照)。その内訳は、社会49、生活37、理科14、図工13、総合12、国語8、家庭科1など、幅広い教科にわたっている。文化の森が小規模ながらも各分野を扱う「総合的」博物館であることがその第一の理由であるが、より効果の上がると思える教科を自由に選び教材化しようとしている表れでもある。

「小4社会・古い道具と昔の暮らし」に関連した民俗資料を素材にした活動及び「小6社会・米づくりのむらから古墳のくにへ」に関連する考古学資料をもとにした活動は、全国の歴史系博物館で定番として行われているものでもある。文化の森の場合、前者は生活体験館という養蚕の家屋、後者は遺物を拾うことのできる遺跡(古墳～奈良時代の集落址[尾崎遺跡]、発掘中の住居址を実物展示)を学習の場とし、空間ごと教材にしているのが特長といえよう。教師も博物館資料とそれがある場所を総合的に捉え「文化の森ならではの」授業をそれぞれが工夫して組み立てるようになっている。

市外の学校の利用が最近は多くみられる(2010年度は全

体構成比約16%)。文化の森を活用しその学習効果を確かめた市内勤務の教師が異動で市外の学校へ転出した時、その赴任校でも再び実践しようとしている。距離的、時間的な制約、また独自にバスを用意しなければならないという予算的な問題のある中、再び児童とともに来館しようとするのは、教師がここでの活動に確実な手応えを感じていたからであろう。

国語の授業のうち、朗読に関しては館を拠点に活動している「声のドラマ」の会という朗読グループが指導にあたっている。美しい言葉の響きを聴き、作品の深い読みにつなげている。年間延べ300名近いボランティアがさまざまな形で学習をサポートしているように、館のスタッフ以外に市民の関わりが大きいことも他館ではあまり例がないことであろう。

博物館は子どもに限らず地域の住民にとっても様々な発見や交流の場である。経験や習得された知識、価値観をもった大人たちの博物館での行動を子どもたちは何気なく見ている。ボランティアの姿から人生観、職業観が伝わることもある。モノを媒介にした世代間の刺激と交流は、生涯学習機関としての博物館の忘れてはいけない大事な側面である。

(5) 活動の結果

活動の振り返りについては、年3回開催する「文化の森活用委員会」、例年秋に開催する「博学連携フォーラム」での意見交換、また年度末に教師が提出する単元ごとの「学校活用改善シート」などを通して行っている。

学習の様子はHPで公開している他、毎年『活用の手引き・活用実践集』(2010年度:A4判、131ページ)を発刊し、すべての学習指導案の紹介と新たなプログラムの提案などを

行っている。

毎年、小学校卒業生(2010年度は556名)に対し6年間をふりかえった簡単なアンケートをとっている。a「知識・技術」、b「心・感性」、c「行動の広がり・発展」を考察のキーワードにして分析(詳細は『活用の手引き・活用実践集』参照)している。子どもたちが文化の森で様々な体験を感じた生の声を紹介し、また文化の森の学習後、子どもたちの意識や行動にどのような変化をもたらしているかその傾向を探ろうとしている。

2. 博物館と子ども

(1) 学びと発見の場として

○学校からの観点

《理解力の向上》

果たして学校は、博物館の利用を通して子どもたちにどんな結果を期待しているのであろうか。毎年発刊している『活用の手引き・実践集』における、活用した教師の感想(改善シート)を紹介する(下線:筆者、以降同じ)。

・「昔の家を実際に見学することで教科書に出てくる「土間」「ふすま」などの言葉の意味をよく理解することができた。」(小1国語[たぬきの糸車])

・「実際の体験により理解も深まり、昔のくらしに対するの興味が増していく様子が分かった」(小4社会[古い道具と昔のくらし])

・「水道がひかれる前の水の利用について、実際に水がめを見たり、当時の様子を描いた絵を見たりしながら話を聞けたので、よくわかった。」(小4社会[水はどこから])

学校ではできない資料の活用や現地学習と関連づけた学習により、子どもの理解力の向上に役立っていることを教師は実感している。

具体的に学力向上の効果も出ている。2008年度に行われた岐阜県学習状況調査によると、文化の森で学習を行った(市内9校中8校が授業実施)小学6年理科の単元「大地のつくり」についての理解度の数値について、市全体平均値が県平均に比較し明らかに数ポイント高いという結果が出た。これに関し、ある学校の分析では「文化の森で地層の観察学習をしたことが生きてはたらき、確実に身につけている。地層のでき方や広がりについて、観察実験をしたことが生きており、事実をもとに考えることができています。」としている。つまり、学習指導要領がめざしている「博物館の活用」にいう「実物を見ること」の効果が表れていると言える。その効果をさら

に高めるために博物館は、学校との綿密な打ち合わせをしつつ、子どもの理解が深まるような博物館資料の調査と、子どもの段階にあわせた教材の研究を行うことが求められる。

《人から学ぶ》

- ・「学芸員と遺物を探す活動が楽しく取り組むことができた」
- ・「専門家の話を聞き、知識を得るとともに・・・」
- ・「ボランティアの方のお話や実演がととてもわかりやすく・・・」

このように、博物館のモノを扱う学芸員やボランティアを通しての授業はとても効果があると考えている教師が多く、子どもたちもその存在に感動を受けている。前述したように、文化の森の学習は各分野のスタッフや多くのボランティアが支えているが、開館前にこれほどまで想定していなかった「人を通してコトを伝えること」の効果と意義を再認識していく必要性を感じている。

○博物館からの観点

《驚きと知的的好奇心》

一方、博物館としては子どもたちとの関わりの中で何に留意して対応すべきだろうか。同じく『活用の手引き・実践集』における活用した教師の感想から同じく紹介する。

・「身近なところに化石があることや化石林について知ることができ、驚きもあってよかった。」(小6理科[大地のつくりと変化])

・「教科書に載っている物と同じ様な古代の遺跡がたくさんあることを知り、驚くとともに、自分たちの地域に誇りをもつことにつながった。」(小6社会[米づくりの村から古墳の国へ])

注目したいのは、言葉尻を捉えるようであるが、教師はまず「知ること」があり、そのあとに「驚き」という子どもたちの行動があったことを感じているのである。この「驚き」のシーンをさらに意識して対応していくことこそが博物館として果たすべき役割ではないだろうか。

前述の子ども6年間を振り返ったアンケートから子どもの感想を拾ってみる。

・「たぬきのかげや、糸車のかげが見えてすごいとおもいました。」(小1国語[たぬきの糸車])

・「何万年前の化石にさわって『うわ、昔の物にさわっている』というきもちだった」(小6理科[大地のつくりと変化])

などである。ものやことからの関わりの中かで「驚き」があるというのは、博物館に特徴的なものであることは言うまでもない。ここで大切なことは、「すごい」「うわ」という子どもの「驚

き」や小さな「つぶやき」の瞬間に周りのスタッフがどのように対応するかである。単に聞き流すのではなく、また逆に、答えを言うてしまうのではなく、子どもの発見が次への関心の深まりや発展につながるような意識的な声かけ、サポートが求められる。ていねいにがまんづよく見守る態度を心がけていきたい。子どもにとって、一緒に「聞いてくれる人」の存在が必要なのである。

《多面的関心》

子どもたちの感想には次のようなものもある。

・「(室町文化体験を学んで)日本人は四季を大切にすることもわかったし・・・」(小6社会[日本の文化を体験しよう])

・「茶の湯や墨絵を体験して、日本人は相手を思いやる心があるけど、他の国の文化はどんな事があるか、知りたくなった。」(小6社会[日本の文化を体験しよう])

・「お母さんも洗濯や食事をやるのにすごく大変だということを学び自分もお母さんの手伝いをするようにしました。」(小4社会[古い道具と昔のくらし])

一つの事象にとどまらず、ものごとを多面的に、発展的に捉えようとする能力が授業を通して芽生えつつあることを感じる。子どもたちは学習を通して、自分の行動を振り返って考え、自分と他者を見つめる契機ともなっているのである。

以上、子どもたちの《驚きと知的好奇心》《多面的関心》が生まれる場面を紹介した。博物館はこのことについて学校以上に留意して丹念に対応していかなければならない。できる限り学習者を信頼し、その意志を尊重した関わり方、つまり「構成主義的博物館」(注:宮脇亮介「博物館での学習について」『博物館研究』No.509、2010年、p5)としての考え方に立つものといえる。

このような気づきの行動を引き起こすにはどうしたらよいか。そのためには、博物館はモノやコト、ヒトなどさまざまな力を存分に発揮して、子どもたちの興味関心を引き出す仕掛けをすること、雰囲気や環境、「隠れたカリキュラム」(注:末本誠・松田武雄『新版生涯学習と地域社会教育』春風社、2010年、p186)を作ることが必要である。時には道草をしたり、指導案から外れたりすることも必要なかもしれない。単なる思いつきではいけないが、周到な準備をした上で、子どもたちの新たな発見につながる状況を作り出すことが望まれる。

(2) 行動の広がりや博物館の利用のしかた

○大切な場

子どもたちは、みのかも文化の森という場をどのように捉えているのだろうか。

・「私達は社会の勉強とはちがった形で歴史を考えたり、学んだりすることができました。」

・「1年のころからとても楽しくて、新しい発見などもいろいろあったので、ずっと続けて私たちの後に生まれた子どもたちを楽しませてください。」

・「中学生になっても分からない所や研究で分からなくなった事があつたら文化の森の先生に聞きたいです。」

・「文化の森では、学校で学ぶ事以上に発見が多くあり、ためになりました。」

・「自然の空気にふれながら、自然のすごさ、よさを見つきたい・・・」

来館する子どもたちは、体験ができるモノとしての教材もさることながら、里山的自然、生活体験館という昔の民家、学校では感じることでできない自由で開放的な空気やたたずまいを感じている。子どもたちは、学校とは違う、何かしら驚きや発見がある場、継続的に知的好奇心を満たすことのできる場であることに気づいているであろう。ここが、学校へのアウトリーチでは伝えられない大切な「場」であることを改めて認識したい。

○広がりやリテラシー

再び『活用の手引き・実践集』における活用した教師の感想を見てみよう。

・「授業活動後「お母さんとまた来たい」と話す生徒がいて、継続的な文化の森の活動や博物館への興味を示す生徒が出てきた。」(特別支援・総合)

・「授業、文化の森の活動を通して、夏休みの研究テーマにする児童がいた。」(5年社会[私たちの生活と食料生産])

授業をきっかけにして子どもたちにとっての博物館に対する考えの変化、行動の発展などを教師が気が付いていることがわかる。

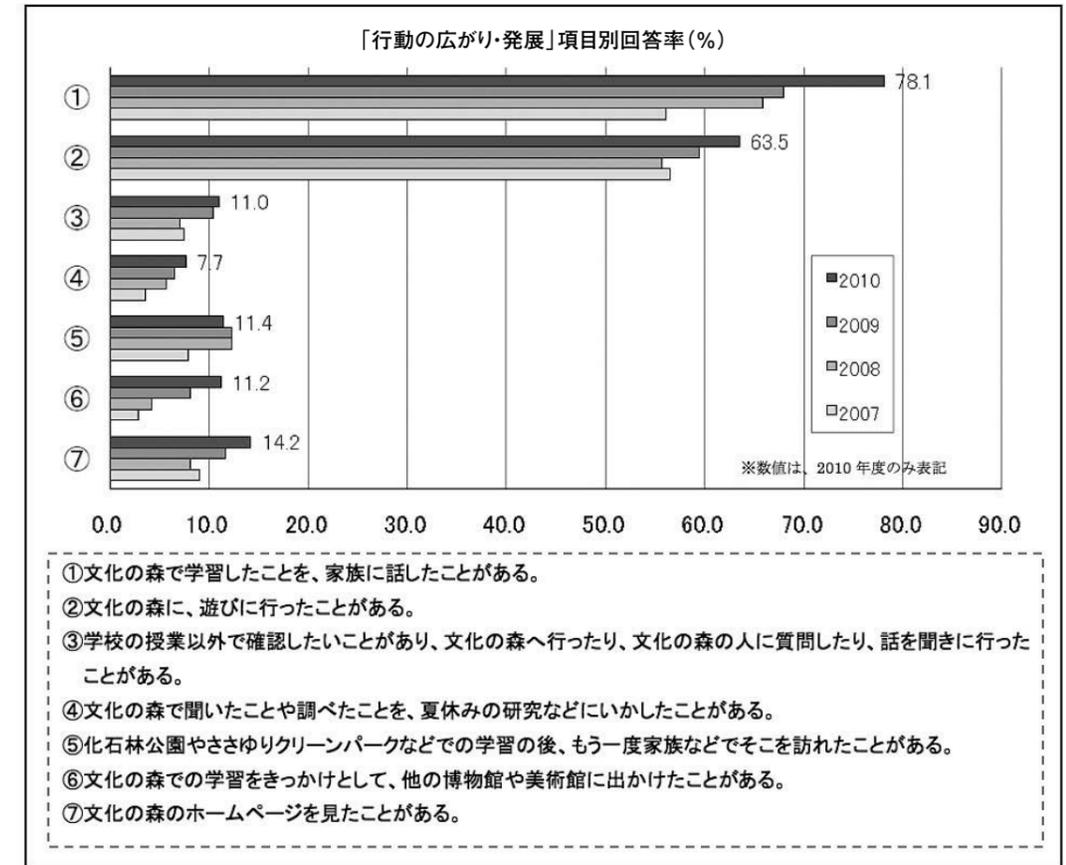
実際に子どもたちの行動はどう変わっているかを、前述のアンケート調査(前頁)のうち「行動の広がり・発展」の項目について試みる(次頁)と、7つの項目において、年々増加傾向にある。

自由記述欄では次のような感想もある。

・「文化の森でおしえてもらった事について家族に話しました。授業以外で行ってわくどくのようになっているかよく見た。」

・「家族に学習したことを話すと家族も知らなくて、もう一度今度は家族でその場所へ行ってかんさつした。」

・「文化の森で学習して家族にはなしたら、美術館につれて



2010年度「行動の広がり・発展」項目別回答率(『みのかも文化の森 活用の手引き・実践集(平成22年度版)』より)

- ①文化の森で学習したことを、家族に話したことがある。
- ②文化の森に、遊びに行ったことがある。
- ③学校の授業以外で確認したいことがあり、文化の森へ行ったり、文化の森の人に質問したり、話を聞きに行ったことがある。
- ④文化の森で聞いたことや調べたことを、夏休みの研究などにいかしたことがある。
- ⑤化石林公園やささゆりクリーンパークなどでの学習の後、もう一度家族などでそこを訪れたことがある。
- ⑥文化の森での学習をきっかけとして、他の博物館や美術館に出かけたことがある。
- ⑦文化の森のホームページを見たことがある。

いってくれて、もっとしることができて本当によかった。」

徐々にではあるが、博物館での活動後、子どもたちの行動や意識に発展変化があるのがうかがえる。

「博物館へ行ったことを家族に話す。」当然であるが、このことがまずスタートである。子どもの興味関心は家族との会話を通し更に深まるだろう。家族の対応次第では、発展的に他の施設を訪れることもあろう。学校の授業を起点に博物館利用のリテラシー醸成の芽生えが見て取れる。

子どもや家族にとって博物館を「(非日常)であるが(日常)であるところ」として利用する能力がはぐくまれようとしている。

3.おわりに

子どもに対する学校の思いと博物館の思いは違う。学校として身に付けさせたい知識と、博物館として子どもに伝えたいもの、両者の観点は違うと思われる。しかし、それを単なる対立的関係で捉えることは間違っているであろう。博物館が子どもに対して行おうとすることは、学校のねらいに対して、相反することではなく、またできないことを埋めるという補完的なものでもないと考えられる。非体系的であるが自由な発想で子どもたちの感性を刺激するという面で、付加的なものである。学校のねらいを理解した上で、博物館独自の手法を用い、さらなる探求心の向上につながるように、重層的に子どもたちと関わっていくことが必要だろう。

ところで、学校と博物館の連携、いわゆる「博学連携」は、館種や規模の大小などによってさまざまな形があり、各地で実践されている。時には博物館が学校からの要望をひたすら聞いたり、「丸投げ」を一方向的に受けるといった、いわば「サービス機関」のような存在になっていることもある。またその一方で、博物館が学校の指導計画と遊離したプログラムや補

助ツールを実施したりするなど「一人よがり」の対応に走っている例もたまに見受けられる。

ここで大切なのは、一定の学習理論を踏まえてそれぞれが考えと主体性を持ち、融合でも一方的でもない、互いの特性を認めあうフラットな「連携」の関係性である。ただ、その「連携」には一つの理想形態があるわけではない。子どもの発達段階や状況に応じた「よりよい利用」関係であればいいのではないかと考える。「子どもの学習支援」という共通目標のもとに、学校と博物館が子どもに対してそれぞれ何をすればよいか、その役割を両者が「face to face」で考えていくことが重要である。

参考文献

- ・小笠原喜康「博物館の学びとは」『博物館の学びをつくりだす』ぎょうせい、2006年。
- ・小川義和「博物館における学びの特性」『展示論』雄山閣、2010年。
- ・宮脇亮介「博物館での学習について」『博物館研究』No.509号、2010.11月号、2010年。
- ・末本誠・松田武雄『新版生涯学習と地域社会教育』春風社、2010年。
- ・みのかも文化の森『みのかも文化の森 活用の手引き-活用実践集』2011年ほか。
- ・西尾円「学校の博物館利用における学習活動の評価」『博物館学雑誌』33-2、2008年。
- ・可見光生「美濃加茂市民ミュージアムの博学連携活動」『瑞浪市化石博物館研究報告』33、2009年。



写真3 小6社会・米づくりの村から古墳の国へ



写真4 小6社会・日本の文化を体験しよう



写真5 小6理科・大地のつくりと変化



写真6 博学関連フォーラム(公開授業・小4・古い道具と昔のくらし)



写真2 小1国語・ためぎの糸車

Schedule 2011.4-2012.3

- 祝日 □休館日 ▲四季を食べる講座 ▲アートな1日講座
- ▲ていねいな暮らし講座 ▲まゆの家年中行事 ▲のんびり自然観察会
- ▲みのかも文化の森 自然な！ ▲森のコンサート ▲夏休み子ども講座
- ▲ふらっとみよーじあむ ▲その他

- 収蔵品展 蚕とまゆ展 (5/21 ~ 8/28)
- 収蔵品展 暮らしの道具展 (9/10 ~ 3/20)

4	5	6	7	8	9
<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (5/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (5/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (5/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (5/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (5/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (5/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (5/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (5/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (5/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (5/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (5/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (5/1)

10	11	12	1	2	3
<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (10/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (10/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (10/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (10/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (10/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (10/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (10/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (10/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (10/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (10/1) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲文化の森ギャラリー (10/1) ▲お茶会 ▲ふらっとみよーじあむ (10/1)

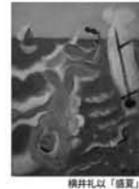
企画展

ある日の情景、緑と子どもたち 名古屋画廊コレクションから

4/16(日) ▶ 6/5(日)

●観覧料 一般200円(100円) 高校生以下無料
()は20名以上の団体料金。かるちすとくらぶ会員は無料。

東海地域の美術家を紹介する場として、郷土の美術研究にも役割を果たしてきた名古屋画廊コレクションから、当時のテーマに沿った「緑」と「子ども」を題材とした洋画を展覧します。作家たちが日々の情景を丁寧に描き出した数々の絵を前に、「絵画を楽しむ」自分だけの時間をゆったりとお過ごしください。



横井礼「風景」

没後50年 津田左右吉をあらためて問う展

12/17(日) ▶ 2012.3/4(日)

●観覧料 一般200円(100円) 高校生以下無料
()は20名以上の団体料金。かるちすとくらぶ会員は無料。

津田左右吉の業績は、歴史、思想、文学などの幅広い学問分野で、今も大きな位置を占めています。展覧会では、特に歴史学と思想史に与えた影響を知ることで、私たちが何を学びとることができるかを探ります。あわせて、津田のふるさとや関わった人々などを追うことで、知られざる津田の人間像にもせまります。美濃加茂市・早稲田大学文化交流協定締結事業。



津田左右吉

「おどろき はっけん みのかもの自然」展

7/16(日) ▶ 9/4(日)

●観覧料 一般200円(100円) 高校生以下無料
()は20名以上の団体料金。かるちすとくらぶ会員は無料。

「なぜ？」と感じている身近な自然の不思議を手掛かりに、みのかもの自然の「いま」を美濃加茂自然史研究会メンバーと共についで調査、展覧します。自分の足で歩いて、目で見つけて、手で触れて…という活動をしています。あわせて、これまで収集してきた標本も展覧します。



文化の森のツブラライ

景観の彫刻 - 庭 - 笹谷晃生展

9/16(日) ▶ 10/23(日)

●観覧料 無料

「芸術と自然」をテーマとした現代美術の展覧会。今年度は神戸市在住のアーティスト・笹谷晃生(1953年-)を紹介いたします。「環境」をテーマとして制作を続けてきた作家は、銅や鉄、陶、ガラスといった素材を使ったインスタレーションや、植物をモチーフとした彫刻作品などを数多く手がけてきました。展覧会では彫刻と空間が一体となってつくります。インスタレーション「景観の彫刻-庭-」とともに、作家とのワークショップも合わせてお楽しみください。



17の地

文化の森ギャラリー 2011 Woodland Gallery 2011

4/29(日) ▶ 5/1(日)

●観覧料 無料

70人を超える若手アーティスト達が集い、敷地内の森の中で自身の作品を発表します。



嵐風

収蔵品展 中山尚子展

12/10(日) ▶ 2012.1/29(日)

●観覧料 無料

イラストレーターとしてパッケージ、ブックカバーなど幅広く活躍する瑞浪市在住の中山尚子(1954年-)を紹介いたします。



嵐風

収蔵品展 眞板雅文展

2012.2/5(日) ▶ 3/20(日)

●観覧料 無料

美濃加茂市に屋外作品をのこした彫刻家・眞板雅文(1944-2009年)の作品を展覧します。



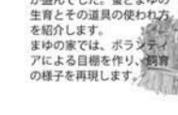
時

収蔵品展 蚕とまゆ展

5/21(日) ▶ 8/28(日)

●観覧料 無料

この地域は、古くより養蚕が盛んでした。蚕とまゆの生やその道具の使われ方を紹介します。まゆの家では、ボランティアによる目録を作り、教育の様子を再現します。



シマダク

収蔵品展 暮らしの道具展

9/10(日) ▶ 2012.3/20(日)

●観覧料 無料

昔の道具から、人々の知恵や生活の苦労などを知ります。学校の学習活動とも連携し、体験しながら学びます。市民のみさんから寄贈された道具を展示します。



シマダク

学校と美術館の連携について

～鑑賞教育指導者研修会の実践報告～

静岡県立美術館 学芸課 主査 鈴木 雅道

はじめに

当館では、いわゆる教育普及事業を鑑賞系、体験系、学校連携の三つに大別している。鑑賞系は、展覧会と収蔵品を扱った講演や美術講座、フロアレクチャーなど、また体験系は、実技講座や創作活動支援、ワークショップなどであり、当館草創期より教育普及活動の根幹を成してきたものである。そして学校連携は、十数年前から取り組みをスタートし、学校団体観覧時の鑑賞プログラムの開発やオリエンテーション、学校の先生方(以下先生とする)対象の企画展美術講座、ロダン館でのデッサン実習など、先生の理解と協力を得て、成果をあげてきた。そして、さらに学校連携事業を積極的に推進するため、小中学生の観覧料無料化(その後、段階的に高校生・大学生の収蔵品展と一部企画展の観覧料が無料となる)を導入した。これにより、引率者観覧料減免(註1)とあいまって、学校団体は無料で展覧会を観覧していただけるようになり、ねらいどおり、児童生徒の文化享受機会が促進され、児童生徒の観覧利用が増加すると考えた。

しかし、学校が美術館に児童生徒を引率するということは、観覧料を無料化すること以外に、教育目標と成果、事故責任、交通手段と長時間の移動といった高いハードルを超えなければならないことを改めて浮き彫りにした。ハードルが高いが故に、学校は密度の濃い鑑賞教育が保障されることを期待して当館に来館するのだということを再認識した。

そこで、無料にしたから当館を利用しやすくなるのではなく、無料にしたからこそ、学校団体を受け入れる美術館には期待に応える責任があり、教育という視点に立った鑑賞を推進しなければならないという、鑑賞教育の原点に立つことができた。

そうして先生との懇談を深めていき、学校側から見ると、美術を楽しむことと美術館を楽しむことは異なるものであって、美術館における鑑賞教育には、個々の先生の要望や児童生徒の実態にあわせた柔軟な対応が必要であり、学校との連携を図る際には何度か双方向の意思疎通が不可欠であるとの認識に至った。先生が児童生徒に対して、美術を楽し

ませたいのか、美術館を楽しませたいのかを初期段階で把握し、人材育成、文化芸術振興、文化財保存など美術館の目指す目的に結びつくような学校選択型のプログラムを段階的に導入していった。

そうした背景には、現行学習指導要領には、学校教育現場での美術館・博物館の積極的な活用が明記され(註2)、学校行事や特別活動以外の、図画工作科や美術科という教科教育における美術館の活用(学芸員の出張授業や美術館での授業など)に関する相談や要望が増えたことがあった。そうした先生の研究に後押しされる形で、当館の学校連携事業の体制を作っていくことになったのである。

その学習指導要領草稿に少なからず影響を与えたのがPISA2006の学力調査結果であった。子供たちの読解力の低下が問題視され、それを受けて現行の学習指導要領では、美術科においても言語能力の育成を図るよう工夫が求められている。さらに加えれば、表現と鑑賞の一体化(創作活動と鑑賞活動が連動し、相互の活動内容を補足したり、関係性を保持したりして、年間教育目標を達成する)がキーワードとして浮上ってきており、展覧会の観覧をそっくりそのまま授業として位置付けるのが困難になってきた。加えて、希少な校外学習の機会が、職業体験や福祉体験などにあてられるのが慣例となってきていることもあり、校外での学習機会の場として美術館を選択してもらうためには、先生の想像力と美術館の学校教育への理解が不可欠になっている。

そうして、当館の目指す学校との連携は、単なる作品解説に留まらず、地域・人材・職業・情操・言語能力の育成など学校教育と結びつくための引き出しをいくつも用意していることを先生に知ってもらい、学校と美術館が相互の得意分野を活かしながら、子供たちの文化享受の機会を有意義な教育の場へ昇華させるために当館としてのスキルアップを図る必要があると考え、平成21年度に第一回鑑賞教育指導者研修会を実施し、平成22年度には第二回を、平成23年度には第三回をそれぞれ開催するにいった。

I 当館における学校連携の現状

学校連携と一言で言っても、連携が目的ではないだけに、どのような形状をとれば連携である、といった連携の輪郭を描き出すことにそれほど意味はない。先生に対して、当館としての姿勢、つまり連携によって生成される想定結果が提示され、計画から実施の間に先生の存在感が感じられて初めて連携の意義があるものと考えられる。

一つの例として、文化芸術の享受を目的として来館する学校があった場合、美術館に作品があるのは当然であって、放っておいても作品が目に入る環境が整っているのは言うまでもない。美術館としては、作品が目に入る環境をより有効に生かし、一つでもいいから記憶に残る作品を享受してもらうために、当館としてできる施策を提示し、先生の要望を聞く。その際、当館が重視してきたのは、収蔵品を有する美術館が行う鑑賞教育であることと、学校のバリエーションを視野に入れた選択可能な柔軟性を保持することである。前者は、短期的な企画展の鑑賞プログラムの考案と、常設展や収蔵品に焦点をあてた中・長期的な鑑賞プログラムの考案を意味し、後者は年齢や発達段階、校種や専攻などの違いによる一期一会の対応を意味する。

1 学校団体観覧者への鑑賞教育の実践

(1) 学校連携のコーディネート

当館では、学校向けに粘土・絵具教室や観覧支援、鑑賞プログラム、出張美術講座等の内容と申し込み方法を掲載した【美術館教室のしおり】という冊子を、毎年県内全学校に配布し、学校連携の足がかりとなるプログラムを公開している(註3)。掲載したプログラムのメインが、常設展と収蔵品にかかる鑑賞プログラムだったためか、プログラムからのオーダーが多数を占める一方で、企画展観覧をメインにする学校は旅行代理店を通して申し込むことも間々ある。いずれにせよ、ほとんどの場合、当館教育普及スタッフから返信し、連絡をとることにしている。複数校の同時来館、昼食会場の相談、複数プログラムの要望、数百人規模の来館、プログラムの内容変更要請などを調整し、当日のタイムスケジュールと詳細を当日担当する学芸員に伝えるまでを担う。とはいえ、学校連携事業は、交通渋滞、集団ウイルス感染、豪雨など、相互に敷いた連携のルールに乗れるかどうか、当日にならないとわからないということを忘れてはならない。

(2) 観覧支援

i オリエンテーション

当館では団体が観覧する前に、展覧会や作品について学芸員から簡潔にうけるレクチャーをオリエンテーションと呼んでいる。学校団体観覧の場合、最も要望の多いプログラムである。児童生徒の人数と手荷物大きさに応じて、講堂、講座室、エントランス、入館口付近というように会場も変えて行っている。先生から寄せられるオリエンテーション内容の要望ベスト3は、下記のとおりである。

①注意事項を話してもらいたい

②作品の見方を話してもらいたい

③美術館の紹介と学芸員の仕事を紹介してもらいたい

通常、一般来館者向けに行うオリエンテーションは展覧会内容の解説に限定しているが、学校団体向けには先生と相談した上で、内容決定することがある。また①については多くの学校から要望が続いたため、学校団体向けオリエンテーションの内容に常時加えるようにした。さらに、②については、出張美術講座をとおして、先生方の期待する作品の“見方”とは何かを考える契機につながった。

ii セルフガイドの活用

常設展であるロダン館彫刻の生徒向けセルフガイドは、平成6年ロダン館オープン当初から随時作成され、先生の要望があれば事前に郵送または当日配布してきた。内容は作品解説というよりも、作品の印象や人体彫刻の姿態から想像した感情を探って言葉にしていこうように構成されており、一つの解答へ集約して導いていくというよりも、個人の感性を開放していくという作りが特徴となっている。

現在は、それら常設展のセルフガイドは当館ホームページからダウンロードできるよう公開しており、学校団体観覧の事前学習の一助として活用を促している。

さらに、平成20年度の小中学生観覧料無料化導入と同時に、すべての企画展で小中学生向けセルフガイドを製作しており、団体観覧の人数に合わせて配布する取り組みも行っている。通常、セルフガイドは、展覧会開幕に合わせて完成を目指すものであるが、当館では企画展が開幕してから作成するようにしている。理由は、実際に展覧会会場を児童生徒の目線で歩いてみることを重視していることである。個々の展示作品についての専門的な知識を教授することも大切ではあるが、初めて美術館を訪れる児童生徒にとって、初の美術館配布資料となるであろうセルフガイドには、美術館の顔、美術館が楽しい場所であることを印象付ける役割があるとも考えているのである。会場を歩きながら、児童生徒が興味を持ちそうな作品を探し、図工・美術以外の教科につながるような

要素を探し、軽快な会場案内を考えてみる—これが会場を歩きながらつい見たくなるもの、持ち帰って見返したくなる内容につながるのではないかと考えている。このセルフガイドは、言語能力の育成が重視される限り、鑑賞教育を充実させるツールとして、今後も発展していく可能性があると考えられる。

iii 美術館利用ガイドの活用

上述したとおり、学校団体向けオリエンテーションでは、展示会の解説以外に注意事項や見方を話してもらいたい、という要望に応えている。しかし、もともと観覧の時間が少なく、さらに複数集団が時間差で来館するというような場合、オリエンテーションができないことがある。そういった団体向けに、美術館利用のお願い事をイラスト入りで解説したリーフレット【ひらけ美術館のとびら!】を配布している。観覧時の諸注意は、走らない、大声を出さない等、一般的な内容である。しかし、それらをそのまま列記するのではなく、イラストをまじえながら、マナー教育という社会教育施設としての役割を果たし、そして文化財保護という美術館の責任を知ってもらうために製作したものである。さらに、美術館での作品鑑賞が展示室内で終わるのではなく、帰宅後、感想を家族に話すまでの長いスパンで捉えて欲しいこと、キャプションや順路を重視して展示会をみるのもいいけれど興味のある作品からみるのも楽しいこと、本物の作品から受ける印象を大切にしたいことなど、観覧上の注意事項に留まらず、当館の鑑賞教育の姿勢を前面に押し出して製作した。

iv 学校対応ボランティアスタッフとの鑑賞

当館では開館当初から平成20年度まで200名を越えるボランティアの方々がいくつかのグループにわかれて、館運営とサービス向上に尽力してくれた。その中で、いわゆる展示室内で作品についてのトークをするグループの有志が、学校団体の観覧補助を担っていた。しかし、ボランティアの方々の努力とは裏腹に、有志で運営していたが故に、人数確保とトーク内容や対応方針の共通理解が難しいという問題が時折浮上していた。

そこで、平成21年度の新規ボランティア組織立ち上げにあわせ、学校団体観覧の補助を専門とするボランティアグループを立ち上げることにした。しかも、作品解説や質問に答えることよりも、児童生徒の感想を聞き出し、児童生徒同士の意見交換を補佐する距離感を保つことを重視した。そうしたモチベーションを維持するのは難しく、当初は「作品解説をする方が簡単に思える」、「子供たちの言葉を聞いてそれにどう

言葉を返してよいかわからない」といった不安の声が寄せられた。しかし実践と研修を繰り返すことで、「子供たちの感性は本当にすごい」、「答えに窮する質問に対して、わからないものはわからないと言って、いっしょに考える方向にもっていけばいいのではないか」というように、学芸員とボランティアが当館の鑑賞教育の方向性を共に打ち出していくことにつながっていった。

このボランティアによる観覧支援は、展示室の各所にボランティアが立って、観覧する児童生徒に話し掛けるやり方と、数名の児童生徒のグループにボランティアが一人ついていっしょに観覧するやり方とがある。これも先生の要望と団体人数、当日来られるボランティア人数などによって相談して決めている。どのやり方でも利用団体からは好評で、またボランティアの方々も児童生徒との対話を楽しみにしている。

(3) 美術を楽しむためのプログラム

i ロダン館ななふしぎ

これは常設展示のロダン館彫刻を対象にしたクイズが書かれた7枚のカードと鉛筆を持って展示室内を歩き、そのクイズに回答するゲーム感覚の鑑賞プログラムである。十年以上前からクイズ内容は変わらないが、専用バインダーを用意したり、答え合わせの際の解説内容や順路などを再編したりしてきた。

さらに昨今は校種や人数、学年によっても内容を変えるようにしている。このプログラムは、児童生徒が積極的に作品とかかわらない限りクイズの回答が得られないため、充実した鑑賞活動の様子を見ることができている。

ii 音のかけらワークショップ

これは、音を鳴らして鑑賞する当館所蔵《音のかけらI》(金沢健一 作)という作品を用いた学校団体向けのワークショップである。作品は、直径約2メートルの厚手の円形鉄板を不定形に溶断し、そのピースをゴムで床から浮かせて再配置したものであり、作品の周りに座ってバチでたたいたり、ピンポン球を転がしたりして金属音を楽しむことができる。近年は特別支援学校からの申し込みが多く、素材感と不均質で偶然できる音を楽しみながら、最終的に感情や意志を音にのせて表現するといった、一種のコミュニケーションツールとして作品を活用したワークショップ内容を中心に行っている。

iii 学芸員による鑑賞支援

先生からの要望があり、且つ一般来館者の観覧が保障されれば、展示室内で学芸員と児童生徒が、作品を前に会話をしながら鑑賞することがある。昨今は美術部団体や総合

的学習の時間を利用したグループでの調べ学習といった比較的少人数での観覧パターンが増加しているため、実施しやすくなってきた。別室にレプリカ作品を用意しておき、そこで思う存分会話をした後には観覧することもある。

当館収蔵品展においては、会期中放映するための展示会紹介VTRや会期中配布するセルフガイドを製作してもらうため、取材という位置付けで会期前に作品を鑑賞してもらうような特別なプログラムを実施することもある。

(4) 美術館を楽しむためのプログラム

i 美術館の秘密を探れ

美術館に限らず、施設には一般来館者が入場できるオープンスペースと入場できないバックヤードがある。児童生徒にとって、バックヤードに立ち入ることは、美術館に来館する以上に非日常的な経験であると同時に、当館としても美術館の機能、役割などを知ってもらう好機と捉えている。主に、警備室、搬入口、荷解室、学芸課室などを歩きながら、作品搬入から展示までの流れを話し、防災対策や作品保護のための工夫についてレクチャーしていく。一方、児童生徒は、専用のワークシートを受け取ってバインダーにはさみ、話を聞きながらそれに書き込んだり、感想を記入したりして持ち帰る。ある程度自由に撮影も許可しているため、職業調べ学習として利用する学校が多い。

ii キャリア学習

昨今の中学校、高等学校では、職業体験や進路選択を目的にしたキャリア学習が盛んに行われている。幸いなことに、美術館を学習対象の中の一つに選択してくれる学校が数多くあり、キャリア学習を主たる目的に、観覧を従たる目的にして来館している。美術館は展示会や収蔵品を中心に観覧する場であることに変わらないが、外からの見方や期待が変化してきている以上、それに柔軟に対応することも必要である。さらに、そうしたキャリア学習の要望に応えることは、将来の美術館職員や美術館の支援者、そして美術のファンを増やすことにもつながる。

キャリア学習といっても、学芸員の仕事、学芸員になるための進路、美術館で働く人の仕事内容、美術館の役割などについてのレクチャーや実技室イベントの補助、スタッフ体験など多岐にわたる。中学校からの要望は体験型が多く、高等学校からの要望はレクチャー型が多いという傾向がある。生徒に感想を聞くと、ブックショップでの商品陳列作業やチケットのもぎり体験、粘土・絵具教室の補助といった仕事が好評のようであった。

iii 粘土・絵具教室

キャリア学習の中で中学生向け職業体験のメニューに多く取り入れているのが粘土・絵具教室での補助作業である。このプログラムには、幼稚園、保育園、小学校、特別支援学校などから、年間150校余の申し込みがある。粘土教室は約1tの粘土を使った造形活動であり、絵具教室は屋外タイル面に刷毛で描画する活動である。素材に親しむ個人活動から最終的には共同制作で大きなものを作りあげていく。園や学校ではできないダイナミックさと片付けまでをプログラム内に組み込んでいることが好評の要因である。また、インストラクターや助手を雇い、当館スタッフとともに、発達段階や季節感、展示会テーマに応じた柔軟なプログラムを考案していくようにしている。

2 アウトリーチ活動について

(1) アウトリーチ活動の意義

アウトリーチ活動は、広報を目的とした館外への働きかけという意味合いが強いが、当館の学校連携に限って言えば、美術を愛好する子供達を育てることと、中・長期的に美術館の利用者や支援者を育てることを目的にして行っている。現在行っている主なアウトリーチ活動は、学校への出張美術講座、学校や進学相談会会場等での進路講演、教員研修会での講話や模擬授業などである。いずれも作品のない場所で、話をしたり、感想を聞いたりするため、スライドやワークシートを用意したりする必要があり、レプリカや教材キットを作成するという発想もそこから生まれた。

(2) 出張美術講座について

i レプリカと教材キットの製作

出張美術講座は、県西部と県東部など当館から遠方の学校からの利用手段として、また来館前の事前授業として、さらに学習指導要領での美術館の活用手段の一つとして期待され、近年申し込み件数は急増している。その内容を充実させるため平成20年度末に収蔵品のレプリカや教材として使用するためのキットを製作した。

NO.1

《四季花鳥図屏風》レプリカ 六曲一双

当館所蔵の室町末期の狩野派代表作。屏風の基本形態と用途を解説するのに適している。また四季が屏風の右隻から左隻へと変化する様子を読み取らせたい。

NO.2
 <曾我物語 富士巻狩・仇討図屏風>レプリカ 六曲一
 一双
 時間が右隻から左隻へと変化する様子、富士山麓でのストーリー、金雲によって仕切られた漫画でいうところのコマ割りの効果を知ること、日本文化に親近感を持たせたい。

NO.3
 <巨岩海浜図>レプリカ
 当館所蔵の川村清雄代表作。御当地下田の海浜風景、神代杉に直接描かれたため木目が見える画面、極端に横長の画面など子供達が考える絵画の既成概念の枠を越えた作品に興味を持ってもらいたい。

NO.4
 <嵐の海>レプリカ
 当館所蔵のクロード＝ジョゼフ・ヴェルネの油彩画。現在もローマ郊外に残る史跡と空想で描かれた荒海を組み合わせた風景画で、雷や荒波の迫力ある描写と自然に翻弄される人々の様子を観察させたい。

NO.5
 <寿老人>レプリカ 掛幅
 狩野芳崖の明治期の作品。掛軸に触れ、水墨の線の匠さと吉祥モチーフを発見し、日ごろ見聞きする七福神とは違う怪しい寿老人を観察してもらいたい。

NO.6
 <地獄の門>プリントバナー
 ロダン作<地獄の門>を1/4スケールで平面プリントしたバナー。200名以上の人物と上部の<考える人>を発見し、来館前の事前学習に役立ててもらいたい。

NO.7
 <カレーの市民>紙芝居
 ロダン作<カレーの市民>の6名が、街を救った英雄でありながら奴隷のような身なりで立ち、覚悟した姿で表現された理由を想像する紙芝居。全12枚構成。



NO.8
 屏風絵プリント紙
 <四季花鳥図屏風>、<曾我物語 富士巻狩・仇討図屏風>、<樹花鳥獣図屏風>の各一雙を1/10縮尺でプリントした厚紙。そのまま卓上屏風にも、裏面に描画してオリジナル屏風にもすることができる。

NO.9
 素材別六種立方体当館収蔵彫刻作品の素材六種類(磨きブロンズ、錆び止め剤塗布ブロンズ、木材、テラコッタ、大理石、スチール)を、すべて一辺9cmの立方体で作り、セットにしたもの。素材の質感や重さの違いを体感してもらうとともに、ブロンズ彫刻の内部が空洞であることを実感してもらいたい。



NO.10
 館藏品パズル(六種類)
 <樹花鳥獣図屏風>一雙、<ルーアンのセヌヌ川>、<巨岩海浜図>、<ミクロの世界>、<ラク・クロッシュ>を、各30ピース程度のパズルにした。授業導入部で活用し、細部まで観察させ、その後の鑑賞に生かしたい。

以上、10種類の当館オリジナルで制作したものに加え、他館や他機関から寄贈されたレプリカ(掛軸、屏風)、平成18年度に制作した教材(マグネットシート)を加えた約20種のレプリカと教材キットを単体、または複合的に使用して出張美術講座を行ってきた。

H19	H20	H21	H22	H23
31件 (3641)	25件 (3211)	51件 (4493)	55件 (4203)	34件 (2180)

※表中()は、参加者合計人数
 ※H23は、平成24年1月末の実績
 ※H21はレプリカや教材キットを活用した「出張美術講座～特別プログラム編」という出張美術講座強化月間を設けた。

平成20年度末に作成したレプリカと教材キットは、多くの先生方に利用してもらおう、貸し出しを視野に入れた頑丈なつくりにし、さらにインターンの協力のもと、それらを活用した授業プラン(簡易学習指導案)を作成した。



<授業プラン部分>

作成した授業プランをレプリカ使用授業の一例として先生方に提示したところ、鑑賞授業の難しさは、テーマ決めと評価にあるとご指摘をいただいた。そこで授業プランに改良を加え、先生方に評価してもらおうべく、同年、出張美術講座の重点期間を設けて24校の学校で授業を行った。下記は出張美術講座後、実施校に依頼したアンケート集計である。

- 出張美術講座一特別プログラム編の実施期間
平成21年11月9日～平成22年3月31日まで
- 実施件数 24件
- 受講人数 1666名
- ジャンル
西洋3件、日本画14件、日本洋画3件、現代1件、ロダン10件(複数内容校あり)
- アンケート集計
 (1)先生が「出張美術講座～特別プログラム編」を申し込んだ理由、ねらい
 ・山間地育ちで美術館になじみがないため、実寸大レプリカで絵を見る楽しさを感じさせ、自発的に美術館へ足を運ぶ人材を育てたい
 ・美術教員の資質向上と当館とのパイプ作り(教員研修)
 ・(当館まで遠いので)美術館への興味をもたせる
 ・日本の「よさ」に気付かせたい(日本画)
 ・屏風や掛軸などを実際に見たり、触ったりする機会をもたせ、日本美術に親しむ
 ・本物は見ることができないまでもそれに近いレプリカを鑑賞し、(特に日本文化)美術作品をきちんと味わう機会をもつ 4
 ・子供達が鑑賞力をつけるために作品を鑑賞する上での視点を学習させる 2
 ・京都方面への修学旅行の事前学習として屏風や障壁画の見方等、日本画に興味関心をもちたい
 ・6年前から佐野美術館との共同鑑賞授業を行ってきたが、今回は二館との連携で、より充実した授業になることを期待した
 ・学芸員等専門家に話しをしてもらうことで絵画への興味を高めていく
 (2)申し込んだ目的や授業のねらいは達成できたか

達成できた	ほぼ達成できた	どちらとも	あまり達成できなかった	全く達成できなかった
86%	7%	7%	—	—

- 「(2)」で<達成できた>に○をつけた理由
 ・講師の話に真剣に耳を傾け、はじめて挑戦した生徒同士の作品解説でも普段見られないほどの積極性を発揮し、楽しんで鑑賞することができていた
 ・鑑賞指導の幅が広がった
 ・学芸員の仕事やレプリカについて認識が深まった
 ・子供達が日ごろ目にしない屏風に興味を持てた
 ・絵をじっくり見て、発見・驚きを感じることが出来た 2
 ・学芸員の話が興味深かった
 ・屏風や掛軸に興味を持ち、鑑賞は楽しいと思った子供が多かった
 ・学芸員の話をもっと聞きながらしっかり聞く子供の姿がありました。
 ・子供達のイメージしていた《考える人》とは違い、芸術分野からの見方ができた
 ・子供が興味を持つ心配していた《地獄の門》に大変興味をもってくれた
 ・よく見るとよさやおもしろさがいっぱい隠れていることに子供達が気付いた 2
 ・授業中記入させたワークシートや付箋の言葉から興味関心をもったことがうかがえた
 ・実物大レプリカ展示会の学芸員によるギャラリートークでは生徒の多くがおもしろさを味わっていた
 ・次の日の日記に、「おもしろかった」と多くの反響があった
 ・制作活動の原動力につながった
 (4)「(2)」で<ほぼ達成できた>に○をつけた理由
 ・個々の意見をもっと吸い上げることができるとよかったのではないかと
 ・班の話合いの場面で、箇条書きで書けるような用紙を用意したり、時間を確保したりしてはどうか

(5) 児童・生徒の授業後の感想や変化
(生徒感想…●、教師意見…△)

- 近くでじっくりと絵を見ることが出来てよかった
- いつか自分で本物を見たい(県立美術館に行きたい)と思った 6
- 日本画は色のバリエーションが少ないと思っていたが鮮やかな絵もあった 3
- 自分達の意見を出し合って発表するのはとてもよい経験になった
- 絵に動物が描かれるのは幸せを意味するのだと初めて知った
- 屏風の役割や見方など知らなかったことがわかりおもしろかった 19
- 墨でいろんな濃さが出せるとは思わなかった
- 絵がすこりリアルだった 3
- ひとつの絵にはそれを描いた人の思いや意味があることがわかった
- 屏風(四季花鳥図レプリカ)の前で、静かに読書をした
- 屏風が日用品と知ってびっくりした
- 集中して見て頭が痛くなった
- よく見て好きな絵が見つかった
- △版画制作で、線を意識したり、友達の作品に関心をもつ子供が増えるなど作品に興味をもつ姿勢が向上したと思う
- △内容がよく分かり、ロダン彫刻に興味をもてたようだった
- △他の作品やジャンルの話してもらいたいと感想をもらす児童が多い
- △素材別六種立方体の紹介がよかった
- △「ほくも言いたい」と授業終了後に感想を言いたがった児童がいました。楽しかったから、友達と同じものを見てほくは少し違うから…と伝えたかったのだと思います。
- (6) 年間を通じて、随時、出張美術講座を受け付けていることを知っていたか
知っていた…64% 知らなかった…36%
- (7) レプリカや教材キットのレンタルが可能なのは知っていたか
知っていた…93% 知らなかった…7%
- (8) 出張美術講座の実施、レプリカや教材キットのレンタルの今後の申込みは
申し込みたい…93% 申し込まない…7%
- (9) 「出張美術講座～授業プログラム編」の感想や教育普及事業への要望
 - ・とてもよい企画なので、もっとPRしたらどうでしょうか
 - ・自動車免許がないので運搬していただけないでしょうか
 - ・生徒の普段見ることのできない表情をみることで有意義だった
 - ・丁寧に説明していただき、時間が足りないくらいですみませんでした
 - ・生徒はもちろん、参観された先生方からも好評だった
 - ・遠隔地の学校との連携を強化してほしい
 - ・生徒達は昼休みのレプリカ展覧会自由鑑賞が特に楽しかったようです
 - ・歴史好きの男子生徒や教員は特に興味を抱いていた(日本画授業)
 - ・図工の鑑賞授業の難しさを感じていたので勉強になった
 - ・子供達が楽しそうに、感じたことを話していたのがよかったです3

<平成21年3月末集計>

ii 言語活動の重視

第一回鑑賞教育指導者研修会後に行った出張美術講座-特別プログラム編では、屏風レプリカと付箋紙を使った授業が、特に先生から好評であった(以下①～⑤事例)。

- ① 屏風の形状や機能を学習する
- ② あらかじめ氏名記入した付箋紙に、屏風絵を見ながら疑問や発見を記入する
- ③ 記入した付箋紙は、直接レプリカの該当部分に貼っていく
- ④ 学芸員は付箋を見ながら質問に答えたり、グループで

話し合いをさせたりする

- ⑤ 授業を通じてわかったことやさらに疑問に思ったことなどを付箋紙に記入する

教材キットを使用した出張美術講座を始めた当初は付箋紙を使用していなかったため一人ひとりの児童生徒が授業で何を見、どう変容したかが観察しにくい、と先生から指摘を受けた。屏風絵の解説や全員での話し合いの前後に記入したものがあれば、第一印象とその後の変容というように評価の参考となる資料ができるのではないかと考えたのである。



<付箋紙を使った出張美術講座の様子>

最初は屏風絵の一部に注目して付箋紙を貼っていく子供が多いが、いっしょに屏風絵をみていくうち、季節に合わせた植物が配置されていることや水の流れの向き、遠景近景等の表現の相違などに気付いていくこととなり、最終的に隅々まで屏風絵を観察し、ポイントとなる見方を習得することができる。

鑑賞の授業は、児童生徒個人の活動で終始展開することが多いと思われるが、付箋紙を使った形式をとることにより、全員で貼った付箋紙を全員で眺めることができ、他者の発見や疑問を共有することができる。さらに、付箋紙記入内容を読み上げてもらったり、疑問について話し合ってもらったりすることで言葉での表現機会が確保でき、また付箋紙と授業終了時の感想という文字による言語表現の機会も確保することができるため、児童生徒の鑑賞活動は一定の範囲内で可視化される。こういった授業手法は、図画工作科や美術科の教科教育の中で、言語活動を取り入れた言語能力の育成につながるのではないかと考えられるし、一人ひとりの児童生徒の変容(授業前と授業後の変化)を読み取って評価に結びつけることができるとも考えられる。

3 言語能力の育成と想像力について

(1) 言語能力の育成と鑑賞について

平成21年度末に掛川市二の丸美術館の協力を得て、当館収蔵品展を開催することになった。その際、それに合わせて、開催館近隣の小学校児童に、展示作品のキャプションのようなもの(作品解説というよりは感想)を書いてもらい、作品といっしょに展示するという企画を考案した。主旨に賛同していただいた掛川市立曾我小学校において、4年生を対象に、平成22年2月10日出張美術講座を開催した。それは次の①～③のとおり、45分授業二コマで導入からキャプション原稿の完成までを行うというものだった。

① <四季花鳥図屏風>レプリカの鑑賞

- ・屏風の形状や用途についてクイズ形式で解説
- ・描かれた作品を鑑賞し、発見した物事を発表(ここでは「鶴がいる」だけではなく「上を向いて口を開けた鶴がいる」のように観察を深めさせるよう対話式で鑑賞)
- ・何が描かれているか、季節や時間の目安はあるか、遠くや近くの描き分けはどんな工夫がされているか、など作品のテーマに近づくよう考えさせる

② 掛川市二の丸美術館での当館収蔵品展「日本画の風景展」出品作品による鑑賞

- ・富士山が描かれた作品5点のA3版カラーコピーを教室前部黒板に提示し、季節感や印象を見つけ出すと共に、印象等の違いを発見する

③ 掛川市二の丸美術館での当館収蔵品展

- 「日本画の風景」出品作品のキャプションを書く
- ・A4版でラミネート加工を施した全40作品のカラーコピーとワークシートを用意(好きな作品を選び、ワークシートの順に従って、作品の感想等を記入していくと、最終的にその作品のキャプションのような文章ができあがるような作りになっている)し、記入させる

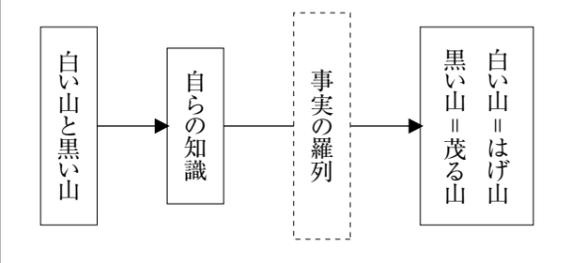


- ・掛川市二の丸美術館学芸員の方ともに、一人ひとりアドバイスをしたり、いっしょに悩んだりしながら机間指導を行い、ワークシートを一旦回収(2月20日から開催される当館収蔵品展会場内に児童の感想・キャプションとしてパネルにして展示するため)

担当の先生から「児童がこんなに豊かな言葉だしをするとは想わなかった」、「もっと児童を信じて、あらゆる鑑賞の授業をしていきたい」との感想をいただいた。

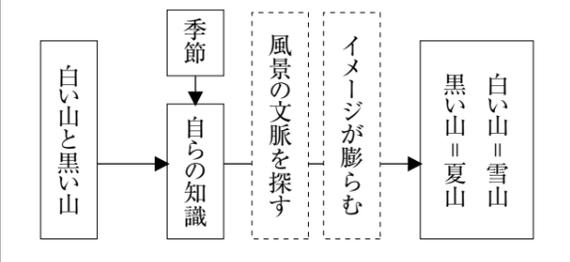
この授業の最初の15分は下図Aのような会話を中心だったが、「季節」というキーワードが子供達の中から発せられた

A: <四季花鳥図屏風>鑑賞初期段階の反応を図化



途端、四季が読み取れる描写を次々に発見し、動植物のレイアウトや山水表現に着目して鑑賞が深まっていった。

B: Aから後、「季節」を発見してからの反応を図化



集めたキャプションを読んでもみると、語彙は少なくとも、自分が絵の世界に入り込んでいるような豊かな想像力が発揮され、新鮮な印象をうけるとともに、季節や時間、登場する動植物の様子を的確に連想していること、さらに「他者に言葉で伝える」ため、さらに工夫して表現していたことなど、作品との出会いを愛しむように鑑賞していた様子がうかがえたことに、驚かされるばかりであった。

(2) 想像力の重要性について

上述の掛川市立曾我小学校の4年生のキャプションをいくつか紹介する。対象作品は児童自身が選んだこと、児童には作品解説を一切していないこと、他者に伝えるための文章を書いてもらったことを改めて補足する。

No Image

《秋富士》東山魁夷

この絵は、富士山とすすきが、背比べしている。秋は暗いけど、すごい。
この絵は、暖かい感じの夕やけで、下から見るすすきを描きたかったと思う。この場所に行ってみたいなあと思いました。



《田植図》川合玉堂

ちょっと寒そうな感じで、自然の音がして、風で稲がゆれている。草もそよそよゆれています。この場所に行き、舟に乗ってみたいです。

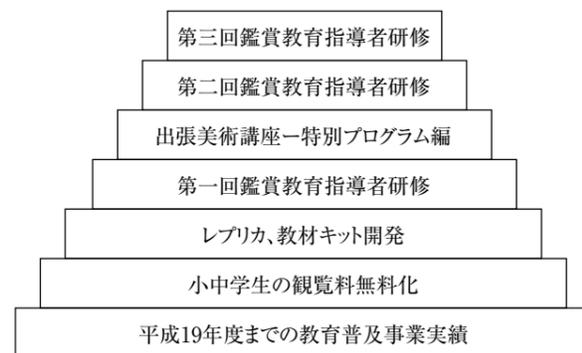
このように作品の中から見つけ出したキーワードに従って鑑賞が深まっていく傾向があることと、曾我小学校以外の学校でもこの手法が先生方から好評であったことから、「子供達に作品の見方を教えて欲しい」と先生によくお願いされる時の「見方を教える」とは、「季節」などのキーワードを児童生徒に発見させていくことなのではないかという仮説を立てた。また、言語や映像で得られた概念が、感性を源とした想像力によって開放され、既成概念との照合によって言語と結びつくまでは、状況を整理するファシリテーターが重要な役割を担う。先生はこの役割を美術館学芸員に期待しているのではないかと考えたのである。決まった鑑賞方法の道筋を用意し

ておく授業展開では、優れた言語表現に結びつく可能性はあっても感性と想像力の開放に向かう可能性は低いかもしれない。出張美術講座のアンケート集計からわかるように、絵を描いたり、彫刻を作ったりすることと同じように、想像力を発揮し、自分の考えを持ち、他者との価値観を共有し、五感を働かせるような活動を鑑賞の授業目標とする先生が多く、鑑賞教育への期待の高さと内容の多様性を念頭においた学校連携を推進していく必要があることを強く感じた。

II 鑑賞教育指導者研修会について

I 鑑賞教育指導者研修会の概要

上述のような、当館の鑑賞教育の取り組みと学校との連携の姿勢について多くの先生方に知っていただく必要と逆に先生方から教えていただくことの多さを感じ、鑑賞教育指導者研修会を実施することにした(図C)。



図C:鑑賞教育指導者研修会にいたるプロセス

最初に考えたのは、授業に専念したいと思いつつながら、分掌、生徒指導、進路指導、渉外、部活動指導、研修など多忙を極める先生が、出席したくなるような研修会の内容にしなければならぬ、という主催する責任の重さであった。そして、固定した近隣校との学校連携事業を展開する美術館の実践研究を目にする機会が多い中、当館としては、全県の学校に同じ情報を発信して、多くの先生に、気軽に利用していただきたいと考えていることを伝えたいと願った。

そうして考えたのは、当館が先生方を対象として平成16年度まで開催していた「ティーチャーズ・レクチャー」(企画展を観覧し、作品の詳細について先生に知ってもらい教材研究の一助とすることを目的にしていた)のように先生方の教科教材研究の場ではなく、当館の利用方法、団体の観覧に来た時の対応、授業協力などを知ってもらい、当館が模索している独自の学校連携をそのまま先生に見てもらい、意見を聞く場をつくることだった。特に、出張美術講座の内容、レプリ

カの活用方法をレクチャーし、実際に学校でそれを実施することにより、児童生徒に美術館や美術作品に興味を持たせ、中長期的な美術愛好者の増加を目指す展望と家庭を視野に入れた鑑賞教育への期待感を有していることを訴えたかった。

2 第一回鑑賞教育指導者研修会について

- 日時 平成21年8月22日(土)
午後4時～午後6時(夜間開館日)
- 会場 静岡県立美術館(講堂、展示室、ロダン館、写真室、講座室、実技室)
- 参加 102名(教員関係92名…小・中・特別支援・高校教諭、非常勤講師、教員志望学生、美術館関係者10名)

■次第

- (1)学校と美術館の連携について
- (2)洋画鑑賞について～パウル・クレー展～
- (3)彫刻鑑賞について～ロダン館彫刻～
- (4)日本画鑑賞について～じかに見る～
- (5)教材キット解説～レプリカ、キット紹介～
- (6)グループ協議
- (7)講評(静岡大学教育学部 講師高橋智子氏)

■配布資料一覧

- (1)「平成21年度美術館を活用した鑑賞教育のための指導者研修」資料
- (2)「出張美術講座 ～特別プログラム編」申込書
- (3)「出張粘土教室」申込書
- (4)レプリカ、教材キット一覧
- (5)レプリカ、教材キットを使った授業サンプル案と各作品解説(教師用)
- (6)平成21年度 実技室カレンダー
- (7)ロダン館セルフガイド
- (8)次期展覧会情報ちらし
- (9)鑑賞ツール(セルフガイド等)

■実施報告(概要と参加者アンケート集計)

- (1)ガイダンスー学校と美術館の連携についてー
 - i 概要
全国美術館と学校の連携の進行状況、当館のレプリカや教材キット、出張美術講座の紹介、連携の可能性を広げるための学芸員と先生の役割分担の必要性などを紹介しました。配布資料に「レプリカ、教材キットを使った授業サンプル案」を用意。それらをもとに研修の意義を高めた旨、説明させていただきました。
 - ii 研修後のアンケート(○…有効、満足など ●…改善点、課題など)

- 学校と美術館の連携はかなり確立されてきたので、学校と○○、学校と大学などの仲介役として美術館の役割と連携の意義を広げていてもらいたい。
- 美術館と学校が遠距離の場合、特にこのような研修は連携の契機になる。(同様意見3)
- 美術館の教育普及活動の充実、身近な(心強い)存在感を感じた。(同 様意見1)
- 学校と美術館の共通理解、共通認識のもと、両者の地域に根ざした教育や授業目標が合致していればいい関係、連携になるし、それが子供たちにとって大切なことだと思った。
- (学校と美術館、先生と学芸員の)心強い関係を築きたい。
- 小、中、高、特別支援の先生方が集まって研修ができ、静岡県の鑑賞教育充実に向けた第一歩が踏み出せた。(同様意見2)
- ホンモノの作品に触れることは大切、だからこそ美術館との連携が重要だと思う。(同様意見5)
- 連携を肌で感じる事ができた好機だった。学校も美術館もオープンな雰囲気でないで今後の連携のあり方に期待。
- 美術を身近なものに感じることが、学校在学中に美術館に親しむことは大切なこと。
- (配布資料である)鑑賞授業例が参考になる。
- 近くに美術館があってもなかなか生徒を連れていけない中、授業削減などもあり(腰をすえて)鑑賞教材を扱うのも難しい。何かいい案があれば教えて欲しい。(同様意見2)
- もっと美術館が身近に感じられるように体制を整えた上で、学校と美術館の連携を深めていきたい。
- 連携の重要性は理解していても、実際に行動するためには、このような研修の場が必要。
- どのタイミングで、どう要請し、どう分担するかなど、美術館との連携のあり方を教師側が学ぶ必要がある。
- 美術館にはたくさんいいところがあるので、もっと知ってもらったほうがよい。広報の仕方を考えたほうがよい。
- (2)洋画鑑賞について ～パウル・クレー展～
 - i 概要
「パウル・クレー 東洋への夢展」の作品を視察しながら、洋画または抽象画の鑑賞の手がかりをテーマに研修していただきました。当館学芸員が、小学生を対象にした内容でフロアレクチャーを実施。作品の比較をしながら解説・対話し、鑑賞を深めていく体験をしていただきました。
 - ii 研修後のアンケート(○…有効、満足など ●…改善点、課題など)
○パウル・クレーの作品を「線」や「顔」に着目して鑑賞する方法が参考になった。(同様意見11)
 - 抽象画の見方、生徒一人ひとりの作品の受け止め方が違うので、すべての意見を受け入れた上で、作者のねらいを伝え、自分の考えと比べさせ、視野を広げていきたいと感じた。
 - (作者の略歴や時代背景、作品解説など)理屈抜きに鑑賞することも大切だと知ることができた。
 - ホンモノの作品を鑑賞(フロアレクチャー)するのは理想的なこと。
 - 作品を自由にみることを教えることは、将来、美術を愛好する大人になるために大切なこと。
 - 語りかけるような口調、声の大きさも、子供の情報吸収や見方に影響があることがわかった。
 - ただ漠然と自由に見るのもよいが、目的や点数をしぼって見るのも充実感、満足感がある。(同様意見4)
 - 高校生に鑑賞させるなら…と考えながら興味深く話しを聞くことができた。
 - 抽象画の鑑賞方法としてはオーソドックスで新発見はなかった。他の美術館での工夫や研究も視野に入れ、取り入れて欲しい。
 - 小学校高学年を対象としたフロアレクチャー形式の研修内容はよかったが、時間が足りなかった。
 - 一部の作品しか見られず残念。時間をかけ、多くの作品の感想や意見を参加者から聞きたかった。
 - 子供向けの設定で私たち(先生たち)に話されたところに(意見や反応が出にくく苦慮されていたようで)無理があったのではないかと。(同様意見2)

●「顔」というテーマで見るのは、確かに目的をもった見方である。がそれと同時に、発想を限定することにつながってしまうのではないかと。

(3) 彫刻鑑賞について ～ロダン館彫刻～

i 概要

ロダン館彫刻作品の視察をしながら、彫刻作品や人体表現作品の鑑賞の手がかりをテーマとして研修していただきました。当館学芸員のガイドで、彫刻の姿態や表情を真似していただき、表現の誇張や空間、時間をも表現対象にしていることを、身をもって体験していただきました。



ii 研修後のアンケート(○・・・有効、満足など ●・・・改善点、課題など)

- 彫刻と同じポーズをすると、楽しみながらポーズの理由や力の入り具合を考えられことがわかった。(同様意見13)
- 立体だからできる鑑賞の方法であると感じた。(同様意見2)
- ロダン彫刻のガイドを作成(手製)したことがあるが、ポーズをとると詳細の発見が多かった。
- 言葉かけの仕方が参考になった。
- 彫刻作品の鑑賞は授業ではあまりやることがなかったので、参考にしたい。
- 実際にロダン館に児童を連れて行くのが一番。そこで今日のような鑑賞プログラムをやってもらえたら。
- 体を使った鑑賞は、小・中学生には新鮮でわかりやすい方法であると思いました。
- 身体の声というか、身体で感じることも大切なことだと思いました。
- 彫刻をみる楽しさを味わえた。(同様意見1)
- 鑑賞の切り口としてポーズをとることから始め、その後心情や時代背景をみれば、より深く鑑賞できる。
- 形に対して考えさせるのに、説明を聞かせるだけでなく体を使って感じさせるという方法は、大変参考になった。
- 「考える人」が「地獄の門」の上にいるというだけで、「考える人」への見方が変わった。
- これまで生徒を連れて来館し、同様の解説を受けたことがある。次は、「地獄の門」パナールと組み合わせる授業に取り組みたい。
- 学校では、映像や平面的な写真しかないの、同様の鑑賞方法は難しいと思った。(同様意見2)
- 学校では、彫刻作品のレプリカなどを使って展開すると思った。
- 楽しかったので、もう少し時間があるとよかった。
- ロダン彫刻は特徴が多く(わかりやすく)、子供たちに受け入れられやすいと思うので、今回のような動きを取り入れて鑑賞できる工夫したい。
- 中学生にポーズをとって…というのは、多少難しいとも思った。
- 「考える人」、「カレーの市民」以外の解説も聞きたかった。(同様意見2)
- 写真ではなく、実物(児童・生徒に)見せたいと常々思っている。美術館利用までが遠い道のり。

(4) 日本画鑑賞について ～じかに見る～

i 概要

日本画作品の鑑賞または史的情報を提示するタイミングの手がかりをテーマとして研修していただきました。通常、ガラス越しにしか展示されない屏風を、じかに見ていただき、本物の持つ迫力、質感、存在感を

体感する内容でした。どのタイミングで史的情報が必要になるのか、見ることとは何か、といった鑑賞の根幹に関わる問題について考えていただきました。

ii 研修後のアンケート(○・・・有効、満足など ●・・・改善点、課題など)

- 大接近で、細部まで見れて感動した、迫力があつた、感激した、大変よい経験だった。(同様意見23)
- 屏風に描かれたストーリーを聞くと、さらに興味がわく。(同様意見1)
- 裏や横からみた薄さ、表具の細かさにも驚いた。形状、構造のおもしろさも必見。(同様意見2)
- 知識も必要だがモノだからこそ感じられることがあることを体感した。
- にじみや筆さばきなど、作者という存在に近づける気がした。
- 「どこまで事前に生徒に知識を与えるか」という問いかけが印象的だった。個人的には最低限度の情報を与えればよいと思うが、子供の興味をひくためには+a必要かもしれない。
- 作品が身近に感じられた。
- 画材への興味がわいた。
- 桃山時代の作品が、あまりにきれいに残っていたので驚いた。(同様意見1)
- 当時の人は、この屏風をどのような部屋のどのような場所に置いて生活していたのだろうと想像した。
- 難しいが、歴史を学んだ上での鑑賞であればおもしろいと思う。
- 日本の文化や自然美を感じられるものが日本画だと思う。その点で、生活に根付いた装飾的な日本美術では、どうしても見だ目の鑑賞止まってしまうがち。日本画を深くみるとはどういうことなのだろうか。
- 作品保護の観点から、難しいとは思いますが、このような機会を増やして欲しい。
- このじか見の経験を生徒に伝えたいと思う。が、伝わるだろうか。
- 作品の解説について「何」を「どの程度まで」話せばよいか、もっと時間をかけて話し合いたかった。
- 授業で日本画の鑑賞は苦勞している。やはり、同時代西洋の絵画史と比較してやるのがよいと思う。
- もう少しじっくり見て、話を聞きたかった。

(5) 教材キット解説～レプリカ、キット紹介～

i 概要

美術館側から見ればアウトリーチ、出張授業、遠方の学校との連携の手がかりというテーマですが、先生方にとっては教材としての使い方・利用の仕方を考えていただくことをテーマに研修していただきました。当館収蔵品のレプリカや教材キットをご覧いただき、実際に先生方が授業をする立場で触れ、配布資料の授業サンプル案と作品解説を合わせてご覧いただくことで、当館の取り組みを評価していただく機会にもなりました。

ii 研修後のアンケート(○・・・有効、満足など ●・・・改善点、課題など)

- 出張美術講座のキットに触れて、実際の使い方をわかりやすく説明してもらえて、よかった。(同様意見3)
- このようなレプリカやキットはありがたい。ぜひ使いたい。(同様意見8)
- 特に屏風のレプリカは絵の解説だけでなく、構造の点でも授業に取り入れてみたい。(同様意見1)
- パズルと六種素材別立方体は、特に「いいなあ」と思いました。パズル化すると細部まで目が行くし、実際に触れない作品の素材や重さを体感させるのに六種素材別立方体は役立ちそうでした。(同様意見2)
- 県立美術館が教育現場で使うための教材開発を熱心にさせていることがわかった。
- いろいろ工夫されているものだった。
- パズルを組み立てるとき細部まで見ないと完成しないという話が興味深かった。(同様意見4)
- 屏風レプリカに直接付箋を貼って視覚的に協議する、屏風の後部に隠れてみる、など興味深かった。
- 上質のキットがたくさん作られ、遠方の学校としては利用価値が上がると思う。
- 実寸大レプリカは迫力もあり、使いやすいと思った。
- 教師として自分が持っていたいものばかりだった。

●学校でも、注意深く見させることから始める鑑賞の授業を行いたいと思った。

- このキットを教師がどう使っていくかを考えることが重要。また「こういう教材があったら…」という意見を伝えていけるとよいと思う。
- パズルに、人の顔や動物などインパクトのあるものがあるとわかりやすい。
- ピカソの人物画数点をパズル化して教材にしたことはあるが、このように種類も数も揃ったパズルを使えるにこしたことはない。もっと数や種類を増やして欲しい。
- 県立美術館所蔵以外の作品のキットを作ることは難しいか。(同様意見1)
- さらに多くの作品の実物大レプリカ作成をお願いしたい。
- キットにする作品のジャンルや時代に幅があると使いやすい。



(6) グループ協議

i 概要

参加者を8つのグループにわけ、6つの協議テーマをグループごと割り振って、「付箋紙記入⇒整理」という方法で、個々の意見や疑問をグループ内で可視化。その後、一言ずつ意見を発表する協議を、わずか15分でまとめるという挑戦的なタイムスケジュールで行いました。

先生方が授業を振り回り、課題解決を図るための方向性を発見する機会として設定させていただいた協議は、校種や地域をあえてランダムにしたため、校種間、地域間の課題の違いと共通点が見えたのではないかと思います。

ii 内容(協議内容のレジュメと傾向)

<Aグループ>

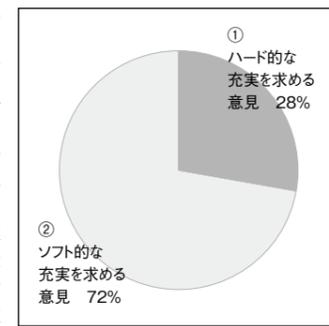
テーマ「遠距離校は、美術館にどんな要望があるか」

①ハード的な充実を求める意見

学校側・美術館側双方が、行政機関や学校管理職、同僚の先生に対して、学校と美術館との連携あるいは鑑賞教育の重要性を理解してもらう努力をし、金銭面・システム面の充実を図る必要があるという意見が多かった。また美術館には、メディアサービスの充実、レプリカ等の運搬補助を期待する声があがり、授業で美術館の情報と教材を活用したい一方で、先生方が勤務時間内に美術館に足を運びにくい現状改善を関係機関に求める要望も多かった。

②ソフト的な充実を求める意見

出張授業への期待・要望が非常に高い。その内容は、「楽しさ第一」「基本的な知識伝達」「レプリカや資料提供」と、先生方のイメージする鑑賞の授業が多様である故に、美術館もそれぞれの先生の授業の



ねらいや要望に対応する柔軟性が必要となる。

またレプリカや教材キットのレンタル活用を前提にした連携においては、ジャンルや補助資料を増やすなど、さらなる開発への要望が強いことがわかった。移動展の学校開催、県内施設との観覧無料バック化、他館との連携などの提案もあった。

<Bグループ>

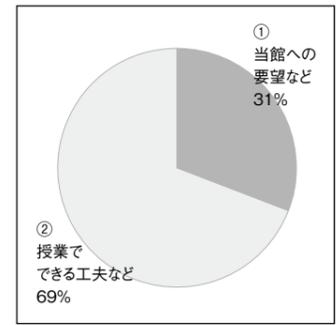
テーマ「掛川二の丸美術館、佐野美術館での移動展(当館収蔵品展、日本画多数)の際、子供達が展覧会に行きたくなくなる授業の工夫について」

①当館への要望など

展示の工夫(作品を低めに展示、足場・畳空間の設置、インパクトのある作品を入り口付近に展示等)の他に、墨や岩絵具といった日本画独自の画材を使ったワークショップを企画し、学校で参加を呼びかけるといった意見、また入館料を下げ(または無料)学校団体観覧に配慮してほしいという要望が出された。当館では、ワークシートを持参し、作品を鑑賞しながら調べ学習をする生徒を頻繁に見るが、そういった試みが移動展会場内でも見られることを一例として提案させていただいた。

②授業のできる工夫など

出張授業への期待・要望が高いことがわかった。そのテーマは「移動展の魅力」「日本画マメ知識」等であり、同時にそれはレプリカを使って本物が見たいと思えるよう授業を展開して欲しいという要望を含んでいる。さらに、クイズや屏風絵紙芝居の作成など発展可能なキットの要望もとれる意見があった(グループ構成員の多くは移動美術展開催地近隣校)。



また具体的に「曾我物語図屏風」のレプリカを使い、富士の巻狩りの雄大な場面と現在の地図との照合といった社会科や総合学習への展開を示唆する意見も出された。

<Cグループ>

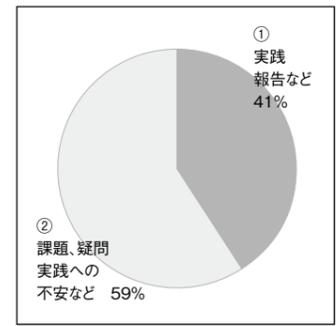
テーマ「抽象表現作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど」

①実践報告など

鑑賞から表現、表現から鑑賞、という枠組みでの実践事例が多い。用紙の形を工夫して発想につなげようという試み、形や色を積極的に探し出さなければ表現に結びつかない「心情」などをテーマにした時の参考作品として抽象画を鑑賞するという試み、作品にタイトルをつけ、その理由を話して班で共有するなどの実践例が紹介された。

②課題、疑問、実践への不安など

まず、抽象画を鑑賞することで、児童生徒にどのような力が身につくのかという、授業のねらいに係わる疑問があがった。また抽象画の鑑賞をする際、どの作家のどの作品を取り上げるのが有効か、技法は解説しやすいが作家の心情や時代背景などは解説しにくい、さらに生徒同士での話し合いは「空中分解」する可能性があって避けている、というような悩みが露呈。楽しく作品を鑑賞することも大切だが、それだけでは鑑賞の授業にならないのではないかと、また抽象画を見た子供達が疑問に思う箇所が想定できただけに、先生方はそれに答えられるだけの知識を習得し、自信をもって作品の魅力を提示すべきではないか、というような不安が明らかになった。



<Dグループ>
 テーマ「彫刻作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど」

①彫刻作品鑑賞の基本と展望、実践例

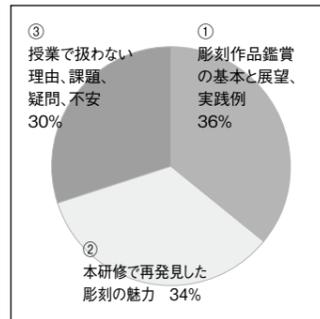
重量感、材質感、存在感、空間感といった感性にかかる情報をできるだけ多く感じ取らせるため、「本物に勝る教材はない。」の言うまでもないが、本物がない教室では、できるだけ本物に近づけよう補助教材や資料を工夫しているという実践例が数多く報告された。また写真やスライド、教科書では伝わりにくい彫刻の本質的な鑑賞体験は、学校付近にある屋外彫刻をいろいろな角度から見る機会を設けるなど、教室外の活動に発展させられる可能性をもっている、という意見もあった。

②本研修で再発見した彫刻の魅力

人体彫刻については姿態や表情を真似してその心情や意図を探ることが有効であるという意見が多かった。またロダン彫刻を鑑賞して、改めて多角度から鑑賞すると感動や発見が多いことがわかったという意見が多くあげられた。

③授業で扱わない理由

課題、疑問、不安彫刻作品の魅力が伝えきれない、教材の不足、鑑賞⇒表現への展開が時間と場所、道具の不足から難しい、などの意見が出された。多くは、視覚資料だけでは補いきれない彫刻作品の魅力や鑑賞のおもしろさが(先生方は)わかっているからこそ、中途半端な授業になるのであれば他の平面作品の鑑賞を行った方が無理のない授業ができる、と考えているのではないと思われる。



<Eグループ>

テーマ「日本画作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど」

①日本画作品鑑賞の可能性、実践例

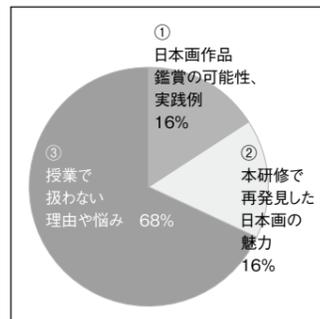
岩絵具やかかわ、毛筆といった画材に触れる表現から鑑賞につなげる実践、大和絵や木版画、和柄の魅力を見出す実践、さらに北斎漫画や絵巻と現代のアニメーションや漫画文化との、ストーリー性や人物誇張表現といった共通点に気づかせる実践例や日本画と西洋画を比較して違いを感じ取らせる手法も提案された。

②本研修で再発見した日本画の魅力

じかに見た日本画の迫力、屏風の構造や表具の魅力、生活や自然、人間模様をテーマにした作品の読み解きのおもしろさなどを再発見したという意見が多かった。同時に、児童・生徒に本物の日本画を見せたい気持ちが湧き、美術館に連れて行けない現実との板ばさみに向き合う先生の姿も垣間見られた。

③授業で扱われない理由や悩み

生活の中で触れる機会が希少さや由縁する児童・生徒の興味の希薄さという環境面の課題、宗教観や歴史観の複雑さとそうした時代背景を紹介する授業時間の不足、楽しく感じ取らせたい教師の思いに相反して、日本史や漢字が出てきた途端に硬い目に変化する子供達、など教師の思いや工夫だけでは解決できない課題や悩みが露呈した。教師の知識不足という自省もあったが、それこそ美術館が連携・補佐すべき部分ではないかとも思われた。一方で、日本画の鑑賞を授業で展開するときの目標が明確にできない(日本文化の継承や魅力を…ということなら、他教科でも可)との意見も出された。→グラフ白部分の極少さに気付く



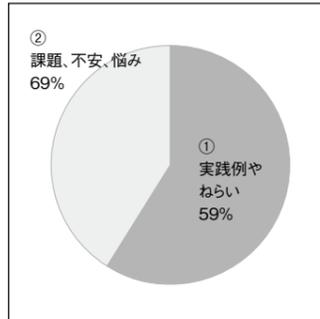
<Fグループ>
 テーマ「絵画作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど」

①実践例やねらい

西洋印象派から近代、教科書掲載の著名作家と作品、郷土の作家などをテーマにした実践が、鑑賞の単体授業としても、また表現との組み合わせにおいても、盛んに行われている事例が紹介された。さらに、当館来館による鑑賞を授業の一環として毎年行っている実践例や他館との展示ディスプレイや展覧会セルフガイド制作による連携の実践例も紹介されるなど、絵画鑑賞に関する取り組みは他ジャンルに比べてかなり進んでいると思われた。授業時の工夫では、毎時間一つの作品を見せて感想を話し合う時間を数分間設けているなど、時間が限られた中で鑑賞の力をつけさせようとする試みも報告されており見方を変えれば、言語能力の育成を視野に入れた取り組みが始まっていることを示唆している。

②課題、不安、悩み

教師側の情報量、児童・生徒の興味も、他のジャンルに比べると充実していることが読み取れる意見が多く出された。授業の評価のあり方やグループワークの進め方、作家や作品の解釈、(特に洋画は)身近に感じるわりに実物を見せる機会の少ない現実など、他ジャンルに比べると鑑賞活動よりも授業構造に係わる課題が出された。また発達段階に合わせた作品選択、鑑賞のポイントなどの悩みを乗り越えようとする先生方の姿が見て取れた。先生方自身の経験や作品鑑賞機会が多いせいか、視聴覚教材と本物との落差(迫力、色、タッチ等)に悩みながら授業を展開しているという率直な意見も聞かれた。



(7) 講評

高橋智子氏から「参加された先生方の多さ、研修中の鋭い眼差しから、鑑賞教育への普段の熱心な取り組みが伝わってくる。」というお言葉がありました。今回の研修は、あくまできっかけであり、研修で途切れていた鑑賞方法、美術館の活用方法、協賛での鑑賞体験など、それらを参加者各自が持ち帰って、それぞれの学校で他の研修生と話し合い、実践・検証することによって、今後の鑑賞教育がさらに進むことへの評価をいただきました。



■第一回鑑賞教育指導者研修会を終えて

先生と当館学芸員が同じテーマで協議をする貴重な場となった研修会後、出張美術講座一特別プログラム編(申し込み制)を実施した。各校から寄せられたアンケート集計は前述のとおりであるが、ここで特筆したいのは、第一回鑑賞教育指導者研修会の協議で、鑑賞授業実践が少なかった一方で、研修会に参加して授業実施を前向きに捉える意見が寄せられた日本画と彫刻を題材にした出張美術講座の申し込み件数が多かったこと(前述のとおり、西洋画3件、日本画14件、日本洋画3件、現代美術1件、ロダン10件)、一つの限定された作品鑑賞ではなく、広義の文化享受を目的にした授業内容の希望が多かったことである。

これらの要望に対する授業内容を先生とともに考え、実践していったことが第二回鑑賞教育指導者研修会の骨子となっていた。

3 第二回鑑賞教育指導者研修会について

■主旨

前年度、当館の学校連携事業を紹介し、出張美術講座を中心とした連携事業を積極的に利用していただくことを念頭におき、また本県の芸術教育振興に携わる者としての共通の地平に立った議論を進める第一歩として、第一回鑑賞教育指導者研修会を開催した。それ以降、先生方との協議によりチーム・ティーティングで授業を行う事例が増加しており、先生方との密度の濃い関係が構築されてきた。

第二回鑑賞教育指導者研修会では、そうした先生からの事例発表と問題提起、美術館と学校の連携についての展開を模索する場という位置付けでの開催を目指した。また、鑑賞教育指導者研修会をとおして、美術館と学校の連携を推進する人材育成と県内美術館同士の横のつながりを意識することで、本県独自の学校連携スタイルを構築したいと考えた。そうして参加対象を幼稚園教諭、学芸員などにも広げることとした。

■日時 平成22年12月12日(土)

午前10時～午後3時30分

■会場 静岡県立美術館(講堂、展示室、ロダン館、講座室、実技室)、静岡県立中央図書館(会議室)

■参加 122名(教員関係109名…幼・小・中・特別支援・高校、非常勤講師、教員志望学生、美術館関係者13名)

■次第

(1) 講演会「美術教育史にみる鑑賞～鑑賞教育の実践の可能性」静岡大学教育学部美術科 准教授 芳賀正之氏、

同講師 高橋智子氏

- (2) 美術講座「伝統的な文化財の修理と保存」
(株)墨仁堂 代表 山口聡太郎氏
- (3) 研究発表「レプリカを使った授業について」県立佐久間高等学校 教諭 佐野仁美氏
- (4) 体験①「音のかけらワークショップ」利用のための講座
当館スタッフ
- (5) 体験②「粘土教室」を園・学校で実施するための講座
当館スタッフ
- (6) 学芸員のフロアレクチャー(自由参加)
- (7) 高校生のギャラリートーク(自由参加)
- (8) 日本画をじかに見る《四季耕作図屏風》
- (9) 研究協議(第1～第5分科会)
- (10) レプリカ展示(入退場自由)

<第1分科会>

司 会：道越洋美氏(鳥附中)

提案者：大村恭代氏(岩松中)

テーマ：学校と遠距離の美術館の連携

<第2分科会>

司 会：杉坂洋嗣氏(韮山中)

提案者：大瀧和美氏(曾我小)

テーマ：出張美術講座を通して、鑑賞教育と言語能力の育成について考える

<第3分科会>

司 会：稲垣典子氏(気賀高)

提案者：土屋喜裕氏(湖西中)

テーマ：出張美術講座を通して、鑑賞教育の評価について考える

<第4分科会>

司 会：五十嵐智恵氏(伝馬町小)

提案者：竹川友美子氏(静岡高)

テーマ：静岡県立美術館収蔵品<日本洋画>鑑賞授業用のワークシートを考える(作成する)

<第5分科会>

司 会：四條秀樹氏(静大付属静岡小)

提案者：田中慶美氏(富士宮第三中)

テーマ：ロダン館の作品を通して、本物が見たくなるような授業や普及事業について考える

(11) 分科会報告

第1分科会～第5分科会の代表者

(12) 全体の講評

■配布資料一覧

- (1) 第二回鑑賞教育指導者研修会資料
- (2) 静岡県教育委員会資料
- (3) 静岡県立美術館配架資料(展覧会等)
- (4) お客様へのお願い
- (5) 事後アンケート回答用紙
- (6) レプリカ授業例とレプリカ作品の解説

■事前アンケート集計

	はい	どちらとも	いいえ
	園・学校 博物館	園・学校 博物館	園・学校 博物館
A	37.5% 76.9%	15.0% 15.4%	47.5% 7.7%
B	20.0% 45.5%	60.0% 45.5%	20.0% 9.0%
C	87.5% 76.9%	12.5% 23.1%	0% 0%
D	77.5% 53.8%	22.5% 46.2%	0% 0%
E	100% 100%	0% 0%	0% 0%

質問項目

- A 学校と美術館の連携の経験はありますか
- B 鑑賞用シート等は特に工夫を要すると思いますか
- C 言語能力育成への鑑賞教育の有効性がありますか
- D 鑑賞授業評価の際、工夫と注意の必要性を感じますか
- E 情操教育等への本物の鑑賞の有効性がありますか

■実施報告(記録とアンケート集計)

<p>(1)講演会</p> <p>i 演題「美術教育史にみる鑑賞～鑑賞教育の実践の可能性」</p> <p>ii 概要 学習指導要領の改訂、学校と美術館・博物館の連携、表現と鑑賞の一体化、鑑賞教育と言語能力育成、といった諸問題に広い視野で対峙することが望まれる今日、学校と当館の両現場をよく知る講師から、事例紹介、問題提起、提言がされた。</p> <p>iii 参加者の感想や意見 ・美術、図画工作を教育史という側面から広く俯瞰することができてよかった。 ・普段は目の前のことでいっぱいだが、客観視することができた。(2) ・連携を持続することが大事であると感じた。(2) ・鑑賞教育の注目、アートゲームの導入、対話型ギャラリートークの展開、日本の伝統文化の重視などが理解できた。 ・小中高での実践を、教員を養成する大学の視点でどう捉えているかが理解できた。 ・子どもたちの新しい感情を引き出す「機会づくり」が大切だと思った。(2) ・具体的な実施例や新しい提案を聞いたかった。(2) ・新学習指導要領に応じた一番新しい情報を学べてよかった。 ・「美術」で扱う内容について、時代とともに変化していくことは当然だが普遍的なこともあるように思えた。 ・講師が大学の先生でもよいが、私見が入るので公の立場の方のほうがいいかもしれないと思った ・本物を鑑賞する有効性が感じられた。</p>

<p>(2)美術講座</p> <p>i 題目「伝統的な文化財の修理と保存」</p> <p>ii 概要 紙や絹に描かれた作品の保存修理に携わるプロを装こう師という。作品鑑賞を除くで支えるプロから、新しい鑑賞の視点を学ぶとともに文化財の保護について講話をいただいた。</p> <p>iii 参加者の感想や意見 ・永遠に残すということではなく、何十年何百年か後の修理を前提にして修理するということがとても尊く感じた。 ・装こう師の後継者を育てることが大切と痛感した。(2) ・日本の作品や伝統を守るためにも多くの人に興味を持ってもらい、その大切さを伝えたいと思った。(2) ・装こう師としてのプロ意識の高さに敬服した。 ・実際に修復の現場を見てみたいと思った。 ・修理や保存方法など、今まで関心があったのでとても勉強になった。</p> <p>(3)研究発表</p> <p>i 題目「静岡県立美術館収蔵品レプリカを使った授業について」</p> <p>ii 概要 静岡県立美術館の収蔵品レプリカ10点余りを高校のピロティエに展示し、昼休みは自由鑑賞とフロアレクチャーを、授業では生徒同士のギャラリートークを、それぞれ実施した。その前後の授業のつながりや当館との連携風景について発表した。</p> <p>iii 参加者の感想や意見 ・高校での実施発表でしたが、より本物に近い状態のものをみせることの効果を改めて実感しました。 ・美術館が遠いということで、本物ではないレプリカでも生徒にとって刺激のある経験となるのだと思った。 ・レプリカだと近くによって発見しづらい点も発見できて楽しいと思う。 ・授業が、ギャラリートーク形式で発表することで他の生徒のこともわかってよい。 ・美術館が実践内容をストックし、学校から連携協力を求められた際にはそうした実践をベースに連携を深めていければよいと思う。</p> <p>(4)体験①</p> <p>i 名称 「音のかけらワークショップ」 金沢健一氏の金属(鉄)作品で、当館収蔵品。不規則にバーナーで焼ききられた鉄板(かけら)に触れたり叩いたりして、視覚・触覚・聴覚を使って鑑賞する作品。当館で行われるワークショップは、音による形のコミュニケーションを意図して開催している。</p> <p>iii 参加者の感想や意見 ・たいへんよかった。 ・参加者全員と顔を合わせ、いろんな人と音をつなげていくことで、驚きや発見がある。 ・児童が楽しんで活動する様子が伝わった。</p> <p>(5)体験②</p> <p>i 名称「粘土教室」</p> <p>ii 進行 志村将史、吉村友利(当館スタッフ) 当館で開催する粘土教室は、申し込みが多く、お断りする園・学校が出るほどです。一方、遠距離の園・学校での粘土教室実施を支援する目的で、最大500kgの粘土貸出を行っています。それを活用して、園や学校で粘土教室を実施するための参考事例をインストラクターが実演。あわせて、粘土貸し出しから返却までの手続も解説した。</p> <p>iii 参加者の感想や意見 ・実際に粘土にさわって、質感、重さなどマジックにかけられたように時間が流れ、心が解放されていった。 (6)「あなたの愛する風景展」フロアレクチャー</p> <p>i 概要 当館学芸員が、開催中の展覧会(「あなたの愛する風景」展)会場内での作品解説。</p> <p>ii 参加者の感想や意見 ・ゆったりと絵の説明が聞けて、よい時間を過ごすことができました。</p>
--

<p>(7)高校生によるギャラリートーク</p> <p>i 概要 研修を受講した高校生が、開催中の展覧会会場内で、お客様とのコミュニケーションをとりながら、作品の感想や印象を話した。</p> <p>ii 参加者の感想や意見 ・展示室で自分のお気に入りの作品について「自分のことば」で話すことが大切だと思いました。 ・男子グループのトークで、三千本膠を指し棒に使ったり、サンプルを小瓶で用意したりなど工夫があつてよかった。 ・本番までどのような授業・研修を積んだのか知りたかった。 ・よく事前準備されているギャラリートークだと思った。(2) ・司会を含め、すべて生徒だけの進行でしっかりできていて感心した。 ・聴く側を楽しませるような工夫が加わるとさらに良いと思う。 ・高校生のうちから人前で話せるように堂々とトークするのは良い練習だと思った。 ・照れや緊張に打ち勝って話すにはどうしても伝えたいという思いがないとできないので、対象をじっくり味わい感動することが大事であると感じ、自分の指導を反省しました。</p>
--



<p>(8)日本画をじかに見る</p> <p>i 概要 静岡県立美術館新収蔵品<四季耕作図屏風>を、ケースから出し、担当学芸員が立会って作品管理上の注意事項を話し、作品についての質問にも答えながら鑑賞した。</p> <p>ii 参加者の感想や意見 ・学芸員さんに解説していただき、より深く鑑賞ができた。 ・本当によい企画。またぜひ開催してほしい。</p> <p>(9)研究協議(第1～第5分科会の報告)</p> <p>i 第1分科会 ①テーマ「学校と遠距離美術館との連携について」 ②概要(キーワード[「連携」でうまれるつながり]) ◀樹花鳥獣図屏風>のレプリカを利用した出張美術講座の実践例をもとに、連携の可能性や問題点について話し合いを行いました。 ③参加者の意見の記録 ・美術館からレプリカを借りて授業を「とにかくやってみること」が大切だと思った。 ・学校と美術館の距離の問題、手続の問題等、様々な問題はありますが、教員一人一人の努力も大切であると感じた。 ・美術館に近い、遠いとはとても不平等なことではないかと思っていたが、そういったものをクリアして得るものがあるのではないか? ・「美術館は敷居が高い」と思われているが、本物を目の前にすると、子どものくいつきや感動がまったく違うのでどんどん来て欲しい。 ・「連携」そのものが目的ではなく、「連携によって生まれた、人と人との結びつき、心の通じ合い」が大切だと思う。 ④参加者の感想 ii 第2分科会 ①テーマ「出張美術講座を通して、鑑賞教育と言語能力の育成について考える」</p>
--

<p>②概要(キーワード【こどもへの言葉かけ】) 日本画のレプリカを鑑賞した出張美術講座の実践例をもとに、言葉を引き出す方法や言語活動の重要性について話し合いました。 ③参加者の意見記録 ・言語能力の評価は作文などの文章がうまい下手だけでは評価できないはずである。 ・子どもが絵に対して持った感想を、教員の狙いじゃない場合に思わず意見の芽をつぶしてしまうことがある。 ・造形的視点か、空想的視点の感想かどちらか絞らないと発言が自由になりすぎてしまう。 ・教師の何気ない発言が子供の発言に影響しやすい。 ・発見のヒントになるような教師の言葉かけの大切さを出張美術講座の学芸員の授業を通して学んだ。 ④参加者の感想 ・感動したことを文で伝えるには、作文力がある子が有利と思っていたが、教師側からの声かけによって絵の魅力に次々と気づき、言葉として表出されると気づいた。(2) ・自分なりの言葉を使って、その子にしか書けない文章が生まれるのはすばらしい。 ・固執するかと思いきや、何通りもの視点があることに子どもの可能性を引き出せるのではないかと。 ・時間が少なくもう少しディスカッションする時間が欲しかった。 iii 第3分科会 ①テーマ「出張美術講座を通して、鑑賞授業の評価について考える」 ②概要(キーワード【子どもたちのつぶやきをひろう】) 京都への修学旅行の事前授業として行った出張美術講座での実践例をもとに鑑賞教育の評価について話し合いました。 ③参加者の意見記録 ・出張美術講座では感想を小さな付箋に書き込むことによって、生徒一人一人のつぶやきをひろいあげることができた。 ・何が描かれている?なぜそう思う?などの問いかけからのつぶやきを整理し、共有していくのはファシリテーターの力量にかかっている。 ・対話型の授業にすることによって生徒の気持ちも拾いあげることができた。 ・鑑賞教育の評価は言葉でしか評価ができないからこそ、美術の言語表現はこれからの課題である。(2) ④参加者の感想 ・鑑賞授業の評価という難題を話し合えたのは有意義 iv 第4分科会 ①テーマ「静岡県立美術館の収蔵品を活用したワークシートのあり方について考える」 ②概要(キーワード【解説書でも作品集でもない】) 2011年1月に行われる「子どもたちの文化芸術推進事業」で中学生に配布するための収蔵品展「静物と人物展」の鑑賞用ワークシートの作成を行いました。発表者の実践例をもとに、ワークシートをもって展覧会鑑賞し、取り上げる作品を選び、中学生向けのワークシートについてグループごと話し合いを行った。 ③参加者の様子記録</p>



- ④参加者の感想
- ・短時間でワークシートがまとまるのか?と思ったがなんとかまとまってよかった。
 - ・ワークシート作りの基礎が学べてよかった。
- v 第5分科会
- ①テーマ『ロダン館の作品を通じて、本物が見たくなるような授業や普及事業について考える』
- ②概要(キーワード『感動を伝える』)
- ロダン館鑑賞のための事前授業として出張美術講座を利用し、ロダン館で鑑賞、事後授業を行った実践例をもとに、それぞれの教員の鑑賞授業の実践例や工夫している点などを話し合いました。
- ③参加者の意見記録
- ・まず教師自身が感動をすることが大切である。感動があってこそ、子どもに伝えられるのではないだろうか?
 - ・子どもに本物のよさを伝え、体感してもらうことの必要性を今後も訴えていかねばと感じた。
- ④参加者の感想
- ・せっかくロダン館にいたので、作品を見ながら鑑賞の視点など具体的にわかるような形式だとよかった。(2)
 - ・美術館と仲良くなること、学校側が受身ではなく積極的に関わるヒントを学べた。
 - ・午前中に行われた研究発表と大差ないように思えた
 - ・子どもにも本物のよさを伝え、体感してもらうことの必要性を今後も訴えていかねばと思った。
- (10)アンケート集計より
- i 研修会全体の感想
- ・指導者研修会の主旨が理解でき、大成功だったと思うので継続してほしい。(3)
 - ・参加者の対象の幅が広く、また時間も限られていたため広く浅くしか学べなかった。
 - ・美術講座については、版画講座や企業の担当者と呼ぶなど教材研究の知識として提供していく形が良いと思う。
 - ・もっと時間を増やしてディスカッションや話を聞きたかった(4)
 - ・報告会はいらないのでは?
 - ・学生にも参加してもらい、小中高大の指導者が縦割りて研究できる機会が欲しい。
 - ・お手本のような学級だけでなく、学級崩壊のクラスでもひきつけるような授業をつくっていく研修ができればと思う。
 - ・他の館の展覧会紹介などをしていくのも良いと思います。
 - ・様々な人と交流でき、いろんな意見が聞けてよかった。(2)
 - ・対話型鑑賞など実践的な内容が研修に組み込まれていればさらに面白かった。
 - ・講演会の中にもでていたアレナスのDVDなどを見る分科会などがあっても良いかと思えます。
 - ・教育する側の事前学習、事後学習によって生徒たちに伝わる大きさが変わってくると感じた。
 - ・昼休みや閉会後に自由に使える時間が確保されていてありがたかった。
 - ・美術館をいろいろな場面でどんどん使用させてもらおうという気持ちになった。
- ii 当館または県内博物館・美術館への要望等
- ・静岡県立美術館以外の学校連携はどうなのでしょう?同じような対応が望めるのでしょうか?
 - ・美術館同士の連携はいかがでしょうか?
 - ・また参加したい。
 - ・先生方や、美術館職員の日ごろの活動を相互に知りたい。
 - ・レプリカ以外にもDVD資料(デジタルデータ)等、貸していただくことはできるでしょうか?
 - ・駅からの無料シャトルバスがあれば利用者がもっと増えると思う。
 - ・来館した人に、音声ガイドではなく少しの疑問に気軽に答えてくれる方がそばにいてくれるといい。



■第二回鑑賞教育指導者研修会を終えて

本研修会の目的が、学校からみた美術館との連携のあり方と課題を模索することだったため、研究と事例の発表、研究協議の司会や記録まで全て先生にお願いした。先生だけでなく、学芸員や教職志望学生の参加者が第一回よりも増えたことは鑑賞教育や学校と美術館の連携への取り組みが市民権を得たことを証明していると考えられる。本研修会に参加した他県の教職志望学生に参加理由を尋ねたところ、「第一回鑑賞教育指導者研修会報告をみて、美術館と学校教育との連携について初めて知った。鑑賞を通じて創造性、想像力、コミュニケーション能力を育成すること、また鑑賞教育と言語活動の充実との関連などに興味があった。」という主旨の回答が得られた。これは、学生の立場で学習指導要領を研究し、内容を強く意識していることを示している。当館としても、学校教育の変化を視界にとらえながら柔軟な連携を模索する姿勢が求められている。そのための前提となる“美術館と学校が同じ地平に立つ”ということは、第一回、第二回の鑑賞教育指導者研修会の開催によって実現したと考えている。また、本研修会に参加した先生方が、独自に研究グループを立ち上げ、話し合いの場をもったという話をきき、本県の鑑賞教育が充実していく未来を確信することができた。

4 第三回鑑賞教育指導者研修会

■主旨

第二回鑑賞教育指導者研修会の事前アンケートで参加学芸員13名中10名から、学校との連携経験があるとの回答が得られたこと、また同事後アンケートから、当館以外の県内美術館の学校連携についての情報を先生が欲していることなど、もはや鑑賞教育や学校連携については、当館教育普及の枠を取り払い、県内美術館全体で情報交換しながら取り組むべき課題であり、先生がそれを望んでいることが明確化した。

開館当時から、学校団体観覧向け鑑賞プログラムの開発などを積極的に行ってきた当館は、前述したとおり平成20年度から、小・中学生の企画展観覧無料化、翌年度から高校生・大学生の収藏品展観覧無料化を導入した。観覧無料化以降、学校の団体観覧件数は増加し、それに比例して先生からの当館への要望が高まり、それは美術館の在り方や教育普及活動の意義を再構築する契機として、具体的には、レプリカを使った出張美術講座の強化と学校団体観覧専門のボランティアスタッフ養成、若年層を対象としたワークショップや講座の充実を推し進めることにつながった。

平成23年度の当館教育普及活動は、それらの質的向上を目指すこととした。その中でも重要な位置を占める鑑賞教育の充実、地域連携、言語能力の育成、表現と鑑賞の一体化といった、昨今の美術教育が直面する課題克服につながるばかりか、キャリア教育や生涯学習など人間育成に欠かせない教育分野の充実にも寄与するものと考えている。

第三回鑑賞教育指導者研修会では、そうした当館の教育普及実践はもとより、県内美術館に協力を要請して、本県の美術館と学校の連携の現状を広く検証すること、また県内美術館が鑑賞教育や学校連携をキーワードとして、これまで以上の協調関係を築いていくことを主眼におくこととした。

本研修会において得た成果は当館に限らず、静岡県全体の財産につながるよう、今後の研究活動に役立てていきたいと考えている。

■日時 平成23年12月3日(土)

午前10時～午後3時30分

■会場 静岡県立美術館(講堂、展示室、ロダン館、講座室、実技室)、静岡県立中央図書館(会議室)

■参加 130名(教員関係77名・・・幼・小・中・特別支援・高校、教員志望学生、美術館関係者14名、研究授業協力児童28名、高校生ギャラリートーク実施者11名)

■次第

- (1)美術講座①「東北関東大震災の文化財保護活動について」(株)墨仁堂 山口聰太郎氏
- (2)美術講座②「鑑賞の手前～展示の手法」高校での移動美術展」当館教育普及スタッフ
- (3)研究発表「静岡県立美術館中高生対象<ART!>の取り組み」当館インターン生 岩倉牧(静岡大学大学院)
- (4)実践発表 「小学校教諭によるロダン館作品鑑賞授業」静岡大学教育学部附属静岡小学校教諭 四條秀樹氏、同4年1組児童

- (5)「京都国立博物館名品展 京都千年の美の系譜—祈りと風景」展 学芸員によるフロアレクチャー
- (6)収藏品展「オールドマスターズ展」高校生によるギャラリートーク
- (7)「銅版画(ドライポイント)の実技と鑑賞」当館スタッフ
- (8)「ガラス絵の実技と鑑賞」浜松市美術館学芸員 前田一成氏
- (9)研究発表及び質疑①「MOA美術館 《紅白梅図屏風》出張授業案」MOA美術館学芸員 矢代勝也氏
- (10)研究発表及び質疑②「浮世絵教室と広重検定」東海道広重美術館学芸員 樋川淳子氏、大石沙織氏
- (11)研究発表及び質疑③「『鑑賞ガイド』をつかったミュージアム教室と創作と鑑賞が一体となったオープンアトリエ事業について」静岡市美術館学芸員 安岡真理氏、伊藤鮎氏
- (12)研究発表及び質疑④「学校連携事業の展開と展望」佐野美術館学芸員 河内えり子氏、三島市立中郷西中学校 露木知浩氏

■配布資料一覧

- (1)第三回鑑賞教育指導者研修会全体会資料
- (2)各美術館案内、展覧会チラシ
- (3)各美術館研究発表用資料

■事前アンケート集計

- A 鑑賞の授業で苦慮していることはどんなことですか?
- ◎鑑賞題材の選択にかかる内容
 - ・題材の選択・見せ方・質(複数)
 - ・鑑賞題材の準備
 - ・機材(プロジェクターや暗幕)などが充実していないこと
 - ・写真でもいいから有名な画家の作品を見せたい子どもが喜ぶ資料(複数)、本物作品との出会いがない
 - ・実物を見る機会をいかに増やすか(複数)
 - ・限られた時間の中で何をとり上げ深めるか
 - ◎鑑賞するにあたっての障害等
 - ・造形について語り合う用語が浸透していない
 - ・自分自身が美術鑑賞の能力を身につける作品の解説(時代背景や作者など)上手く深く説明すること(複数)
 - ・鑑賞対象にいかに関心を持たせるか
 - ・周囲の意見を取り入れつつ率直な自分の感性をもたせるか
 - ・教え込みにがち
 - ・教科書を紹介するだけになってしまいがち
 - ・飽きさせない工夫
 - ・印刷物は感動が少ない
 - ・本物作品との出会いがない
 - ・鑑賞者が美術の基礎的「技術」を知らない
 - ・制作時間と鑑賞時間のバランス
 - ・特に小学校低学年によさやおもしろさを伝えるのが難しい
 - ・将来役立つ味わい方や使われている技法の説明に苦慮している
 - ・作品の価値をどのように伝えるか(考えさせるのか)
 - ・資料を集めること
 - ・子供達が主体的に感じ取る作品の魅力と、美術的な価値や歴史的

史実等の知識をおしえることとのバランス

◎授業内容について

- ・授業の組み立て方
- ・作品の見せあいっこ、良いところ探しに終始しがち
- ・映像機器をうまくつかいこなせていない
- ・生徒の言語表現をもっと豊かにさせたい
- ・実物大の作品を見せたいが、なかなかない

◎評価について

- ・"鑑賞力の表現が、作文力に左右されてしまう"
- ・よき気づきを拾うにはどうしたらいいのか
- ・どのポイントで鑑賞させようか評価したらいいのか
- ・文章能力の高い生徒、表現能力の高い生徒を高評価してしまっている(反省)

◎美術館からの意見

- ・連携するにあたって学校の授業時間数とのかねあい
- ・継続的な学校や教員との連携を維持すること
- ・他の美術館や博物館との比較検討
- B 児童生徒、先生方が美術館や博物館を利用する際、実際にあったトラブルや疑問、または美術館・博物館に対する要望やご意見をお聞かせください。
- ・学校へのPRの強化
- ・アートゲーム(アートカード)の貸出
- ・美術館から見たマナー(中学生)の問題などを教えてもらいたい
- ・一般の方が鑑賞されている中小学生のざわついた雰囲気を持ち込むことに躊躇
- ・どのような連携が可能なのか
- ・県立美術館・学芸課スタッフの仕事内容が知りたい
- ・作品の貸出を土日にしていただきたい
- ・教員自身が授業内容や感性の方向性にビジョンを持ってもらいたい
- ・鑑賞授業は中高生になると発言が少なくなるので、教員が学芸員との橋渡しを
- ・美術館主催ガイドツアーや実技体験等、部活動で活用していきたい
- ・(美術館や博物館への要望ではないが)小中学生に伝えておかなければならない伝統技術が崩壊していく危険性を感じている
- ・何度か美術館で授業をしていただきましたが、いつも、とてもよかったです

・作品がどのように制作されているか興味を持つことが多いので、制作の方法の展示があるとうれしい

・中学生の鑑賞態度

- ・遠方の学校向けのコンテンツがあるとうれしい(出張、鑑賞キットなど)
- ・発達障害の生徒の鑑賞態度が悪く、美術館で迷惑をかけてしまった

C 近隣の美術館、博物館と連携したことはありますか?

◎YES/どのような内容で行いましたか?

- ・出張講座でワークショップ(複数)
- ・出張授業(複数)
- ・MOA美術館と企画中
- ・横山大観の夜桜を学芸員に解説
- ・紙すき体験
- ・におい袋

・ロダン館の鑑賞(複数)

・美術部の生徒を引率して美術館見学

・合宿先でフロアレクチャ等に参加

・大淵芸術村での作品発表や見学

・移動美術展を開催していた

・展覧会ディスプレイグッズ制作、鑑賞ガイド作成

◎NO/連携をしない理由や障害になっていること

- ・遠い(複数)
- ・予算(複数)
- ・方法がわからない
- ・何から手をつければいいのかわからない
- ・準備や教材研究に踏み出せない
- ・必修科目ではないので後まわしになってしまう

- ・年間計画のなかの位置づけ(複数)
- ・連絡がしにくい
- ・保護者側の理解を得るのが難しいときがある
- ・きっかけがつかめない
- ・学年単位で動かさなければならない
- ・子どもを引率すること
- ・校外に出る抵抗感
- ・非常勤講師であること
- ・授業時間の確保・授業の組み換えが難しい(複数)

■実施報告(記録とアンケート集計)

(1)美術講座①「東北大震災の文化財保護活動について」

i 概要

装こう師として、震災後、文化財レスキューとして活動された内容と、NPO、ボランティアなどの組織的な保護活動の重要性についてお話をうかがいました。文化財が多くの人々の努力によって保護され、後世に受け継がれていることを学びました。

ii 参加者の感想

・100年に一度は文化財の修理が必要であることを初めて知り驚きました。修理が必要なものは"物言わぬ患者"であるという言葉が印象に残りました。

・いずれとれることを前提にして修理していることに驚いた。自然の物から長い年月をかけて接着剤を作っていく職人の伝統が続いてくれることを願う。

・本日一番考えさせられた講座でした。東海地区に大震災が起きたら…と個人的に考えていたので、東北の取り組みが頼もしく思えた。修復できる人材が増えるように、手伝えるように育成していく必要を強く感じた。

・体験に基づく実践的なお話で参考になりました。

・古文書などの紙媒体や布などは復元に関わる「装装士」という専門家の役割が非常に重要であることを知りました。

・市内にこのような活動(仕事)をされている方がいるとは知らなかったのととても勉強になりました。(2)

・中学校での職業講和の講師に招きたいと思いました。

・実際の仕事を見てみたいと思った

・まだ多くの人が行方不明の中、文化財をよみがえらせる仕事に行かれ、人間関係が大変な中、作業をすることの難しさを感じられたのですね。たくさんの方が文化財を見つけるべき方がなくなれたことは本当に残念ですが少しずつよみがえらせていってください。

・伝統を守る…つなげていくという大切さを実感しました。

・人・物・自然が一瞬にして被害を受け消えてしまうことにあらためて恐ろしさを感じました。そして、人命がもちろん一番なんだろうが、文化財の被害から守ることも重要だということも、教師として生徒に伝えたいと思いました。

・復元における現状維持、再修理を可能にしておくことは、文化財だけではなくあらゆる物事に通づる理念だと感じた。

・“文化財と災害”という観点から美術作品を含む文化財について考察したことがなかったので非常に新鮮なお話でした

・静岡でも、大震災が起きた際、文化財を守っていく手立てを綿密化していくべきだと思う

・美術品を災害から守る体制を整えることは、東海地震が叫ばれて久しい本県ではもっと進んでいると考えていたが、話をきいて現実の厳しさをうかがうことができた。

・ボランティアの関わりが重要だとわかった

・東北大震災と文化、美術」といったテーマで授業や展覧会企画をされている実践例はないかと気になっていたところだった「震災と文化財」という視点で話が聞けてよかったです

・貴重な文化財を残していく、維持していくのは大変だけれど、大切なことだと思った

(2)美術講座②「鑑賞の手前～展示の手法・高校での移動美術展」

i 概要

高校を会場にして、当館収蔵品を展示する移動美術展を開催してきた経緯や展示手法、生徒達の反応や普及活動を紹介しました。

ii 参加者の感想

・(作品を見たときの)感想等を糸でつるして部屋を1つのオブジェにしてしまうという工夫がおもしろかったです。

・美術館側にとっての展示の配慮(温度・湿度など)がわかった。

・美術館作品が移動美術展で展示されるための条件がわかりました。

・「本物を鑑賞できる」というのはすごく魅力的に感じました。もう少し実践的な講座かと思っていたので物足りなさを感じましたが「糸」をつるす>展示は幅が広がりそうです。

・糸を使った展示を中学校でも取り入れたいと思いました。

・移動美術展がこれからもいろいろな場所で実施されるといいですね。

・移動美術展はすごい企画だが、美術館側の負担が大きいと感じた。

・普段の学校生活に溶け込むような企画になったらと思いました

・地理的な問題もあり美術館に訪れたり美術作品を生で鑑賞することがほとんどない生徒にとって高校における美術展は興味をもつ良いきっかけになると思った

・他の学校の取り組みがわかってよかった

・展示については、美術だけでなく文化祭、教室の装飾など、学校内には展示に関わるものが多くある。ぜひそうした視点で学習プログラムがあるといいなあとと思いました

(3)研究発表「静岡県立美術館中高校生対象<ARTI>の取り組み」

i 概要

石巻市から被災で商品価値を失ってしまった糸を提供してもらい、ティーンエイジャーを中心に屋外に共同で作品制作した記録をお話しました。当館では、若年層への芸術文化振興を学校連携と併置して捉えていることを伝えることができた。



<ARTI>の記録写真(上)

ii 参加者の感想

・学校の連携とは異なる若者へのアプローチは興味深く、継続する中でどのように発展していくかを見ていきたい

・発表の中でこのプログラムの美術館側における意義とこれからの展望についてお話があればよりわかりやすかったかもしれません

・震災をきっかけにした中高生のARTへの取り組みに感心しました

・関東東北大震災が契機となったようですが、中高生を引き込んだこうしたイベントが積み重ねられるようだと、美術館に親近感をいだく人が増えていくと感じた

・美術館の中庭の造形が気になっていたが、経緯がわかり「糸による」つながら、アートとして人材(育成)として、興味深かった

(4)実践発表 「小学校教諭によるロダン館作品鑑賞授業」

i 概要

ロダン館彫刻を教材とし、実際に美術館内で授業を実施してもらい、その可能性を探りました。子供達の自由な発想と先生の教材研究力が発揮され、その様子を見ていた先生の中に「美術館の中で授業してもいいんだ」とつぶやいていた方もいらっしゃいました。

ii 参加者の感想

・子どもたちが自発的に意見や考えを述べている姿を見て、普段からの積み重ねの授業の質の高さが見て取れました

・実際のやり方を見せてもらえて良かった

・カリーの市民の背景とかを先に教えた方がよいのでは?と思ったが、そんな余計なことは言わない方がよいということなのか?疑問が増した。

・4年生の子どもたちと担任の先生との息ぴったりの授業で見ていて嬉しくなりました。素直な子どもたちの発言や身ぶりがみられ勉強になりました。

・先生の語りかけ口調がとてもよかった

・美術館での授業もざわざわしてなくてすばらしい

・子供達からの素直な感想がとても深く、余分な知識を与える前に、自由に作品と向き合うことの意義を考えさせられた。

・子どもの視点から見るとロダン作品のおもしろさに気付かされました。感想の交流によって多様な見方を学んでいく様子がわかり、とても参考になりました



(5) 静岡県立美術館「銅版画(ドライポイント)の実技と鑑賞」

i 概要

ドライポイント、エッチングといった技法で作品をつくりました。学校にプレス機はあるけれど、もてあましているとおっしゃる先生方に好評でした。

ii 参加者の感想

・普段はワークショップを企画する側ですが、参加者が制作を通してどのように鑑賞を豊かにすることができるか知ることができ、とてもよい体験となりました。

・また、説明もわかりやすくスタッフの皆さんのサポートも行き届いていてワークショップ運営の勉強になりました。

・楽しく制作することが鑑賞を深めるという体験を今後の企画にも生かしていきたいと思います

・13時30分から始まりあつという間の3時間を過ごしました。とても密度の濃い内容で充実した時間でした。できれば2日間にわたってやりたかったです。5センチメートル四方の銅板の中にいろいろな図柄が表現されとても面白い実習でした。またやってみたいです。

・できれば30分くらい他の先生方と美術・図工のトークをしてみたかったです。

・彫りの種類、道具手順についていろいろ知ることができてよかった。道具の準備や工程の手間と、出来上がった作品の透明感のギャップが素敵でした。スタッフ、先生みなさん親切でわかりやすく楽しかったです。

(6) 浜松市美術館「ガラス絵の実技と鑑賞」

i 概要

ガラス絵の制作からその魅力まで体験させていただきました。ガラス絵の歴史、制作のヒントがそのまま鑑賞のポイントになっていました。

ii 参加者の感想

・ガラス絵ならではの表現手順理解することができた

・非常に魅力的な技法であると体感し学校教材としてぜひ活用していきたいと思った

・ガラス絵を見るのが初めてだったので、作品を見るのがとても新鮮で楽しかったです。いざ描いてみるとインクが絵具と混ざってにごってしまったり、思うように色が作れなかったりと予想以上に難しかったです。小学生には作成が難しいと感じましたが、いろいろな描き方があることを知る一つの例として、鑑賞で扱うと面白そうだと感じました

(7) 研究発表及び質疑①「MOA美術館《紅白梅図屏風》出張授業案」
i 概要

美術館と学校との連携について、実践事例をまじえてお話しいただきました。《紅白梅図屏風》レプリカや扇子、茶器などもご持参いただき、体感的に鑑賞する大切さを学びました。

ii 参加者の感想

・進度が早くせつかくの情報を書き逃してしまったため印刷した資料がほかかったです

・これをきっかけに本物を見に来てくれるということは非常に意義のある授業だと思いました

・授業で取り上げていた題材なので参考になりました。

・いろいろな側面からのアプローチができることを知りました

・学習指導要項へのからみを含め日本美術の扱いを重視していかなければいけないと再認識するよい機会となり感謝します

・レプリカの強みを感じました。

・紅白梅図屏風のことがよくわかった

・尾形光琳の魅力にも再度触れることができ感動しました

・授業案までいただきありがたうございました

・(出張美術講座を)私もやってみたいと思いました。

美術館との連携というと、大変なイメージがありなかなかできませんが、これから考えていきたい

・身近な文化財を題材にできる点がよかった

・敷居が高いと思っていたMOA美術館が、学校側に非常に歩み寄ってくれてきているのがよかったです。

・学芸員の方が、学習指導要領について大変勉強されている

(8) 研究発表及び質疑②「東海道広重美術館 浮世絵教室と広重検定」
i 概要

浮世絵について児童生徒が学ぶシステムと広重検定、レプリカの紹介など、詳細にわたって東海道広重美術館の魅力と教育普及活動の現状をお話いただきました。

ii 参加者の感想

・全国で最初に出来た広重の名前が入った美術館であること、浮世絵の普及に助力していることがわかりました

・美術館として積極的に活動しようという姿勢がうかがえて参考になった

・浮世絵については中学2年生で取り扱いたい題材です。紹介のあったゲーム感覚で作品を見ていくやり方を参考に授業を実践してみようかと思いました

・版木を使い広重の版の刷り体験ができることがわかったことは、それだけで(参加した)収穫であった

・出前授業について特に興味深く、詳しく聞けて大変よかった。そうした活動を広げて欲しい

(9) 研究発表及び質疑③「静岡市美術館「鑑賞ガイド」をつかったミュージアム教室と創作と鑑賞が一体となったオープンアトリエ事業について」
i 概要

展覧会セルフガイドの作成プロセスや実技系の体験プログラムなどを具体的なエピソードを交えて紹介していただきました。

ii 参加者の感想

・一部の人が資料をもらっていないのが気になった

・自分達の企画を形にしていけるだけのスタッフの充実と館の運営のスムーズさが素晴らしいと思いました

・魅力的で中身の充実したガイドブック。市内のみの配布の幅が市外にも広がると授業での取り扱いがふえるように思いました

・子ども向けの鑑賞に力を入れていることがよくわかりました。それは同時に大人にもわかりやすいということなので、良い取り組みだと思います

・浮世絵の魅力についてもっと勉強しなくてはいけないと思いました

・鑑賞ガイドやトレカ、パンフレット等子どもの視点でいろいろ配慮されていることにびっくりしました。

・静岡の子どもたちは恵まれているなと思いました

・これからの美術館運営は、もっと楽しく身近なものにしていくべき。子供に興味を持たせる取り組み(鑑賞ガイド等)に感心しました。

・鑑賞ガイドの取り組みがおもしろかった

・ガイドやマニュアルのデザイン性の高さが参考となった。トレカやポチ袋など以前に作成したことがあり、美術館と同様な考えであることがちょっとうれしかった

・静岡市美術館は、大変(交通が)便利な場にあり、子供にも紹介しているが、トレカなど、ゲーム要素が心を引き付けそうだった

(10) 研究発表及び質疑④「佐野美術館学校連携事業の展開と展望」
i 概要

佐野美術館と三島市内の中学校との長年継続している連携事業について、表現と鑑賞の一体化をキーワードにお話いただきました。

・教育現場も美術館も業務は楽なものではないので、連携した事業展開は困難である。

・ラジオやテレビの報道を知ってはいたが、当事者が目の前で報告していただけのはありがたかった。

(11) 研修会全体の感想と意見

・「京都千年の美の系譜」のレクチャー時間が30分では短く残念に思いました(2)

・「京都千年の美の系譜」のレクチャーが、自分が子どもの立場になって鑑賞する良い機会になった

・静岡県的美術館における教育普及活動の動向を知ることでできる大変有意義な研修会でした

・分科会ということでしたが先生と学芸員が集まる数少ない機会ですので、美術館と学校地域家庭が連携する意義について全体的なお話があってもよいのではないかと思います

・美術館と学校の連携というのは私立館では単発になりがちなので、はじめに副館長がお話しされていた美術館の横のつながりということについて興味深くお話を伺いました

・研修会の案内について、プログラムを選択する際に発表の内容などもう少し情報があるとわかりやすいです

・県の研修は国などの研修より地域に密着しており大変意義深い企画と感じており今後も継続していただければと思います

・美術館の教育普及担当として参加させていただきましたが、普段は一人でやっている現状の為、他館の取り組みや学校の先生の実践授業を拝見させて頂いたことは非常に良い刺激となり参考となりました

・どの講座も興味ある内容なので迷いました

・部屋が暗すぎるとスクリーンが明るすぎて見続けるのが少し苦痛でした

・とてもよかったです(2)

・授業案や学校との連携した上での分散会を充実させてほしい

・美術館のアピールだけは別にいらない

・第二回の方が内容的には充実していたように思う

・各美術館がそれぞれの特色を生かして将来の展望を見据えて様々な取り組みをしていることがよくわかり、このような場をつくっていただいたことに感謝します

・学校と美術館との連携はやはり重要でありこれから学校で鑑賞教育をすすめていく上でお世話になります。よろしくおねがいします

・まずは自分が定期的に足を運ぶようになって自分の。



周囲の人とアートなつながりができればと思いました

・「ロボットの展示?」がとてもよかったです

・1日で3つの講習、実習を受けさせていただき濃密な研修になりました

・もっとも忙しい時期に重なったが、事前に仕事の調整を行っていたので参加することができました。自己啓発につながるこのような事業には、他の業務を優先させてきたので参加していませんでしたが、今回参加して収穫が大きいと感じたので、次年度以降も実施されるようであれば参加しようと考えています

・内容が多く、充実していた。プリントと掲示物で会場の表記が違っていたので会場を間違えてしまった

・昨年、全国大会で美術館との連携の発表をいくつか聞いてきたが、静岡県は他県に比べると進んでいると感じた。これもみな美術館側が、学校・教育普及活動に非常に力をいれてくれているからだと思う。改めて、感謝の気持ちをもちました

・身近な美術館が、いろんな工夫をされていること、ワークショップなどの機会が増えていることを、子供にもっと紹介したい。生徒も日々忙しく、部活動などで休みも限られているが、美術館にも足を運んで欲しいと思っている

・(高校生ギャラリートークについて)大変素晴らしい企画だと思いました

・(高校生ギャラリートークは)是非これからも継続してください

■ 第三回鑑賞教育指導者研修会を終えて

東北関東大震災の発生以来、美術館の防災・作品保存対策の再構築と研究体制の強化、それらの理解と支援を地域社会に求める必要性を強く感じ、本研修会の前半部分にそうした内容を盛り込んだことは、有意義だったと考えている。一方、第二回に行った研究協議の時間をとらなかったため、研修会としては物足りなさを感じた先生もいらっしまったようであったが、県内美術館の学校連携の取り組みを紹介でき、他館の発表を聞く学芸員の方々の様子も見られ、美術館同士がつながりを深めるきっかけになったのではないかと考えている。そして、先生が毎年定期的に開催している地区・校種別の研修会の場で、本研修会のことを話題にさせていただくことによって研究協議に替えていただくような(平成22年度には富士市でそのような機会があった)取り組みが増えることを期待しているし、そうした学校と美術館の気軽で柔軟な呼応関係とでもいうような動向こそが、本研修会の最大の成果といえるのではないだろうか。

Ⅲ 鑑賞教育指導者の資質について

これまで開催した鑑賞教育指導者研修会は、本県において鑑賞教育を研究・実践する方が集まって情報を共有し、学校と美術館相互の立場や職務の違いを乗り越えて、同じ地平に立つことをねらいとしており、鑑賞教育に携わる人材育成に寄与する取り組みでもあった。

1 当館学校連携事業の蓄積

他の都道府県において、斬新な研究実践をしている美術館もあるが、そういった実践が、どの館でも、どの学校でも可

能なのかは不透明である。当館が目指すのは、一部の学校や先生との限られた連携ではなく、他館と情報交換をしながら、多くの先生との継続可能な連携関係を構築することであるという立場から、美術館と学校がしなやかな協調関係を築き、時に積極的な協力体制をとることを理想にすべきではないかと考えた。従って、鑑賞教育指導者研修会を計画する際、本県の人材を活用して本県の指導者の資質向上を目指したコンパクトな研修にしたかった。

また、鑑賞教育の指導者になるための学習や講座が、単位修得制度のように確立されているわけではないため、講習／受講という形式ではなく、参加者相互が実績や情報を公開し、共有／検証ができるよう、発表／協議の形式をとることにした。鑑賞教育の指導者において大切なことの一つは、このような研修会と研修会との間で、研究や実践が可能となる環境にあるか、その時間は自らつくることができるか、ということである。当然、先生と学芸員はこうした環境下にあり、その目的や場こそ違え、両者の連携は自然なことではないかと考えている。

2 文化財保護の意識向上

第二回、第三回の鑑賞教育指導者研修会では、(株)墨仁堂(代表 山口聰太郎氏)に美術講座と講演会を依頼し、文化財保護の観点から、作品修理や調査研究、文化財レスキュー体験談などの講話をしていただいた。鑑賞教育の指導者には、作品の鑑賞が保障される場での配慮事項に精通し、必要に応じてそれを鑑賞者に伝える判断力があり、文化財保護と文化遺産継承の姿勢を体現できる方であることを期待したい。そもそも大人は、子ども達に物を大切にすること、道徳観をもっていてもらいたいと思うもので、これは製作者と流過程で関わる人達の存在を意識することから始まると思われる。文化財においても同様で、作者、運送業者、鑑賞者、そして修理修復家のそれぞれの存在を意識することが、文化財保護の意識向上につながるのではないだろうか。

3 本物を教材化する目利き

前述の鑑賞指導者研修会の際にとったアンケート集計からわかるように、鑑賞教育は児童生徒の情操を育み、言語能力の育成につながる(またはそのように期待できる)と考える先生が多い。それは、文化芸術という人類の偉業から啓発される歓喜を体感することが、想像以上の教育効果を有していることを期待しているからであり、その期待は先生の本物志向から発現していると言える。

鑑賞教育の教材として最も有効なのは、美術館で本物に

触れさせることであり、それがかなわなければ、できるだけ本物に近い情報量を有した教材を探すこと、それも手に入らないのであれば、わずかな情報量から多くの発想につなげ断片的ではあるが本物を想起できる教材や話題を探す、というように、鑑賞教育は本物に端を発して組み立てることができる。学校での授業や美術館内でファシリテートする手法は多様であるが、本物があるに越したことはない。そして、優先順位として高位ではないにしても、鑑賞教育の指導者には、自身が教材の一つとなる可能性を有していることを自覚して欲しいと考えている。先生方から「鑑賞の授業でレプリカを借りたい。学芸員にも来てもらいたい。生徒から出る質問に答えられる自信がない。」との相談を受けるケースが多い。この場合、学芸員は教材であり、先生のファシリテートによって教材としての価値が変動する存在である。もう一つ、鑑賞教育の指導者にとっては、鑑賞対象作品に関する史実や価値というものを熟知しているよりも、教材として有効な作品や人材を発見し、活用する目利きのような能力の方が重要となるのではないだろうか。その目利きの力を発揮するために、作品の史実や価値を理解しようとするのと、鑑賞者に伝授するために史実や価値を理解しようとするのは異なる。この目利きが鑑賞教育指導者に求められると考えている。

おわりに

数年前、先生から「県立美術館は敷居が高い」という声をよく聞いた。児童生徒をつれて来館した際「話し声がうるさいと注意を受けた」と当館に謝罪し、落胆して帰る先生もいらっした。普段、子供達に元気よく言動するよう促している先生にとって、当館で静かに清楚に行動するよう促すことに抵抗があるのは当然である。また言語活動の育成につながると期待して鑑賞教育に取り組む先生にとって、作品を前にして話をするのは大切なことだと考えるのは当然である。こうした現状に端を発し、学校と美術館の連携の先は何を見つけ出していくのかという命題にいたるまで、鑑賞教育指導者研修会に盛り込んだ内容は多岐にわたるものだった。そして、三回目の研修会を終えて、果たしてすべての課題が解決したのかと言われると、否と言わざるを得ない。

そもそも学校と美術館の個々の役割や行動目標などが変化し続けている。比喩的に言えば、鑑賞教育という行為一つをとっても、移動する乗り物に乗りながら停止する目標物を掴もうとするのに似て、その獲得は難しい。むしろ、目標物とその背景をいっしょくたにした風景として眺めて認識する方が簡

単であり、そこに落ち着きたくもなる。鑑賞教育はそのように輪郭がくっきりした性質のものではない。そこで、学校と美術館両者は、行き先の違う乗り物に乗って移動していること、美術作品鑑賞の指導者としてその乗り物を操縦する能力が必要なこと、鑑賞教育は行き先までの経由地の一つでしかなく、移動する両者にはまた別の経由地が浮上してくるかもしれないこと、といった提案が、三回にわたって開催した鑑賞教育指導者研修会で、参加者に伝わっていることを願っている。

最後に、本研究が先生からのアンケート結果をもとに構成されていることについて言及したい。本研究は、アンケート結果から傾向を探り、導き出された結果を一般化しようとする試みでは決してない。アンケートの危険性は十分承知した上で、それでも当館あるいは本県の、学校と美術館の連携について一歩先に進むため、そしてそれが絵に描いた餅で終わらないために、本県の芸術教育に携わる方の意見に耳を傾けることから始める必要があると考えた。従って、学校と美術館の連携をテーマにした先達の優れた研究実績とは違い、本研究が一般化できるものとは考えていないが、少なくとも本県の実態に合致した方向性は示すことができたと考えている。

註1 当館では、いわゆる学校の幼児、児童、生徒、学生を引率する教員に対し、専用の減免申請書の提出・受理の手続きにより条例に基づいて観覧料を免除している。

註2 小学校学習指導要領／第2章 各教科／第7節 図画工作／第3 指導計画の作成と内容の取扱い／2(5)『各学年の「B鑑賞」の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること。』
中学校学習指導要領／第6節 美術／第2 各学年の目標及び内容／第3 指導計画の作成と内容の取扱い／2(5)『各学年の「B鑑賞」の題材においては、日本や諸外国の児童生徒作品、アジアの文化遺産についても取り上げるとともに、美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること。』
(文部科学省新学習指導要領より抜粋)

註3 当館ホームページでも、【学校の先生向け】ページを開設し、公開している。

静岡近代美術年表稿 昭和戦前編 2

立花 義彰

この年表は、『静岡県博物館協会紀要』第34号の『静岡近代美術年表稿 昭和戦前編1』の続きで、昭和6年から10年までを対象としている。

この時期の県内の注目すべき活動の一つとして、全国的な創作版画運動の影響を受けて生れた童土社の活動・創作版画誌『ゆうかり』の刊行がある。

これについては当事者でもある栗山茂(1912-2010)が代表となった静岡県版画協会の『第50回記念版画集 県版画50年の歩み』(以下50回記念版画集と略記)に詳しい。また創作版画に関する近年の労作、加治幸子著『創作版画誌の系譜』等が詳細に述べているので、この年表稿の導論では重複を避けつつ若干の補足を行いたい。

童土社が生れたのは昭和4年。昭和4年10月5日から7日、静岡の田中屋を会場として第1回展を行った。これまで、不明となっていた開催時期については、本稿編纂の為の調査で、以下の記事を発見して判明した。

「童土社版畫展／童土社同人の版畫展覽會は昨五日より七日まで呉服町三丁目田中屋シャツ店階上に開催同會の出品者はいづれも素人にて出品點數八十餘、他に元二科會々友横井弘三氏の出品もある」(民友10/6)

短い記事ではあるが、栗山と共に同会創立者の主要人物の一人小川龍彦(1910-1988)が影響を受けたとされる横井の名を確認できた。

田中屋シャツ店とは、田中屋百貨店(現:静岡伊勢丹)の前身である。当時の静岡は丸高百貨店、昭和7年の松坂屋の完成等の百貨店登場の時期でもあり、百貨店を会場とする展覧会の出現も時代の流れを表している。

昭和5年の第2回展についての記事は簡単なものでしかないが、現存する展覧会目録等で概要が知れる。この第2回展の会場に中川雄太郎(1910-1975)が来場して同人に参加、翌昭和6年6月の第3回展より出品する。但し『ゆうかり』への参加は昭和6年暮の5・6号よりとなる。『ゆうかり』は、昭和6年1月の1号から昭和10年8月の30号までが刊行されており、詳細は『創作版画の系譜』を参照されたい。

なお、展覧活動について『創作版画誌の系譜』では、第7回展開催時期会場を不明とし又第9回以降に関しての記事がないが、『50回記念版画集』を参照して、記事資料を探していくと昭和17年(1942)の第13回展まで、昭和12年を除き毎年開催していることが判る。従って6回以降を文末に開催一覧補遺として記しておく。

第7回展の開催は、静岡新報の昭和10年9月29日付の小川龍彦「前川千帆の藝術:第7回童土社展の概評」から概要を知る事ができ、第8回でも、活発な中央・他地域の作家の特別陳列を確認できるのだが、中断を挟んだ昭和13年の第9回展以降は、少人数のグループ展の傾向が強まっており、後に『50回記念版画集』の中で、おそらくは栗山の回顧なのであろうが昭和11年の項目で「出品同人も固定化が進み、相互に中央展を意識するようになる」とした事が、童土社展中断以前と以後とで明確に見てとれる。

静岡における創作版画誌を代表する『ゆうかり』は小川龍彦、中村岳、栗山茂、杉山正義、栗山弥生、外川春子、内田達次、宇佐美一郎の8人の同人でスタートしそれぞれの生活環境の変化で、栗山茂、小川龍彦、中川雄太郎、中村岳(1909-1993)、浜松の大城貞夫(1908-1982)らが、同人・版画家として残っていくのだが、『ゆうかり』、版画誌に対する意識の違いから、中川の機械刷の試みは同人に受け入れられず、「中川の機械印刷思考は粗であり、それは戦後彼が手になる多くの印刷物書物にも尾を引いていることは惜しい。また小川の版画に対する東洋趣味的思索は彼を民芸に道に導き、やがて現代版画への絶縁と言う結果をもたらすことになるのも惜しいことである。恩地氏に最も近い作画態度を持っていた中村が、生来の消極性から、最も個性のある新しい版画を作りながら、其の後十分な開花を見せずに終わったのも惜しい。」(『50回記念版画集』)とあるように、創作版画運動としての童土社は、『ゆうかり』30号を持ってその後を予見するような一つの節目を迎えたと考えられる。

この時代で注目すべき点は、『ゆうかり』に関わった人々の図書館館員、郵便局員、市役所職員といった職歴や学歴に

象徴されるように、それまでの時代のこの地域の画壇を構成していた教職者・師範学校・美術学校卒とは異なる独学の作家達が登場して来ることであろう。

創作版画の地方への普及の時代は同時に展覧会の時代でもあり、それまでの専業の画家や教員を主体とする美術の世界を、地域のアマチュアにまで門戸を開いていく戦後の動向を先取りするものでもあった。当然、戦後県版画協会の母体となり国画会版画部出品の童土社といえども、戦前静岡の旧市街を活動の拠点とした1サークル活動であった事には研究上充分留意すべきで、更に県内から中央展への版画作品出品の先駆的な例としての昭和5年の第11回帝展での下田の鈴木利三の入選作や国画会以外への出展、創作版画誌『版画座』など、埋もれた作家作品については未だに今後の検討課題であろう。

相変わらず杜撰にして遺漏の多い本年表稿であるが、それらの再評価を期待しつつ導論の結びとする。

参考文献

- 中川雄太郎『静岡県版画史話』昭和42(1967)年
『静岡県版画協会第50回記念版画集』昭和60(1985)年
『静岡の創作版画』展於図録 静岡県立美術館 平成3(1991)年
『日本の版画Ⅳ 1931-1940』千葉市美術館 平成15(2003)年
加治幸子編著『創作版画誌の系譜』中央公論美術出版 平成20(2008)年
『竹久夢二と静岡ゆかりの美術』静岡市美術館 平成24(2012)年

童土社展開催一覧補遺

第6回展 昭和9年9月22日～25日 田中屋
(目録)

第7回展 昭和10年9月26日～29日 田中屋
(新報9/29)

第8回展 昭和11年10月10日～12日 田中屋
(目録 民友10/10)

第9回展 昭和13年9月21日～24日 田中屋
(目録,案内,新報9/21、読売静岡版9/21)

第10回展 昭和14年10月20日～22日 田中屋
(目録)

第11回展 昭和15年11月21日～24日 浜松谷島屋

(目録,計画書)

第12回展 昭和16年11月14日～17日 吉見書店

(目録,案内,計画書)

第13回展 昭和17年11月7日～10日 吉見書店

(目録)

年表稿凡例

民友 『静岡民友新聞』

新報 『静岡新報』

静岡 『静岡新聞』

浜松 『浜松新聞』

東日 『東京日日新聞』

読売 『読売新聞』(地方版)

朝日 『朝日新聞』(地方版)

熱海 『熱海新聞』

駿遠豆 『駿遠豆』

美術年鑑 『日本美術年鑑』

出品目録 『昭和期美術展覧会目録』『大正期美術展覧会目録』『近代日本アートカタログコレクション』所収及び出品目録類原本等。

目録 中川雄太郎所蔵資料コピー

案内 中川雄太郎所蔵資料コピー

規則 中川雄太郎所蔵資料コピー

計画書 中川雄太郎所蔵資料コピー

S./ 昭和 年 月 日

《》* 作品名 (太字は図版掲載,*は掲載紙)

他『アトリエ』『工芸』『中央美術』『塔影』『美術新論』『美之園』『みづゑ』は誌名を表記。各市町村史等は簡略に書名を表記。

昭和6年 1931

- 1/1 創作版画誌『ゆうかり』創刊。
- 1/1 日光博覧会於静岡市清水公園(-31)。(民友S5.12/20,新報S5.12/16)
- 1/11 第1回独立展於東京府美術館(-31)。河瀬道雄《風景》《静物》《室内》
- 1/13 上木浩一郎逝去。(民友1/15,新報1/15,駿遠豆6-2)
- 1/15 第8回白日展於東京府美術館(-29)。一木隴二郎《コルドバにて》《石橋》《マントーを着た女》《プエンテ・デ・アルカントラ》《扇を持つ女》太田重範《冬の日》。一木隴二郎、会員推挙。(出品目録、美術年鑑S7)
- 1/25 一宮聡子《初音》翠紅会第6回展於銀座松屋入選。(新報1/28)
- 2/ 芹澤銈介、『工芸』連載。(工芸no.2¹²,17,24²⁸,30³⁶,41⁴⁵,48⁵⁰,53⁵⁷,59⁷⁶,80,83⁸⁵,87,90,95,99,100,103¹¹¹,113)
- 2/ 1 第18回光風会展於東京府美術館(-19)。青木新作《野方風景》《窓外雪景》赤城泰舒《海》《立岩》《夏》《大島元村》《海辺にて》《大島野増村》《雪景》石川欽一郎《駅路》《清流》《田園小景》《並木の道》漆畑廣作《御茶水風景》清水柳太《陽は朗かに》(みづゑno.313,出品目録)
- 2/10 篆刻家足立疇邦来静。(民友2/15)
- 2/11 三十五銀行ビル(現静岡銀行本店)完成。(新報2/8)
- 2/16 静岡新報社主催日本画無料揮毫会於静岡新報社(-26)。倉木玉南、鈴木嶺霞、中野春翠の揮毫。(新報2/17,18,20)
- 2/22 第27回太平洋画会展於東京府美術館(-3/15)。漆畑廣作《A君の像》澤田寅[政廣]《男の顔》鈴木満《椅子に寄る女》(出品目録)
- 2/27 静岡新報社主催日本画無料揮毫会於清水市銀行集会所(-29)。(新報2/26)
- 3/ 6 静岡新報社主催日本画無料揮毫会於浜松商品陳列所(-11)。棚田暁山、大根田雲陽、庄司淳、久保田玉穂、市原滋夫の揮毫。(新報3/8,9,10,11)
- 3/13 曾宮一念、二科会会員推挙。《風景》(みづゑno.325)
- 3/15 第8回槐樹社展於東京府美術館(-4/4)。青木新作《四谷風景》田辺嘉重《室内読書》山道栄助《苦力の家》小林猷治郎《山峡》(駿遠豆11-10,出品目録)
- 3/ 朝倉文夫《猫供養観音》身延へ献納。(浜松S5.10/20)
- 3/26 静岡新報社主催浜松博覧会記念日本画無料揮毫大会於浜松金井呉服店(-4/5)。松野自得、小山晴雲、中山秋湖、中山菜花路、伊藤孝の揮毫。(新報3/24,26,27,4/1,3,5)
- 3/29 服部亮英似顔絵大会於無料揮毫於大会会場。(新報3/28)
- 4/ 静岡商品陳列所、商工奨励館と改称。(民友S5.6/30,S6.2/18)
- 4/5 釈迦像、宝台院より狐ヶ崎に遷座。(新報4/5)
- 4/8 静岡新報社主催日本画無料揮毫会第2回於静岡報社(-12)。松野自得、小山晴雲、山中菜花路、八木静音が揮毫。(新報4/8,10)12-15日に実費揮毫会として延長。(新報4/13,14,15)
- 4/10 藤川勇造《吉岡弥生像》除幕式於東京女子医学専門学校。(駿遠豆6-5,9)
- 4/11 松野自得歓迎句会於静岡紺屋町斟月庵。(新報4/10)
- 4/12 第9回春陽会展於東京府美術館(-5/3)。高梨正、入選。(東日静岡口版4/11)島田四郎、入選。(駿遠豆6-5)茨木猪之吉《五月の風景》小栗哲郎《冬の堀端》《竹橋》島田四郎《山村》《久能山近傍》高梨正《静浦風景》原田聚文[和周]《柿生の秋》《雪の曇り日》林倭衛《伊豆風景》横溝角次郎《柿崎風景》(みづゑno.315,出品目録)
- 4/12 第6回国画会展於東京府美術館(-25)。平松実、入選。(駿遠豆6-5)山村誠《鹿谷》入選。(駿遠豆6-5,東日静岡イ版4/26*)東克己《池上風景(1)》《同(2)》柏木俊一(会友)《静浦風景1》《同2》《同3》洪川駿二《静物》《風景》《金桜山》《秋晴》《静浦三津風景》鈴木長久《静浦風景》《下香貫風景》《香貫風景》鈴木利三《伊豆の小湾》中島正貴《郊外秋景》山村誠《鹿谷》《木の間》《庭》芹澤銈介(会友)《紺地カーテン地》他11点。平松実《襟巻》《クシヨシ地》梅原龍三郎《静浦》宮坂勝《下田港》(出品目録)
- 4/19 澤田政廣、《唐人お吉像》制作打合せの爲、下田を訪問。(新報4/21,駿遠豆6-5)
- 4/20 静岡新報社主催日本画普及実費揮毫会於沼津商工会議所(-23)。松野自得、小山晴雲、中山菜花路が揮毫。(新報4/19,20,23)
- 4/ 荒木寛方、来静。葵陽館に滞在し揮毫。(民友4/30)
- 4/29 笠井竹亭漫遊みやげ絵会富士成安寺。1ヶ月滞在后、再び台湾漫遊の途に。(民友4/18,30,5/1,新報4/17,5/1)
- 5/ 8 黒耀会洋画展覧会第3回展於田中屋。(目録、民友5/7)
- 5/15 木村和一染色個人展覧会於田中屋(-17)。(新報5/15,民友5/16)
- 5/21 大須賀菊雄素描肖像画展於田中屋(-26)。(駿遠豆6-6,民友5/19,24)
- 5/22 若葉会創立15周年記念展覧会於静岡市商工奨励館(-26)。(民友5/22,26)
- 5/25 一木隴二郎滞欧作スケッチ小品展覧会於教育会館(-29)。(目録)
- / 大村光江、満州旅行。(駿遠豆6-6)
- 5/27 第3回第一美術協会展於東京府美術館(-6/18)。栗原忠二《ぼたん》(美之国7-7)
- 5/28 第18回日本水彩画会展於東京府美術館(-6/14)。赤城泰舒《甲板にて》水野以文。
- 6/5 静陵洋画第2回展於田中屋(-8)。(目録、新報6/7)
- 6/16 駿遠美術展第1回展於田中屋(-21)。(駿遠豆6-7,目録,新報5/1)
- 6/16 第1回日本木彫会展於東京日本橋三越(-21)。澤田政廣他。
- 6/ 田中百嶺画、北野元峰賛《観音像》松浦家へ贈呈される。(新報6/23)
- 6/27 童土社創作版画展第3回展於田中屋(-29)。(目録,民友6/27,新報6/25)
- 6/30 第1回三玄会展於慶応病院(-7/4)。原田聚文他。(みづゑno.318)
- 7/ 2 麗光社美術展第5回展於田中屋(-5)。(駿遠豆6-7,目録,民友7/4,新報7/4)審査員:鈴木利三他。鈴木利三《ひるね》他出品。(新報7/3,4)
- 7/16 川合改次郎、東京府下長崎町より北多摩郡保谷村宮下保谷269へ転居。(駿遠豆6-8)
- 7/ 塚原政之、農民美術展覧会於新潟に出品。(東日静岡イ版4/23,1版5/22,2版5/24)
- 7/22 大須賀菊雄満鮮旅行送別句会於茶業組合。(民友7/23)9月中旬帰国予定。静岡高等学校講師を命じられた。(民友7/21)
- 8/15 カロシヤ美術展於静岡丸高百貨店(-17)。(目録、民友8/15)
- 8/23 赫土会第1回洋画展覧会於清水材木組合事務所(-26)。(民友8/21)
- 9/3 高見沢木版社浮世絵展覧会於すみや(-7)。(新報9/1,3,5)
- 9/4 第18回二科展於東京府美術館(-10/4)。永井武夫、入選。(東日静岡2版9/3)赤城泰舒《少女像》**《静かなる風景》***曾宮一念《庭》《けし畑》**《ひまはり》*《切り通し》《静物》竹田久《静物》永井武夫《洛陽近し》三好光志《時計、野菜等》山道栄助《静物》(美術年鑑S7*,みづゑno.320**,323***,アトリエ8-10,美術新論6-10,駿遠豆7-2**,出品目録)
- 9/4 第18回院展於東京府美術館(-10/4)。近藤浩一路(同人)《草競馬》*《宇加比》中村岳陵《婉膩水韻》*(美術年鑑S17*,塔影7-8,美之国7-10,アトリエ8-10,美術新論6-10,出品目録)
- 9/7 第1回日本版画協会展於東京日本橋三越(-11)。小泉癸巳男(会員)《日比谷公園つつじ》《芝浦臨港ハネ橋》《染工場》《塔と梅林》《三井と三越》《銀座夜景》《仁王門より仲見世へ》《椿》《百日草》小川龍彦《風景》(出品目録)
- 9/13 庵原中学校展観。(目録)
- 9/30 太田重範、静岡市商工奨励館技手となる。(民友10/11)
- 9/ 曾宮一念、日曜洋画講習。(みづゑno.320)
- 10/7 尚美会第18回美術展覧会於静岡市商工奨励館(-11)。(目録)
- 10/9 戸島光孚講習会於静岡市商工奨励館(-10)、辻梅旅館に滞在し揮毫。(新報10/11)

- 10/13 平松實氏手織物展覧会於東京銀座資生堂(-21)。(アトリエ8-11,みづゑno.)
- 10/16 第12回帝展於東京府美術館(-11/20)
澤田政廣《白夜飛星》(駿遠豆7-1)
山口益《母子》入選。(駿遠豆6-11,民友10/11,東日静岡版10/11)
太田重範《日本娘》入選。(民友10/11,新報10/11)
花村晃歎、入選。(S75/1)
井上恒也《友呼ぶおきつどり》花村晃歎《溪澗の春》一木隴二郎《家族》**細井繁誠《初秋の一日》太田重範《日本嬢》澤田政廣《白夜飛星》*長澤幸夫《芳豊》山口益《母子》稲木春千里《鋸製筥》中島東洋《大空》(美術年鑑S7*,みづゑno.321**,美之國7-11,美術新論6-11,出品目録)
/ 芹澤銈介近況。(駿遠豆6-11)
- 10/17 かけたつば美術展於西奈尋常高等小学校(-18)。(目録)
- 10/ 川手青郷、静岡に滞在。(新報10/21)
- 10/28 川村清雄《振天府》明治神宮絵画館に納められる。(新報11/3)
- 10/29 宝台院阿弥陀如来国宝指定。(東日静岡1,2版10/30)
- 10/30 県下小学校教員作品展覧会第3回展於教育会館(-11/3)(新報10/24,31,駿遠豆6-11)
- 10/31 戸島光阿弥歎迎漆画会於すみや(-11/1)。(新報10/28,民友10/29)
- 11/1 帝国美術院開設二十五周年記念遺作展於東京府美術館(-20)。
益頭峻南《春溪鴛鴦》《鶴》他。(美術年鑑S7)
- 11/6 静岡県下小学校教員展覧会第2回展於教育会館(-10)。(目録、東日静岡1,2版10/30)
- 11/ 磐田国分寺鰐口発見される。(東日静岡1,2版11/19)
- 11/21 蘆美会洋画展覧会第3回展於丸高百貨店。(目録)
- 11/22 フラッシュランプ応用写真撮影と競技会於東海軒(-23)。静岡写真師協会他主催。
(民友11/20,21,22,23)
- 11/ 小林清親遺作展於東京銀座伊東屋(-28)。
市川龍子、泰東書道院第2回展覧会入選。(東日静岡2版11/29)
- 11/ 沖六鳳、泰東書道院第2回展覧会文部大臣賞。(東日静岡1,2版12/1,駿遠豆7-1)
- 12/8 田中屋百貨店開店、(民友12/8)
- 12/9 中澤《山田長政像》制作。建立場所未定。(民友12/10,S7.1/12)
藤川勇造《山田長政銅像》(新報S4.4/25.9/18)
- 12/16 中谷宏運《加藤定吉寿像》除幕式於清水小芝神社。(民友8/7,12/17)
- 12/18 京都洛窯会陶芸展覧会於丸高百貨店(-20)。(民友12/18)
- 12/25 明珍恒男、県下社寺修理調査の為来県。智満寺、大福寺、摩訶那寺、長谷寺、願成就院視察予定。(民友12/17)
- 昭和7年 1932**
- 1/15 第9回白日会展於東京府美術館(-30)。
一木隴二郎《人物》《風景》《婦人像》《横顔》太田重範《男(習作)》(出品目録)
- 1/23 商業美術と染色美術展覧会於静岡市商工奨励館(-27)。(東日静岡1版1/23,2,2版1/15,16,17,19,民友1/22,新報1/14)
- 1/26 静岡高校絵画部展覧会(-28)。特別出品:鈴木良三 滯欧スケッチ油絵、鶴田吾郎スケッチ10点、曾宮一念二科出品作2点等。(民友1/27)
- 1/28 《中村圓一郎銅像》除幕式於千頭駅前。(民友S6.11/15,S7.1/19,26,東日静岡2版1/26*,新報1/26)
- 1/ 静岡新報、七福神色紙頒布。吉村忠夫《弁才天》池上秀敏《福祿寿》等。
(新報1/9,14,16,17,26,31,2/4,7,29,12/21)
- 2/ 和田英作《赤倉から見た日本アルプスの景》宮城内花蔭亭完成。(新報2/6)
- 2/6 第1回六潮会展於東京日本橋三越(-10)。
中村岳陵《軍鶏》《狗兎図》*(美術年鑑S8*,塔影8-3,美之國8-3)
- 2/5 静岡県中部小学校児童作品展第1回展於田中屋(-11)。(民友2/9,11,16)
- 2/11 《山田長政像》除幕式於浅間神社裏庭賤機山公園。(民友2/12)
- 2/17 第28回太平洋画会展於東京府美術館(-28)。
漆畑廣作《ニコライ堂遠望》澤田寅[政廣]《裸婦》
- 鈴木満《果実を持つ》(出品目録)
- 3/2 第16回院展試作展於東京府美術館(20)。
近藤浩一路《鶴》(美之國8-4)
- 3/5 細井繁誠個人展於すみや(-6)。(民友3/6,新報3/4)
- 3/10 院展同人派遣軍慰問展(-12)。近藤浩一路《鶴》中村岳陵《燕巢》(塔影8-4)
- 3/ 竹林立斎、静岡長生館に滞在し揮毫。画会開催。(新報3/10)
- 3/10 新古書画大展覧会於静岡市商工奨励館(-13)。(目録)
- 3/19 第2回独立展於東京府美術館(-4/10)。
河瀬道雄《黒衣少女》(駿遠豆18-2)
- 3/26 静岡アマチュア漫画倶楽部主催愛国漫画展於マルタカ百貨店(-28)。(民友3/24)
- / 前田千寸、沼津中学退職。(駿遠豆7-4)
- / 平松實近況。(駿遠豆7-4)
- 4/1 野崎露子《ばら咲く庭》朱葉会展於新宿三越入選。(民友4/11)
- 4/7 玉井莊雲蒙古風俗個人展於浜松商品陳列館(-8)。(東日静岡2版4/7)
- 4/10 韭山反射炉修理完成。(新報4/16)
- 4/15 静岡市商工奨励館参考品入札払下及び陳列替。(民友4/15)
- 4/17 第19回光風会展於東京府美術館(-5/5)。
赤城泰舒《飯坂温泉》《海辺》《M嬢》《手風琴を持つ少女》**《窓辺》石川欽一郎《街道》《竹の秋》《駅路》《町端れ》岡野栄《ほけ咲く熱海》《伊豆山の海》《熱海の春》《園の一隅》二又川春子《春の花》大野隆徳《修善寺温泉》*、三宅克己、南薫造、辻永等に県内に取材した作品。(美術年鑑S8*,みづゑno.327**,出品目録)
- 4/19 彫刻伝習会於静岡市商工奨励館。(-28)。
講師太田重範他。(民友4/27)
- 4/24 第10回春陽会展於東京府美術館(-5/15)。
茨木猪之吉《山麓の冬》小栗哲郎《池》《小浦風景》高梨正《静浦風景》原田聚文[和周]《景福宮香遠亭》《南山を眺る》《仁王山》長谷川昇《伊豆風景》中川一政《日阪村》(美術年鑑S8,みづゑno.328,出品目録)
- 4/28 静陵洋画第3回展於すみや(-5/1)。(目録,民友4/29)
- 4/29 葛谷龍禅、伊豆山岩田別荘に滞在。神宮絵画館に納める横浜開港の図制作のため。2ヶ月を予定。(新報5/3)
- 5/ 花村晃歎画会。《池畔の行楽》《峡澗の春》展於田中屋。(新報5/1)
- 5/6 黒耀会洋画展覧会第4回展於田中屋(-9)。(目録、新報5/2)
- 5/7 静岡県女子師範学校創立25周年記念展覧会(-8)。(目録)
- 5/7 童土社創作版画展於すみや(-9)。(新報5/7)
- 5/7 黒耀会第4回展於田中屋(-10)。(民友4/24)
- 5/7 第7回国画会展於東京府美術館(-24)。
東克己《池上風景》柏木俊一(会友)《川奈富士と道》*《欲雨欲晴》《伊豆風景》《子浦風景》《ゴルフ場へ行く道》《川奈富士と雑木林》《山間人を見ず》《海辺春を待つ》《月光百万里》《山中の旅人》渋川駿二《椿リンゴ》《黒外套の女》《新緑風景》鈴木長久《川奈》《橋のある風景》《牛伏》《口野》中島正貴《アネモネ》《大山園》山村誠《大草山》《寺苑松》《東林池畔》《郷里新緑》小川龍彦《木島風景》芹澤銈介(会友)《たたう》他13点。(みづゑno.328*,美術新論7-6,アトリエ9-6,出品目録)
柏木俊一会員推挙。(美術年鑑S8)
山村誠《早春》制作中。(駿遠豆7-5)
- 5/10 静岡高校絵画展於田中屋(-11)於静岡高校(16-17)。特別出品:曾宮一念《ザボン》《荒園》《少女》鈴木信太郎《雪の郊外》《静物》《早春》野田半三《濠》《新緑の頃》《伊豆の海》三上知治《緑陰白馬》小泉素彦《ノートルダム》《窓辺》佃武昭《子供の顔》《窓辺》仙波金平《静物》金子廣信《松》鶴田吾郎《奉天商埠地》《飛行将校》《錦州の客棧》鈴木保徳《写生する人》(新報5/10,民友5/10)
- 5/13 横尾芳月古近風俗美人画展於すみや(-16)。
横尾芳月来静。(民友5/13)
- 5/14 茨木猪之吉個展於東京銀座川島屋(-18)。(美術年鑑S8)
- 5/21 第19回日本水彩画会展於東京府美術館(-6/14)
石川欽一郎《農家水田》*《小流》《野尻湖》赤城泰舒《芦ノ湖風景》*
(みづゑno.329*,美之國8-7)
- 5/ 第9回青甲社展。秋野不矩《花まつり》出品。

- (塔影8-7)
- 5/ 野木鳳堂《般若心経》第89回日本美術会展2等入賞。(新報6/2)
- 6/11 第4回第一美術協会展於東京府美術館(-19)。栗原忠二《ベニスの風景》《初夏の海(熱海)》(美之国8-7)
- 6/16 第2回日本版画協会展於東京朝日画廊(-20)。小泉癸巳男《ロシア波止場売買人》*《鴨緑江のイカダ》**小川龍彦《落合風景》《A駅にて》栗山茂《つゆくさ》(出品目録駿遠豆7-6*7-7**)
- 6/14 矢野陶陶個人展覧会於浜松商品陳列館(-16)。(東日静岡2版6/9)
- 6/17 港屋主催諸国新工芸品展覧会於すみや。(民友6/17)
- 6/25 小林茂洋画個展於田中屋(-27)。(民友6/24,26) / 栗原忠二《ベニスの夕陽》田方郡教育会に寄贈。(駿遠豆7-9)
- 7/17 《山田長政立像》除幕式於狐ヶ崎。(新報6/4,7/8,10,17*,18,民友7/8)
- 7/30 漫画と工芸品の展覧会於田中屋(-8/2)。静岡師範出身澤田欣作、鈴木至郎、増田恒治の主催。(民友7/28,8/2)
- 8/30 北原白秋、町田嘉章、岡本一平、池辺鈞、水島爾保布、細木原青起、清水対岳坊、前川千帆、池田栄一治、宍戸左行、田中比左良、宮尾しげを、服部亮英、堤寒三、麻生豊一行、浜名湖舟遊。(東日静岡2版8/27)
- 9/2 和田三造夫人英子死去。大久保春野陸軍大将の娘。(民友9/2)
- 9/3 第19回院展於東京府美術館(-10/4)。近藤浩一路(同人)《日向勝景五題》藤井白映《秋の日》(出品目録)
- 9/3 第19回二科展於東京府美術館(-10/4)。赤城泰舒《高原の青沼》《夏装》**曾宮一念《かれはなばたけ》《いちじく》*(美術年鑑S8*,みづゑno.332**,美術新論7-10,出品目録)
- 9/10 《鈴木吉兵衛像》除幕式。(民友9/13)
- 9/13 県下女子中等学校生徒作品絵画展覧会於田中屋(-18)。(民友9/13,14,16,17)
- 9/13 第1回洞穹会洋画小品展於東京日本橋三越(-16)。

- 曾宮一念《あまりりす》(みづゑno.333)
- 9/18 尚美会第19回展於静岡市商工奨励館。(民友9/16)
- / 細井繁誠《我が家族》制作中。(駿遠豆7-10)
- 10/ 岡本一平漫画展於すみや(-3)。(民友9/22)
- 10/16 第13回帝展於東京府美術館(-11/20)。澤田政廣《華炎》*政府買上。(駿遠豆7-10*,11) 山口益《少女と山羊》*太田重範《長春譜》**入選。(東日静岡1版10/11**,新報10/12,民友10/11*) 秋野ふく、入選。(駿遠豆7-11,民友10/14) 細井繁誠入選。(駿遠豆7-10,11,民友9/14,10/14) 秋野ふく《ゆあみ》*細井繁誠《裏畑にて》相曾秀之助《髪》井戸義夫《或男》太田重範《長春譜》澤田政廣《華炎》水野欣三郎《秋麗》山口益《少女と山羊》稲木春千里《几》熊谷重太郎《メカニカルコンポジション》二橋美衡《鳩香爐》(美術年鑑S8*,塔影8-10,美術新論7-11,出品目録)
- 10/30 静岡県下小学校教員作品展覧会第4回展於教育会館(-11/4)。(目録、新報10/30,31,11/1、民友10/21,30)
- 11/5 鈴木俊雄個展於田中屋(-7)。(民友11/2)
- 11/7 郷土先賢遺墨展覧会於葵文庫(-11)。(民友10/6)
- 11/20 松坂屋静岡店開店。(新報11/18、民友11/18)
- 11/22 新古書画鑑定大会於教育会館(-27)。長屋秋香、乾南陽、小野蕉鹿、中村芭蕉畝の無料揮毫(-26)。鑑定は27日三吉野旅館に場所を移して延長。(新報11/22,23,24,27)
- 11/29 沖六鳳、泰東書道院第3回展覧会入選、特別会員となる。(東日静岡2版12/1,2) 野木鳳堂入選。(新報12/1)
- 12/2 田中屋百貨店火災で全焼。(新報12/3,22)
- 12/ 県下国宝の修理なる。(民友12/15)
- 12/ 笠井竹亭、九州を漫遊し、熊本で画会開催。(民友12/27,S8.1/1)
- / 澤田政廣《鶏》静岡県人社の為に制作。(駿遠豆8-1)
- 昭和8年 1933**
- 1/20 第10回白日会展於東京府美術館(2/5)。吉野不二太郎《水差しを配した静物》(出品目録,駿遠豆8-2)

- 1/12 六鳳書院書初展覧会於松坂屋(-16)。(民友1/12)
- 1/15 引佐郡気賀で銅鐸発掘。(東日静岡1,2版12/8)
- 1/18 近藤浩一路作品展覧会於大東館。(民友1/17) / 内蔵栄一、伊豆に住み、農民美術を研究。(東日静岡1版2/3)
- 1/27 《中山浅一郎石像》除幕式。(新報1/28,29) / 秋野不矩後援会結成。(新報2/1)
- 2/2 第20回光風会展於東京府美術館(-21)。赤城泰舒《温泉場風景》《公園小景》《少女》《御茶ノ水風景》石川欽一郎《帰帆》《上野附近》《バラ》《閑境》清水柳太《アンコ》《冬の大鳥アンコ》二又川春子《静物》(みづゑno.337,出品目録)
- 2/1 第2回六潮会展於東京日本橋三越(-5)。中村岳陵《雪》*中川紀元《熱海》** (塔影9-2*,美之国9-3*,みづゑno.337)
- 2/11 鉄道美術連盟作品展覧会於丸高百貨店(-14)。(新報2/11)
- 2/11 静岡高校絵画展於すみや(-12)。野田半三、曾宮一念出品。(駿遠豆8-3)
- 2/10 第1回東光会於東京府美術館(-3/5)。大川武司(みづゑno.337) 高島茂雄《伊豆船原秋色》(新報2/14,駿遠豆8-3)
- 2/17 赫土社洋画展覧会第2回展於清水港材木商組合事務所(-19)。(目録,新報2/14)
- 2/19 黒耀社洋画展覧会第5回展於松坂屋(-21)。松井昇《瓦やく家》*《農家の裏庭》《山村の秋》《石狩の平野》他。(目録、民友S7.12/25,S8.1/29,2/19,21,22*,新報2/19,25)
- 2/23 第17回院展試作展於東京府美術館(-3/14)。中村岳陵《鷹》花村晃観《奔流》(塔影9-3)
- 2/27 第20回日本水彩画会展於東京府美術館(-3/14)。赤城泰舒《文化学院風景》石川欽一郎《古廟》《河畔》《小駅》(みづゑno.338)
- 3/1 第5回戊辰会展於東京日本橋三越(-5)。花村晃観《奔流》(みづゑno.388)
- 3/7 静岡市連合児童創作作品展覧会第7回展於西豊田小学校(-9)。(民友3/13)
- 3/10 第3回独立展於東京府美術館(-31)。川瀬道雄《石膏のある静物》《女》三好光志《洋燈其他》《庭》(出品目録)

- 3/11 勝間田武夫滞欧作品展於大阪朝日会館(-14)、於神戸朝日会堂(4/20-22)。(みづゑno.340)
- 3/11 第1回旺玄社展於東京府美術館(-20)。田辺嘉重他。甲賀守《焼津海岸》神谷三男《山畑》入選。(民友3/21)
- 3/12 《小沢義助像》除幕式。(新報3/12*,東日静岡2版3/12*,駿遠豆8-4)
- 3/25 三島復興祭に三島大社記念館で白隠菊池袖子、近藤浩一路、栗原忠二、細井繁誠等の新古書画展覧会(-26)。(民友3/24,新報3/24)
- 4/9 《飯塚唯助主計総監像》除幕式。(東日静岡1版4/9*,民友S7.12/14,S8.4/9*,民友S9.5/16)
- 4/18 第8回国画会展於東京府美術館(-5/4)。鈴木至郎、入選。(民友4/17,23) 中川雄太郎、栗山茂、中村岳入選。(民友4/17) 柏木俊一(会員)《白浜朝陽》《稲取風景》《丘と森》*《樹木と池》《静物》渋川駿二《熱海》*鈴木長久《風景》《江間》山村誠《湖岸の夏》《巖頭応身》栗山茂《湖の見える風景》中村岳《石炭場》中川雄太郎《百姓家のせと》鈴木至郎《テーブルセンター》芹澤銈介(会員)《けし唐草カーテン》《型染襖腰張》《同表紙張交》(みづゑno.340,*アトリエ10-6,美之国9-5,美術新論8-6,出品目録)
- 4/23 第11回春陽会展於東京府美術館(-5/14)。小栗哲郎《遠州小夜の中山菊川附近》入選、春陽会賞。(駿遠豆8-5) 曾根清雅、入選。(駿遠豆8-5) 高梨正、島田四郎、小栗哲郎、入選。(民友4/21,23) 茨木猪之吉《二月の常念岳》小栗哲郎《漁村》《菊川(1)》*《菊川(2)》《菊川(3)》栗田雄(会友)《窓》《静物》島田四郎《花》《室内》曾根清雅《正倉院への道》高梨正《うすれ日》原田聚文[和周]《肥後の山村》《肥後南の関》中川一政《菊川村》*((みづゑno.340*,アトリエ10-6,出品目録)
- 4/25 辻永、岡田三郎助他洋画家30名の伊豆旅行(~28)。下田より伊豆西海岸を写生し、沼津に到る。初夏高島屋で展覧。(駿遠豆8-5,民友4/25,28)
- 4/26 石井摸後援会新作発表舞踏会於浜松市公会堂。石井摸来浜。(民友4/7)

- 4/29 《森本愛二胸像》除幕式。
(東日静岡2版5/2*,駿遠豆8-5)
- 5/ 宮田司山花鳥画頒布会。(新報5/5,7,8,9,10,12,13,14,15,17,19,21,23,31,6/1,4,6,16,18,22)
- 5/15 松田青風の劇に関する展覧会於松坂屋(-17)。
(民友5/11,新報5/10)
- 5/20 書画骨董展覧会於島田快林寺(-21)。(民友5/20)
- 5/20 黄陽社洋画展覧会(-23)。静岡洋画会を改称。
(新報5/22)
- 5/20 第6回第一美術協会展於東京府美術館(-6/4)。
土屋豊吉《若人の胸像》(読売静岡版5/25)
栗原忠二《南国の午後》《ピクニック》
(美之国9-7)
- 6/10 故向坂健三氏遺作展於志太郡水産会館(-11)。
(目録)
- 6/17 静岡高校絵画展覧会於織平呉服店(-19)。
参考出品:曾宮一念、野田半三。
(民友6/16,新報6/16)
- 6/17 子供美術作品展覧会於静岡市商工奨励館
(-18)。
(民友6/14,17新報6/16,読売静岡版6/16)
- 6/19 松井昇逝去。(民友6/22)
- 6/25 市原香亭頒布会席画会於浮月楼。(新報6/8)
- 7/ 田中柏蔭、牧の原より富士を望む図を静岡浅間神社に奉納。(新報7/8)
- 7/14 漫画工芸展覧会第2回展於丸高百貨店(-17)。
(民友7/12,新報7/12)
- 7/ 瀬尾南海来静。(新報7/16,19,20,21)
- 7/ 瀬尾南海、白糸、伊豆の旅行。(新報8/1,2,3,4)
- 8/15 島人会第2回展於島田工芸協会物産陳列館
(-16)。(民友8/12)
- 8/19 童土社創作版画展覧会第5回於松坂屋(-22)。
(目録,新報8/20)
- 8/19 全国川柳交歓会於静岡市。漫画家等来静(-20)。
(民友8/19)
- 8/24 長谷川曾一逝去。(みづゑno.350)
- 8/27 床間掛・現代大家新進新作絵展覧即売会於丸高百貨店(-29)。(民友8/26,27)
- 9/ 瀬尾南海、掛川に滞在。(新報9/2,7,15)
- 9/1 第7回構造社展於東京府美術館(-11)。
飛岡元彦《昌平橋ぎは》入選。

- (民友9/9,新報9/9)
- 9/3 第3回日本版画協会展於東京日本美術協会(-10)。
小川龍彦《樹》栗山茂《大崩風景(A)》《大崩風景(B)》小泉癸巳男(会員)《震災記念堂》《墨田公園》《かちどきの渡し場》《穴守稲荷神社》《雪の泉岳寺》《靖国神社秋祭》《雨の弁慶橋》《石神井三宝寺池》《寿像》《鏡の前》《聖橋》《麻布三連隊》《嬢》《東京塵芥処理工場》小林清親参考出品
(みづゑno.344,出品目録)
- 9/3 第20回院展於東京府美術館(-10/4)。
近藤浩一路(同人)《朝風》中村岳陵(同人)《都会女性職業譜》藤井白映(近郊(其一・其二))《塔影9-10,アトリエ10-10,出品目録)
- 9/3 第20回二科会展於東京府美術館(-10/4)。
滝沢清《笈のある風景》入選。
(民友8/31,9/1,17*,新報9/1,東日静岡1,2版9/1)
影山静子入選。(新報9/1,東日静岡1,2版9/1)
赤城泰舒《夏季寮記念》*《アツコオルデイオンを奏く》*影山静子《静物》曾宮一念《きりの花》《いはの群》《てんしんもも》滝沢清《笈のある風景》竹田久《風景》(みづゑno.344*,アトリエ10-9,10,美術新論8-9,10,出品目録)
- 9/ 太田重範原型制作の賤機焼による二宮尊徳像完成。(東日静岡1,2版9/9)
- 9/ 川手青郷個展於松坂屋。(読売静岡版9/14)
- 9/ 澤田政廣に吉田松陰像制作の依頼。
(東日静岡1,2版9/22)
- 10/15 和田金剛帝展入選祝賀会於東京上野精養軒。
(駿遠豆8-11)
- 10/15 静岡師範生徒作品展於附属小学校(-17)。
(新報10/12)
- 10/15 県児童生徒創案表彰展覧会第3回展於県教育会館(-17)。(新報10/15)
- 10/15 院展同人小品展於東京松坂屋(-22)。中村岳陵《鶏頭花》。(塔影9-9)
- 10/16 第14回帝展於東京府美術館(-11/20)。
澤田政廣《春の女神》(駿遠豆8-10)
和田金剛《銀河》(駿遠豆8-11)
太田重範《美》和田金剛《銀河》山口益《畔》入選。
(新報10/9*,10*,東日静岡1,2版10/10、読売静岡版10/10,*駿遠豆8-11)

- 青木新作、細井繁誠、入選。(読売静岡版10/12)
- 大川武司、鈴木満、入選。(東日静岡1,2版10/12,駿遠豆8-11)
- 山下太郎《風景》入選。(新報10.12,東日静岡1,2版10/14*読売静岡版10/12,駿遠豆8-11)
- 細井繁誠《部屋にて》(美術新論8-11,駿遠豆8-11)
- 秋野不矩、入選。(駿遠豆8-11)
- 秋野不矩《朝露》井上恒也《多摩川にて》青木新作《麗日水辺》大川武司《農夫と子供》鈴木満《首飾りの女》勝間田武夫《姉妹読書》田辺嘉重《郊外新秋》細井繁誠《部屋にて》山下太郎《風景》相曾秀之助《女性》井戸義夫《女人像》太田重範《美》澤田政廣《春の女神》長澤幸夫《蒼天》水野欣三郎《白秋》和田金剛《星河》熊谷重太郎《メカニカル、ヴァリエーション染色屏風》二橋美衛《黒味銅花鳥文花瓶》(みづゑno.345,出品目録)
- 10/25 和田金剛帝展入選祝賀会於東京上野精養軒。
(駿遠豆8-11)
- 10/30 県下全商業学校生徒創作ショーウインド装飾決戦競技陳列於静岡市商工奨励館。(民友9/30)
- 10/30 栗原忠二個人展覧会於東京日本橋青樹社(-11/3)。
- 11/1 郷土先賢遺墨展覧会遠州の部於県立葵文庫(-7)。
(駿遠豆8-11)
- 11/1 静岡民友新聞社主催静岡県全女子中学校生徒図と画の作品展覧会於松坂屋(-)。審査員:三上知治。(民友11/1,2,4,6)
- 11/4 静岡市工芸品団体競技展第2回展於静岡市商工奨励館(-10)。(民友11/6,7)
- 11/5 小野田高節《小川菊造胸像》贈呈式。(駿遠豆8-12)
- 11/15 小室翠雲、大東館に滞在。11/15歓迎会於浮月楼。
(新報9/25,10/7,11/8,16,17)
- 11/15 静岡県下小学校教員作品展覧展第5回展於教育会館(-20)。審査員:石井柏亭他。
(目録、読売静岡版11/15、民友11/15)
- 11/15 平松實ざざんぎ紬第2回展於東京銀座資生堂(-18)。(アトリエ10-12)
- 11/26 嶽陽美術協会第1回創立展於静岡市商工奨励館(-29)。尚美会創立20年を機に改称。更に、県の展覧会への提言。(駿遠豆8-11,民友11/18,12/3,新報11/28,S9.1/3,読売静岡版11/26)
- 11/ 鈴木黄鶴《柿》《金魚》野木鳳堂、第4回泰東書

- 道院展入選。(東日静岡1,2版12/2,3)
- 12/1 田中屋百貨店新装開店。(東日静岡2版12/2)
- 12/20 静岡美術品展覧会於丸高百貨店(-1/5)。
(民友12/17,23,新報12/19,29)
/ 《日本武尊銅像》計画。(駿遠豆8-4,民友S7.5/10,新報S8.3/9,東日静岡1版S8.3/9)

昭和9年 1934

- 1/13 三上知治「犬の絵」展覧会於松坂屋(-15)。
(民友1/7,8,9,11,12,13,14,15)
- 1/13 杉本薫秋刀剣鑑定の会於静岡小梳神社(-14)。静岡新報社主催。(新報1/11)
- 1/16 新興美術展於大阪阪急百貨店(-23)。
曾根靖雅、新興美術賞受賞。(東日静岡2版1/21)
- 1/20 芹沢銈介蒐集絵馬展於松坂屋(-23)。(民友1/21)
/ 稲木春千里近況。(駿遠豆9-2)
- 1/27 第30回太平洋画会展於東京府美術館(-2/6)。
澤田政廣(会員)《秋山氏像》鈴木満《母子》二又川春子《伊東風景》
- 2/1 静岡市内名家珍藏日本画展覧会於松坂屋(-4)。
(読売静岡版2/1)
- 2/1 第3回六潮会展於東京日本橋三越(-5)。
中村岳陵《霜晨》《筍》《楡》
(塔影10-3,美之国10-3)
- 2/10 静岡高校冬期絵画展覧会於織平呉服店(-12)。
特別出品:野田半三11点、曾宮一念《波太風景》等。(民友2/11)
- 2/10 現代舞踏写真展覧会於松坂屋。
(民友2/11,12,13,14,15)
- 2/11 第21回光風会展於東京府美術館(-27)。
赤城泰舒(会員)《阿蘇噴煙》**《阿蘇外輪》石川欽一郎(会員)《平壤大同江の丘》《平壤大洞門》《平壤牡丹台》*《鎮南浦郊外》《京城の一隅》小泉癸巳男《豪徳寺》《中央气象台》(同会作品集*,駿遠豆9-4**,出品目録)
石川欽一郎《京城郊外》(駿遠豆9-4)
- 2/ 池上秀畝を迎え池新村村観梅会開催。
(民友2/15)
- 2/3 全国書道展覧会於松坂屋(-26)。松本芳翠揮毫。
(民友2/20)
- 2/25 第21回日本水彩画会展於東京府美術館(3/13)。

- 赤城泰舒《夏日海辺》《朝雲》長谷川曾一《伊豆須崎風景》《太田川風景》水野以文、山道栄助。(みづゑno.350)
- 2/ 青甲社二月研究会。秋野不矩《習作》(塔影10-4)
- 3/1 第18回院展試作展於東京府美術館(-14)。中村岳陵《澄汀》(塔影10-4,美之国10-4)
- 3/6 第2回東光会於東京府美術館(-13)。高島茂雄《黄色布のある静物》(駿遠豆9-2,読売静岡版3/8,新報3/8,民友3/11*)
- 3/9 石野雲嶺遺墨展於藤枝町小学校(-11)。(民友3/9)
- 3/10 鈴木黄鶴個人展覧会於浜松商品陳列館(-12)。(民友3/9)
- / 曾宮一念、二科会脱退。(美術新論9-5,みづゑno.350)
- 曾宮一念《あねもね》(美術新論9-7,みづゑno.354)
- 3/19 [平松實]ざざんぞ袖第3回展於東京銀座資生堂(-22)。
- 3/20 第4回独立展於東京府美術館(-4/12)。山道栄助《かいから》(出品目録)
- 3/ 鈴木黄鶴個人展於浜松市商品陳列所。(浜松市史)
- 4/2 《榛葉良男銅像》除幕式。(読売静岡版4/3,民友4/3)
- 4/3 第2回旺玄社展於東京府美術館(-13)。
- 4/22 第9回国画会展於東京府美術館(-5/9)。柏木俊一《白浜村》(美術新論9-5)
- 小川龍彦奨学賞受賞、《富士川付近》(民友5/6)
- 杉本英一入選。(駿遠豆9-5)
- 山村誠入選。(駿遠豆9-5,読売静岡版4/27)
- 小川龍彦奨学賞受賞、会友推挙。栗山茂入選。(東日静岡1,2版5/6,新報4/25,民友5/6,駿遠豆9-5)
- 東克己《八景坂夜景》柏木俊一(会員)《初夏の高根山》《高根山》《海と畑と森》《白浜村》《南豆初秋》洪川駿二《鶴の森風景》《立木》《初冬風景》杉本英一《海と村》山村誠《ながし》《海と蜜柑畑》《ばら》《三十坂春暖》小川龍彦《富士川付近》《兵営》栗山茂《久能苺畑》《給水場階段》鈴木至朗《片側帯》《蓄音機カバー》《横壁掛》《どてら地》芹澤銈介(会員)出品数点。(みづゑno.352,出品目録)
- 4/ 朝倉文夫《空閑少佐胸像》を未亡人に贈呈。(新報4/12)
- 4/20 赫土社洋画展覧会於清水材木商同業組合(-23)。(民友4/15)
- 4/22 第12回春陽会展於東京府美術館(-5/13)。栗田雄(会友)《うすれ日の静浦》(美術新論9-5,駿遠豆16-6)
- 原田和周《島の村》(駿遠豆9-5)
- 小栗哲郎《明星山》会友推挙。(新報4/30)
- 茨木猪之吉《陽春の丘》小栗哲郎《晩秋の山》《富士川》《興津の海》《夕陽》《明星山》栗田雄(会友)《うすれ日の静浦》《静浦》《曇り日の入江》《うすくもり》小泉癸巳男《春の動物園》《墨水風景》曾根靖雅《浅茅原》高梨正《口野海岸》原田和周《潮干ノ瀬戸》《島の村》(みづゑno.352,出品目録)
- 5/1 大礼記念京都美術館美術展覧会於大礼記念京都美術館(-25)。
- 秋野不矩《春閑》近藤浩一路《西目村新雪》赤城泰舒《舞妓》石川欽一郎《漁村台湾新竹州の海浜》柏木俊一《川奈富士》勝間田武夫《ソファによる裸女》栗田雄《網代の海》曾宮一念《ざぼん》杉本宗一《婦人肖像》(出品目録)
- 5/19 第6回第一美術協会展於東京府美術館(-6/5)。栗原忠二《緑陰水浴》《リッチモンド・パーク(ロンドン)》《ピクニック》(駿遠豆10-8,美之国10-7)
- 5/16 川村清雄逝去。(中央美術no.12,美之国10-7)
- 5/19 黒耀会第6回展於田中屋(-22)。松井昇遺作展示。(新報5/22,民友4/8)
- 5/20 武石弘三郎《岩田立山像》除幕式。(東日静岡2版5/15,民友1/11)
- 5/26 榛沢春花個人展覧会於松坂屋(-29)。(読売静岡版4/22)
- 5/27 《長澤重兵衛銅像》除幕式。(民友5/8)
- / 小林猷治郎、安房美術協会主催安房風景東京紹介展実行委員となる。(みづゑno.352)
- / 川合改次郎《つりばし》(駿遠豆9-6)
- 6/ 黄陽社展。松島一郎来静。(民友6/3)
- 6/3 田中柏陰、静岡市西草深にて逝去。(民友6/4)
- 6/10 賤機焼座談会於静岡商工会議所。(民友6/9)
- 6/14 《伊藤台巖寿像》除幕式於鉄舟寺。(東日静岡1,2版6/13,15)
- 岳南展。柏木俊一、東克己、小松憲治、高梨正《丘と岬》他。(アトリエ11-8,みづゑno.354)
- 6/17 洋画六月展於東京銀座紀伊国屋画廊(-20)
- 曾宮一念。(みづゑno.354)
- 7/9 《吉田松陰像》起工式於下田。(駿遠豆9-8,12-4)
- 《吉田松陰像》(新報S9.2/18,7/11,S10.12/5,民友S12.2/24)
- 7/12 新田藤太郎《松浦五兵衛銅像》除幕式。(駿遠豆8-8,9-6,新報S6.6/10,7/10,S7.4/27,12/6,S9.2/18、民友S7.11/27,S8.7/14,読売静岡版S8.7/5,S9.7/14*,東日静岡1版7/14*)
- 7/13 沖六鳳、泰東書道院審査員に就任。(新報7/14,駿遠豆9-8)
- 7/ 佐野繁次郎、浜松奥山方広寺に滞在。(駿遠豆9-7)
- 8/5 澤田政廣《仁田大八郎寿像》除幕式。(駿遠豆8-2*,9-5,9-8,東日静岡1,2版8/5*,新報S8.10/15,7/22*,読売静岡AB版8/5*)
- 8/19 沖六鳳、満州視察(-9/15)。(新報8/18,9/16,駿遠豆9-9)
- 8/19 岳南刀剣鑑賞会於沼津商工会議所。(民友8/25)
- 8/ 白鳥舗吉《初夏》第8回構造社展入選。(民友8/28)
- 9/1 水月院再建高僧墨蹟展於松坂屋。(民友8/28)
- 9/1 第6回青龍社展於東京府美術館(-28)。川端龍子《修善寺風景》(みづゑno.350)
- 三好光志《裸婦》新入選。(塔影10-10,美之国10-9,出品目録)
- 9/3 第21回院展於東京府美術館(-10/4)。関華明《犬》(駿遠豆9-10)
- 近藤浩一路(同人)《水田六月》《謝海流燈》《日田月明》《廣澤雨餘》関華明《犬》中村岳陵(同人)《砂丘》藤井白映《伊豆小景(其一・其二)》杉本宗一《裸女習作》(塔影10-10,美之国10-10、アトリエ11-10,出品目録)
- 9/3 第21回二科会展於東京府美術館(-10/4)。滝沢清、入選。(民友9/9,30)
- 赤城泰舒《雨海を渡る》(駿遠豆9-12,みづゑno.356)
- 赤城泰舒《雨海を渡る》滝沢清《漁港スケッチ》永井武夫《レースを配せる静物》(出品目録)
- 9/8 静岡写友会写真サロン於松坂屋(-12)。(民友9/8)
- 9/15 飛白社・緑匠会版画講習会於城内東小学校。講師・平塚運一。(民友9/9,新報9/12)
- 9/15 池部鈞個展於松坂屋(-19)。(民友9/12,13,14,15)
- 9/ 中川雄太郎《新静岡風景》静岡新報連載。(新報9/21,28,10/5,12,26,11/29,16,S10.2/8,15,23,3/1,22)
- 9/22 童土社創作版画展覧会第6回展於田中屋(-25)。(目録)
- 9/ 石川欽一郎個展於東京銀座服部時計店。(中央美術no.16,駿遠豆9-10)
- 10/16 第15回帝展於東京府美術館(-11/20)。澤田政廣《白光》(駿遠豆9-10)
- 山口益、和田金剛、笠間繁継、湯山青涯、入選。(駿遠豆9-11)
- 鈴木国策《益荒男》****山口益《黎明》*水野欣三郎、太田重範《天政》****和田金剛《花弦》**細井繁誠《或る日の写生》***入選。(読売静岡版10/11,東日静岡2版10/10,11/29,民友10/10,11*12**,13***,14,11/26****,新報10/12*)
- 湯山青崖、入選。(読売静岡A版10/13,民友10/13,駿遠9-11)
- 秋野不矩《ゆの後》井上恒也《みだれたつ》花村晃《あづき》一木隲二郎《少女像》勝間田武夫《二人姉妹》細井繁誠《或る日の写生》太田重範《天の政》澤田政廣《白光》鈴木国策《益荒男》長澤幸夫《ゴルフ》水野欣三郎《若い女》山口益《黎明》和田金剛《花弦》二橋美衡《黒味銅筒形草花文花瓶》湯山青崖《緑釉細口花瓶》笠間繁継(美術新論9-11,出品目録)
- 10/ 矢尾太華来静し揮毫。(新報10/5)
- 10/ 二橋美衡の富士の置物、皇太子誕生奉祝献上の手続。(東日静岡1,2版10/22)
- 10/14 静岡師範学校展覧会(-17)。(民友10/12,新報10/16)
- 10/15 小泉松琴、鑑定並びに座談会於顕光院(-17)。(新報10/16)
- 10/22 中村與資平《静岡市庁舎》落成式。(民友S6.12/18,S7.10/8,S9.10/22,新報S7.12/4)
- 11/1 白隠禪師遺墨展於葵文庫(-7)。(民友10/8)
- 11/1 県下全商業校窓裝飾競技於松坂屋(-)。 (民友10/24-31,11/3,4,5)

- 11/13 県下教員作品展覧会第6回展於県教育会館・松坂屋(-18)。審査員:南薫造他。(民友11/6,10,13,14,15,16,17,新報11/14,15)
- 11/8 静岡美術協会設立発会式於静岡商工会議所。和田英作、石川欽一郎、北蓮造、澤田政廣他来静。(駿遠豆9-10,12,新報11/17,24,26,民友11/26,読売静岡AB版11/18)
- 11/20 白隠遺墨展於龍澤寺。(民友11/10)
- 11/ 太田重範《天政》静岡市役所へ寄贈される。(東日静岡2版10/10)
- 12/19 書画骨董展観即売会於静岡高砂(-28)。(民友12/20)
- 12/ 青甲社十二月研究会。秋野不矩《かまきり》(塔影11-2)
- / 《乃木希典像》計画。(東日静岡2版8/19,駿遠豆9-9)
- / 中村岳陵《風の図》《筍》献上される。(塔影10-7)

昭和10年 1935

- 1/12 第12回白日会展於東京府美術館(-25)。望月清作《夏》(出品目録)
- 1/19 中村與資平《静岡県庁》設計完成。(読売静岡AB版1/20)
- 1/23 第22回日本水彩画会展於東京府美術館(-2/8)。石川欽一郎《漁港》《信濃大町》《竹柱の家》
- 1/24 東京美術協会・静岡新報社主催日本画展於県教育会館(-25)。(新報1/24,25,26)
- 1/ 『曾宮一念作品集1』刊行。
/ 岡田紅陽、伊豆、富士の撮影(-5)。(新報1/21)
- 2/1 第31回太平洋画会於東京府美術館(-8)。澤田政廣《楊妃》鈴木満《女》《娘と猫》《婦人像》《若い娘》(出品目録)
- 2/1 第4回六潮会展於東京日本橋三越(-4)。中村岳陵《春朝》《寒牡丹》(塔影11-3,美之園11-3,アトリエ12-3)
- 2/3 第3回旺玄会展於東京府美術館(-15)。小林猷治郎《湯》(新報2/15,東日静岡2版2/9)
- 2/7 矢野陶陶個人陶展於松坂屋(-10)。(新報2/7)
- 2/7 洋画二月会展於東京銀座三味堂画廊(-11)。曾宮一念《静物》(みづゑno.361)
- 2/11 第22回光風会展於東京府美術館(-27)。

- 赤城泰舒(会員)《京都清水》《早春》《アマリス》石川欽一郎(会員)《宇治の郊外》《南国の農村》《京都巨椋の池》《内海の港》清水柳太《或る日の厨房》石川欽一郎、光風会評議員となる。(同会作品集)
- 2/20 第3回東光会展於東京府美術館(-3/5)。高島茂雄《伊豆長岡の富士》、吉野不二太郎、松島達太郎、入選。(新報2/22,民友2/24,*東日静岡2版2/22*,23,読売静岡版2/22*)
- 大川武司、東光賞受賞。(美術年鑑S11)
- 2/23 小泉癸巳男創作版画展於東京日本橋高島屋(-27)。(美術年鑑S11,みづゑno.362)
- 2/ 『曾宮一念作品集2』刊行。
- 3/6 第5回独立展於東京府美術館(-25)。曾宮一念《ざぼん》《種子静物》*山道栄助《猿ヶ京風景》(美術年鑑S11*,アトリエ12-3,4,美術新論11-4,みづゑno.362,363,出品目録)
- 3/7 第19回院展試作展於東京府美術館(-24)。中村岳陵《竹聲》(美術年鑑S11, アトリエ12-4,塔影11-4,美之園11-4)
- 3/10 県下小学校児童懸賞競書展覧会於県教育会館(-12)。(新報3/5,12)
- 3/15 日本画会於田中屋(-18)。(民友3/21,東日静岡2版3/15)
- 3/16 静岡輸出工芸競技作品展覧会於静岡市商工奨励館(-22)。(新報2/9,3/16)
- 3/31 東京府美術館十周年記念現代総合美術展覧会(-4/1)。小栗哲郎、山村誠、出品。(民友4/5, 美術年鑑S11)
- 近藤浩一路《奥州街道》中村岳陵《牡鹿鳴く》石川欽一郎《台湾の田舎》赤城泰舒《高原の青沼》小栗哲郎《菊川》曾宮一念《いはの群》、栗田雄《池袋風景》柏木俊一《川奈富士と道》山村誠《巖頭心身》澤田政廣《華炎》稲木春千里《鉄刀木壺》二橋美衡《彫金赤銅獅子文丸籠》芹澤銈介《紺地蔬果文壁掛》熊谷重太郎《メカニカルコンポジション》(出品目録)
- 3/ 土佐光一、静岡中学を退職。
- 4/1 登龍社第1回洋画展於浜松笠井屋(-5)。細井繁誠に師事する画家による。(読売静岡版4/2)

- 4/20 朝倉文夫、《江原素六銅像》の為、視察。(民友S9.12/15,S10.4/14,新報2/17)
- 4/23 静岡県美術協会第1回幹事会於県教育会館。(民友4/24,新報4/25)
- 4/26 丹紅会画会於田中屋(29)。浅間神社修築のため滞在中の丹紅会同人、片岡無音、菊池甲冠等による。(東日静岡版4/28)
- 4/28 第10回国画会展於東京府美術館(-5/17)。柏木俊一《小淵沢》(美術年鑑S11,みづゑno.364,アトリエ12-6,美術新論10-6)
- 増田匡彦《井屋店頭》(民友4/28,5/18*)
- 鈴木至郎入選。(民友5/4,新報5/4)
- 山村誠入選。(読売静岡版5/19)
- 松本保一、杉本英一、増田匡彦、二又川春子入選。(東日静岡版4/28)
- 旭五良、生田正雄、菅藤霞仙、杉本英一、二又川春子、村上多福子、松本保一、杉本英一入選。(民友4/28,5/18,新報4/28,読売静岡版4/28)
- 旭五良《植物園》生田正雄《春日》《山》井上重生《松野村》柏木俊一(会員)《高根山》《砂丘》《てんぐさ》《伊豆長岡》《富士》《小淵沢》《南豆白浜》渋川駿二《窓外》《雨》《薔薇》《木の間》菅藤霞仙《田園風景》《神戸風景》《家》杉本英一《風景》鈴木長久《ガード》二又川春子《風景》増田匡彦《井屋店頭》《芋一鉢》松本保一《早春の富士》村上たね子《人形》山村誠《引佐細江》《富嶽》《駿河湾》小川龍彦《郊外秋景》《養魚場》栗山茂《熱海の春》《駿府城趾》中川雄太郎《百姓家のおもて》《画房小憩》鈴木至朗《木綿テーブル掛》《木綿テーブルセンター》芹澤銈介《座布団地》《織機図染色屏風》《襖張型染》《襖張型染》《藍染カーテン》《帯側(袖)》《帯側(芭蕉布)》《卓上掛》(出品目録)
- 4/28 第13回春陽会展於東京府美術館(-5/20)
- 栗田雄《塩久津風景1》(美術年鑑S11,みづゑno.364,アトリエ12-6)
- 曾根靖雅、入選。(駿遠豆10-6)
- 茨木猪之吉《樹間の春》小栗哲郎(会友)《曇り日》《天子ヶ岳》《奥武蔵》《名栗川》*《山中夕陽》栗田雄(会友)《静浦》《雨後》《塩久津風景1》《塩久津

- 風景2》《口野風景》**島田四郎《山村の一角》曾根靖雅《社の裏》《大仏殿》原田和周(会友)《鮎婦の秋》《村の一廓》《求麻川の秋》(駿遠豆10-5*,12-3**,出品目録)
- / 山道栄助、杉並区東田町2-171へ転居。(みづゑno.363)
- 5/1 高島茂雄写真と洋画第3回個人展覧会於田中屋(-5)。(目録,民友4/28,5/1,4,新報5/1,読売静岡版5/1)
- 5/4 鳥羽清一、帝国発明協会より表彰される。(民友4/24,5/1,3)
- 5/ 山本紫雲、第98回日本美術協会展入選。(民友5/11)
- / 谷臨川《吉野屋酒楽像》発見される。(民友5/15)
- 5/15 黄陽社洋画展於田中屋(-19)。中川雄太郎《百姓家のおもて》滝澤清《盛春》*増田増田匡彦《井屋店頭》** (民友5/11,18,新報5/16*,18**東日静岡2版5/16,静岡1,2版5/19*)
- 5/ 松島一郎来静。(新報5/16)
- (民友5/11,18,新報5/16,東日静岡2版5/16,静岡1,2版5/19)
- 5/22 日本木彫会展於大阪朝日会館(-30)。澤田政廣《詩友》《微風》《毘沙門天》(美術年鑑S11)
- 5/24 上村書剣堂文庫所蔵浮世絵展覧会於葵文庫(-28)。(目録,民友5/26)
- 5/26 黒耀会展覧会第7回展於松坂屋(-29)。(目録,民友5/9,新報5/29)
- 5/ 内海高鳳、三保園に滞在(-7/)。(読売静岡B版6/28)
- / 赤城泰舒水絵画会。(みづゑno.364)
- 6/5 第7回第一美術協会展於東京府美術館(19)。近藤新平《別荘のある風景》展入選。(民友6/15)
- 栗原忠二《音楽》《海の平和》《北英の牧場》《緑蔭》《風景(英国)》《森の朝》(みづゑno.365)
- 栗原忠二《水浴》(駿遠豆10-8)
- 6/10 寺田洞仙遺墨展於相良浄心寺。(読売静岡A版5/30)
- / 平尾花笠、静陵書道院設立。(民友6/20)
- 6/22 刀剣展覧鑑定会於静岡新報社(-23)。(新報6/19,22,23,24)
- 7/1 中川博汀作品頒布後援会揮毫於静岡市勝又医院

- (-20)。(民友7/7)
- 7/5 比田井天来揮毫於静岡市井宮瑞龍寺(-6)。(新報6/30)
- / 笠間繁継近況。(駿遠豆10-8,11,13-1)
- 8/3 日本水彩画会主催水彩画講習会於館山寺(-9)。(新報8/9)
- 8/10 笠井竹亭百画抽籤会於三島函陽荘。(新報7/27)
- 8/15 春陽会夏季洋画講習会於清水市不二見小学校講堂(-21)。講師:石井鶴三、木村莊八、中川一政、栗田雄、小栗哲郎、三澤佐助、松岡圭三郎。(駿遠豆10-9,民友7/31,8/15)
- 8/27 静岡小学児童自由画展覧会於田中屋(-9/5)。審査員:石井鶴三、中川一政、木村莊八。(東日静岡2版8/28,29,31)
- / 石川欽一郎、世田谷区経堂898に転居。(みづゑno.367)
- 9/1 清水光影社第3回習作展於松坂屋(-4)。(民友9/2)
- 9/1 第7回青龍社展於東京府美術館(-28)。三好光志《裸婦と孔雀》(民友9/9,出品目録)
- 9/3 第22回二科会展於東京府美術館(-10/4)。渡辺西二《鳥と机》入選。(駿遠豆10-10,新報9/1,民友8/31,読売静岡AB版9/1*)
- 永井武夫《コンクリート管と岬》渡辺西二《鳥と机》(出品目録)
- 9/ 松浦愛吉《聖観音像》《養老孝子》コンクリート像完成。(読売静岡版9/13)
- 9/ 緑匠会児童手工芸製作品展覧会於田中屋。(新報9/8)
- 9/7 第22回院展於東京府美術館(-10/3)。近藤浩一路(同人)《御水取八題》中村岳陵(同人)《爽秋》杉本宗一《裸女坐像》(美術年鑑S11,塔影11-10,アトリエ12-10,出品目録)
- 9/11 静岡県美術協会小品展於松坂屋(-15)。(駿遠豆10-3,民友9/10,13,新報9/10)
- 9/21 近県男子中等学校絵画展於田中屋(-25)。(東日静岡1,2版9/22)
- 9/26 童土社創作版画展第7回展於田中屋(-29)。(新報9/29)
- 9/28 平井顕斎他遺墨展覧会(-29)杉江徳次郎主宰。(新報9/11,民友8/27)
- 9/ 梶市之助絵画講話教育普及会於田方郡下各小学校。(新報10/13)
- 9/ 鈴木黄鶴逝去。(浜松市史)
- 9/ 清水柳太帝都水のスケッチ個人展覧会於白木屋。《帝都の水清洲橋》《日比谷交叉場遠望》《梅橋丸》他。(駿遠豆11-6,8,9,12-2)
- / 赤城泰舒水絵画会。(駿遠豆10-10,11)
- / 赤城泰舒《阿蘇噴煙》(駿遠豆10-9)
- / 澤田政廣近況。(駿遠豆10-10)
- 10/1 小栗哲郎第1回個人展覧会於田中屋(-6)。(目録,民友10/2,6,新報10/1,4,東日静岡版10/3)
- 10/7 独立美術協会秋季展於東京銀座青樹社(-13)。曾宮一念《あまりりす》《かく》(みづゑno.369)
- 10/7 曾宮一念近作個展於東京資生堂ギャラリー(-11)。《海》*(美術年鑑S11*,アトリエ12-11,中央美術no.28,美之国11-11,みづゑno.369,美術新論10-11,)
- / 曾宮一念《牡丹》(アトリエ12-11)
- 10/15 尾崎元次郎静岡市長、初登庁で、中島東洋の裸婦彫像を嫌う。(東日静岡版10/15)
- 10/15 第二部会展覧会於東京府美術館(-11/10)。青木新作、榛葉嘉一郎、入選。(東日静岡版10/15,新報10/14)
- 小林猷治郎《宿場》(新報10/15)
- 青木新作《浅春》榛葉嘉一郎《海辺漁夫》小林猷治郎《宿場(富士見)》(出品目録)
- 10/16 第4回日本版画協会展於大阪中之島朝日会館(-19)、於東京府美術館(11/13-24)。小川龍彦《雪の三光坂》《北伊豆の秋》栗山茂《静物A》《静物B》《駿河城跡》小泉癸巳男(会員)《賃仕事》《少女弾琴之図》《木場問屋町》《御台場風景》《両国川開き》《星降りの松》小林清親参考出品。(出品目録)
- 10/27 4回展東光会第於東京府美術館(-11/18)。高島茂雄《浜名湖館山寺》(民友11/3,新報10/29,東日静岡版10/29)
- 大川武司無鑑査出品。(美術年鑑S11)
- 勝間田武夫、二重作龍夫他。(みづゑno.370)
- 10/ ポール・ジャックレー、静岡市北安東に滞在。(東日静岡版10/24)
- 10/25 県下教員作品展覧会第7回展於県教育会館・田中屋(-30)。審査員:南薫造、比田井天来等。(民友10/25,新報10/25,27,東日静岡版9/27,10/24,29,目録)
- 11/1 伊豆先賢遺墨展於県立葵文庫(-7)。(民友10/5)
- 11/3 県下商業学校ショーウインドウ装飾決選競技会於松坂屋。(民友11/3)
- 11/3 静岡市公会堂落成式。(民友11/4,新報10/6,12,27,11/1,2,3,4)
- 11/3 茨木猪之吉山岳画個展於東京八咫家(-5)。(美術年鑑S11)
- 11/8 五人会洋画展於浜松金井呉服店(-10)。(民友11/5)
- 11/ 《市川紀元二像》碑文の誤り、発見される。(東日遠州版11/12,読売静岡版11/12)
- 11/10 日本平ハイキング絵画展覧会於田中屋(-14)。(東日静岡版11/7)
- 11/13 構造社展於東京府美術館(-24)。倉本七郎《静岡風景》(みづゑno.371)
- 11/20 長尾一平、ラジオで「明治初年に於ける静岡県の洋画界」講演。(民友11/20)
- 11/20 静岡県美術協会展覧会第1回展於静岡市公会堂(-24)。審査員:中村岳陵、石川欽一郎、澤田政廣、芹澤銈介他。和田英作来静。(目録、中央美術no.30、民友11/20,21,22,25,新報10/26,11/20,22,23,東日静岡版11/21,22,23,24,東日遠州版11/20,21,23,24,読売静岡版11/14,21,23,読売遠州版11/14)
- 11/21 第1回大東会絵画展於東京府美術館(-29)。小林三男、松下忠雄、二橋豊子、田村貫一、入選。(民友11/17,新報11/22)
- 11/21 二又川春子、山口薫と結婚。(民友S11.7/13)
- 11/27 栗原忠二洋画個展於大阪淀屋橋三角堂(-29)。(美術年鑑S11)
- / 栗原忠二《リッチモンドパーク ロンドン》(駿遠豆10-12)
- 11/ 花盛秀鳳《秋気集南瀾》泰東書道院第6回展入選。(東日静岡版11/29)
- 11/ 奈良橋倉三《不動明王尊像》完成。(東日静岡版11/29)
- 12/ 岡田紅陽、富士山撮影。(民友11/22)
- 12/1 三越日本画展於東京日本橋三越(-8)。中村岳陵《渚紋》(美術年鑑S11)
- 12/1 静岡美術倶楽部主催名宝展於静岡市公会堂(-3)。(新報12/1,民友11/30)
- 12/1 曾宮一念洋画個展於京都朝日会館(-3)。(美術年鑑S11,美術新論10-11)
- / 曾宮一念《海辺のむら》(みづゑno.371)
- 12/2 故牧逸馬遺愛品売立会於静岡市公会堂(-5)。(新報12/1)
- 12/2 吉田松陰像建設協議会於下田役場。(新報12/5)
- 12/13 近藤浩一路新作展於大阪美術新論社画廊(-18)。《陽光》《修善寺春雨》《雪旦》《中仙道》(塔影12-1)
- 《越路山春》《日田天地》(美之国12-1,美術評論5-1)
- 《富岳》《陽光》《山田梅雨》(美術年鑑S11)
- 12/21 石井柏亭他数名、清水市に25日まで滞在。(民友12/23)静岡船山翠生園に滞在し、27日帰京。(新報12/29)
- / 石井柏亭《安倍川の富士》(中央美術復興no.31,美術新論11-3)
- 12/22 天盛光彦陶器頒布展覧会於沼津商工会議所(-23)。(民友12/21)

表1 妙心寺僧着讃の武将像 ○婦人・童子像等含む ○永正期～寛文期とする 小林明「紙本着色今川氏真・同婦人像について」の表2に加筆・修正

Table with 5 columns: 世代, 僧侶名, 像主名, 年紀, 所蔵・出典. Lists various figures and their associated temples and dates.

城昌茂が慶長十二年(一六〇七)に出した駿府代官井出正次宛て書状の正文が大慈悲院に伝わっている。文中の長谷七左制札は、「大慈悲院書上」中に写が載っている(注12)。これによれば慶長八年(一六〇三)四月五日付、代官長谷川七左衛門による寺中山林伐採禁止の制札が無判であつたらしいが、右筆も間違いないので継目の制札を出してほしいと伝えている。大慈悲院の旦那であつた城昌茂が駿府代官の井出正次に執り成しを依頼した文書である。

□ 景茂肖像画について

本肖像画が描かれた年を確定できないが、景茂夫人像とともに描かれたとすれば、景茂十三回忌に合わせて制作され、法要の掛真に使用したと考えられる。本資料と同様な法体の武士像は、神奈川県早雲寺蔵の北条早雲像を始めとして、戦国時代から江戸時代初期にかけて多くが制作されている。その中でも、上置に胡座して手を前で握る体勢は武士像には多く見られる形である(注13)。

武田家に関する肖像画は当主の信虎・信玄・勝頼、親族衆の穴山信友・信君及び夫人達の画像が知られているが、寄親クラスの家臣の肖像画はいまだ知られていない。また、表1にあるように、豊臣期や徳川期の妙心寺派僧侶の着讃をもつ肖像画の多くが大名家クラスの人物であることから、昌茂が鉄山の着讃を依頼できたのは、自身が臨済宗僧侶で鉄山の会下にあつたことが理由である。なお、鉄山宗純が着讃した肖像画には武田信玄・井伊直政・山岡景友・山名豊国・中村一氏・山内豊が知られている(注14)。このうち、年期の記されていない信玄と井伊直政肖像画を除いて、慶長四年(一五九九)の城昌茂北堂像が最も古く、慶長十三年(一六〇八)の山内一豊像が最も後出である。城景茂画像も十五世紀末から十七世紀前半までに制作された武家肖像画の中でも法体武士像の範疇に含まれるものである。

なお、城和泉守といえは、紅白梅図屏風(現MOA美術館所蔵)とともに津軽家旧蔵の名物「城和泉正宗」(現東京国立博物館蔵)が思い浮かぶ。同刀には「城和泉守

井志摩様 人々御中

所持 正宗磨上 本阿(花押)と磨上銘があり、城昌茂もしくは景茂が所持していた。本図に太刀が描かれていることもこれによるものであるだろうか、興味もたれるところである。

本肖像画の紹介にあたり、大慈悲院住職の野原史全氏に調査の機会をいただき、同寺の歴史についてもご教授いただきました。紙面をお借りして御礼申し上げます。また、久能山東照宮宝物館の小林明学芸員には妙心寺派僧侶の着讃肖像画についてご教示いただきました、お礼申し上げます。

注

- 1 臨済寺所蔵「仏眼禪師語録」中、及び臨済寺史研究会編「大龍山臨済寺の歴史」平成十二年
2 「仏眼禪師語録」「静岡県史」資料編8 中世四、二〇一四
3 甲斐叢書「甲陽軍鑑」坤 第一書房 二二八ページ
4 同3、二四八ページ
5 同3、二九〇ページ
6 「静岡県史」資料編8 中世四、二〇一四
7 桑原藤泰「駿河記」三四五ページ 臨川書店復刻 昭和四十九年
8 阿部正信編「駿国雑志」三、六八七ページ 吉見書店 昭和四十七年
9 元龜二年三月四日 信玄判物、「戦国遺文」武田氏編三、一六六四 平成十五年
10 「戦国遺文」武田氏編四、二八四三
11 砂岩製で現在高(一〇四cm)下から一段の塔身と基礎部分は他の宝篋印塔の部材と変わっている。当地域では十五世紀後半以降に多くみられる砂岩製だが、同石材の宝篋印塔の中では大型である。そのため、小鹿範慶の墓塔の可能性も考えられる。
12 「静岡市史」資料編 古代中世史料 七六二ページ
13 守屋正彦「近世武家肖像画の研究」勉誠出版社 平成十四年
14 小林明「紙本着色今川氏真同婦人像について」『静岡県史研究』9号の表2「妙心寺僧著讃の武将像」

あることから昌茂の母を描いた像であり、景茂像と同様に昌茂が施主となり描かれた。なお、景茂像の制作年は記されていないが、景茂を天正十五年（一五八七）没とすれば、慶長四年（一五九九）は十三回忌にあたり（仲呂は四月）、景茂の法要に際して夫妻像が作成されたことも考えられる。

着讀した鉄山宗鈍（一五三二～一六七）は甲斐の恵林寺の住持で臨濟宗妙心寺派の靈雲派の僧侶であり、駿河の臨濟寺でも元龜三年（一五七二）から住持となっている（二世太源崇孚―三世東谷宋呆―四世鉄山宗鈍。永祿十二年（一五六九）の武田信玄の駿河進攻時には、鉄山宗鈍は修復した今川館に籠もる今川家臣への調停を行った。また、天正十七年（一五八九）三月二日には信玄の二七回忌の法要を、同じく臨濟寺で執り行っている（注2）。

□ 城氏について

『寛永諸家系図伝』に城景茂は以下のように記されている。

次郎右衛門 和泉守 意庵 生国越後。

長尾景虎につかへ、團扇をあづけらる。今にをいて所持す。このとき景茂とし二十五。はじめは玉虫たりといへども、すでに城氏の宗領断絶たるにより、元龜三年、武田晴信、景茂をして城氏を継がしめ、自筆の書を授。今にをいてこれあり。甲州没落の以後、天正十二年、大権現越後国古志本領たるにより景茂に是をたまふ。御朱印ならびに御書今にをいて所持す。長久手御陣に大権現にしたがひたてまつる。同十五年、駿府にをひて死す。歳六十六。法名道逸。

また、昌茂も以下のように記載されている。

城織部佑 和泉守

生国同前。武田晴信勝頼につかふ。天正十二年、父景茂とおなじく御朱印を拝領して、大権現を拝したてまつる。長久手の御陣に供奉。慶長五年、関原御陣に供奉。同十九年、元和元年、大坂両度御陣に大権現にしたがひたてまつる。寛永三年、信州にをひて死す。とし七十六。法名宗仲。

武田家内での二人の行動は不明な部分が多いが、『武徳編年集成』卷之十八には「（天正七年九月）廿日、勝頼ハ典厩信豊・高坂源五郎并輕率頭城織部景茂入道意庵・其子織部昌茂等三千を沼津に止め、僅か二万二千余を率て 神君に向ハんとす」

れば太源宗字に連なる鉄山宗鈍の同門もしくは会下である。なお、『仏眼禪師語録』卷下には鉄山が授与した道号が記されていて、天正十八年十月三日の記録に「南圭号」を城氏に与えたとされている。また、城昌茂の法諱「宗忠」は「宗鈍」に通じることからも城昌茂は鉄山宗鈍の法嗣と考えられる。そして、同『語録』によれば、天正十七年三月二日に駿河の臨濟寺で信玄の十七回忌法要が営まれている（注6）。この法要の施主は「幕下孝臣昌茂」となっているが、以上のことから考えて施主は城昌茂のことであり、これらの関係から景茂画像に鉄山の着讀を願ったと考えられる。

なお、景茂の妻「花庭理芳大姉」の実名や生没年等は不明、『寛政重修諸家譜』等では某となっていて、出自も不明である。

□ 円通山大慈悲院について

円通山大慈悲院は、『駿河記』に以下のように載っている。

○ 円通山大慈悲院 洞家 大正寺末 法幢地 御朱符寺領四石二斗七升二合 本尊 観音（注7）

また、『駿国雑志』ではやや詳しく記されている。

有度郡池田村にあり円通山と号す。曹洞。同郡大谷村大正寺末。

旧真言宗なり。其時の寺地は今五輪平と云。御朱印寺領四石二斗七升或は七合。開山大正寺二世寂照禪師。開基城和泉守伊庵。今川系図範忠の三男小鹿孫九郎範慶の菩提寺なり。小鹿殿又大慈悲院殿と号す。

寂照宗祈和尚天文五年丙申二月寂 中興開基悟庵居士慶長七年歿 俗称和泉守某 慶長八年四月十五日長谷川七太郎証文一通寺藏（注8）

大慈悲院は、古くは真言宗であったらしいが当時の寺名は伝わらない。後に今川範忠の三男・小鹿範慶の菩提寺となり、範慶の法名から大慈悲院と名付けられた。大慈悲院のある有度山西麓は現在でも小鹿の地名が遺るように今川支族の小鹿氏の本拠であった。小鹿氏は今川義忠の死後に家督を代行した範満が義忠の子の氏親と伊勢早瑞らに討たれ、小鹿氏の衰退とともに菩提寺も荒廃していったと思われる。その後、武田氏が駿河を領有した時期の元龜二年（一五七二）三月に孕石主水佑に宛行われた所領の中に「拾壹貫六百四十五文 池田郷并大慈悲院共二」とあり、大慈悲院、すな

とある。また、『甲陽軍鑑』の品第五十五では昌茂のことを「旗本足輕大将、城意庵子息、城織部ノ助を、御使に越給ふ」（注3）と記している。また、品第五十七では「駿州田中へ、信州侍大将、あした各々へさし越給へと、其上にても、勝頼公御人数は、二万余りにて、信州諏訪において、種々評議ありといへ共、御運つき、終に不調候、足輕大将城ノ意庵子息織部介、其年三十二歳なれども、弓矢に利発なる故、合戦の体、勝頼公に申上る」（注4）、品五十九では「井伊兵部同心組之覚」に「城伊庵十騎足輕三〇人息織部は横田甚五郎ごとく旗本に罷有」（注5）とある。

また、『寛政重修諸家譜』では徳川家に仕官後の事柄が詳しく載っている。天正十年父景茂と同じく東照宮に仕えたてまつり、十二年長久手の役に供奉し、後武蔵国忍熊谷にをいて采地七千石を賜ふ。慶長五年関原陣には昌茂親子西尾豊後守光教、水野六左衛門勝成、同宗十郎忠胤等とともに、勝山の御陣營と大垣城の間に陣してこれを守る。九月十三日父子連名の御書をくだされ、後緋威の鎧房宗作六十二間妙見星の兜、及び御具足下の御服をたまふ。のち奏者番を勤む。大坂両度の役には、仰せによりて松平武蔵守利隆が手の軍鑑たり。元和元年凱旋のち、昌茂軍令を犯せしを咎められ改易せられ、近江国石山寺に屏居し、寛永三年赦免ありて江戸に赴くの時、七月二日信濃国にをいて死す。

年七十六。法名宗仲。武蔵国熊谷東漸寺に葬る。妻は長尾是言義景が女

昌茂の菩提寺は埼玉県熊谷市の臨濟宗・法雲山東漸寺で、寺伝では南圭宗忠居士（昌茂の戒名が開基となつている。『寛永諸家系図伝』では法名を宗仲としているが、正しくは宗忠である。

一方、昌茂の妻は、上杉謙信の父・為景の兄で長尾房景の子・政景（上田長尾氏）を父とする。母は府内長尾氏の為景の娘・仙洞院。したがって昌茂の妻の父・長尾政景と上杉謙信は従兄弟にあたる。また、昌茂の妻は、謙信没後に御館の乱を制して上杉の名跡を継いだ上杉景勝とは兄妹もしくは姉弟にあたる。一説には、昌茂の妻は御館の乱の時に後北条氏に人質となつたといわれる。

先に記したように、城昌茂の菩提寺は埼玉県熊谷市の法雲山東漸寺で昌茂は同寺の開山にもなつている。同寺の資料によれば、昌茂の法名は南圭宗忠居士、僧名は由南紹能といひ、臨濟宗妙心寺靈雲派の法系である。したがって、昌茂は法系からみ

わち大慈悲院は孕石元泰の知行であった（注9）。その後、代替わりした勝頼により天正五年（一五七七）閏七月に安堵されている（注10）。寺伝では、現在地よりも二〇〇mほど山麓側の五輪平に旧寺域があつたと伝わっている。

一方、天正十年（一五八二）の武田氏滅亡後には、城氏は駿河を領有した徳川家康に仕え、大慈悲院は城景茂を中興開基として復興した。墓地には開基の墓塔と伝えられる宝篋印塔が他の卵塔とともにある（図2 注11）。



図2 伝城景茂墓塔

□ 大慈悲院藏城昌茂判物について

已上

先段御物語申候池田大慈悲院山林之事、長谷七左制札被出候、何も判行無之候、右筆紛有間敷候歟、如右無判共統目御代官之間被仰付憑入候、委細寺之坊主可被申候間、不能具候、恐惶謹言

（慶長二年）二月五日

城泉（花押）



図1 城景茂肖像画 大慈悲院蔵

城景茂肖像画について

財団法人清水港湾博物館 椿原靖弘

□ はじめに

静岡市駿河区池田の曹洞宗円通山大慈悲院に戦国武将の城和泉守景茂の肖像画が伝わっている(図1)。

城景茂は武田家滅亡後に徳川家康に仕え、天正十五年(一五八七)に駿府で亡くなった。嫡子の昌茂は父・景茂を中興開基として静岡市池田の円通山大慈悲院を中興したと伝えられる。同寺には大慈悲院殿悟庵道天居士の位牌とともに意庵道逸居士肖像画、及び慶長十二年(一六〇七)の城昌茂判物が伝存している。一方、静岡市駿河区大岩の臨濟寺所蔵の『仏眼禪師語録』に同肖像画の讚が記されていて、画像に鉄山宗鈍の着讚があったこと、景茂の嫡子・昌茂が施主となり作成したことを確認できた。また、『語録』には「意庵道逸居士肖像讚」とともに「花庭理芳大姉肖像讚」も記されており、城景茂肖像画は同婦人像と二対であったことも判明した。甲斐の武田氏では当主の信虎・信玄や、親族衆の穴山氏などの肖像画は伝わっているが、寄親クラスの肖像画は類例がないことから紙面を借りて報告することとした。

□ 肖像画について

肖像画の箱に「城和泉法名怡庵道二之御影也同氏生縁城半左右衛門書之」の墨書があり、臨濟寺所蔵『仏眼禪師語録』中の「意庵道逸居士肖像」がこれに当たるものである。

本肖像画は本紙の大きさ、縦四六・八cm×横三四・七cm、紙本着色、掛軸装、上畳に胡座する景茂像は剃髪した法体像で、大柄な体に小さな顔がある。左に顔を向け、白の内衣の上に山吹色の小袖、墨染の法衣に掛絡を付けている。拳を体軀の前で握り締め、右手には扇子らしき持物を持っている。また、左の袈裟の下には武家を示すよう

太刀が置かれている。現状は折れ皺と欠損による画面の損傷が大きく、掛絡部分は後世に補彩されている。

□ 着讚について

本来は肖像の上部にあった讚は切り取られ、現状では肖像部分のみ掛幅に表装されている。しかし、幸いにも臨濟寺所蔵の『仏眼禪師語録』中に「意庵道逸居士肖像讚」が記されていて、この内容を補うことができる(注1)。なお、大慈悲院の位牌や箱書等には景茂の法名に「怡庵道二」「伊庵道二」等が使用されているが『仏眼禪師語録』中の「意庵道逸」が本来の表記である。

それでは、景茂夫人の花庭理芳大姉の讚も併せて紹介する。

○ 意庵道逸居士肖像讚

本来妙相自己音聲山頭蘿月屋後松風、

別々阿爺面目諫虚空、世、

這ヶ是意庵道逸居士肖像也、孝子昌茂就予求贊書以返之

○ 花庭理芳大姉肖像讚

金剛正體自安然何事画工劣筆研

看々法身無相々青山滿日夕陽前

此図是城氏昌茂公之北堂也、萱草春慕惠蘭亦既死矣、爾来雖物換

星移、孝心曾不移時々涅却茉莉子袖物也、仍而、命画工写其幻質需

贊、登偈一篇書以□厥上云

慶長四亥仲呂初三日 林住花園鐵山老衲涉觚

讚中に、「這ヶ是意庵道逸居士肖像也、孝子昌茂就予求贊書以返之」とある。『寛永諸家系図伝』では、城景茂は「次郎右衛門 和泉守 意庵 生国越後」とあることから、城昌茂の求めにより鉄山宗鈍が景茂の肖像画に着讚したと伝えられている。また、花庭理芳大姉肖像讚には、「此図是城氏昌茂公之北堂也、(中略)孝心曾不移」と

静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程

1. 投稿を受け付ける原稿

(1) 内容規定

加盟館員が従事している職務(展示・調査研究・保存、教育普及・その他)に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

(2) 執筆者規定

加盟館員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。ただし、加盟館員による推薦人を含むこととします。

2. 入稿規定

(1) 原稿の種類

日本語による原稿を基本とします。

(2) 入稿の方法

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版(ポジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等)等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPEGに統一して下さい。
※万一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

(3) 分量

ページ数目安(1ページ当たり)	事例報告等(1~4ページ分程度)	事例報告等(1/2ページ分)
論文 縦書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	縦書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	縦書き 写真無しの場合 1,100字 写真有りの場合 900字
横書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	横書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	横書き 写真無しの場合 1,100字 写真有りの場合 900字

(4) 文字原稿(印字原稿は次の書式でご提出下さい)

字数(1シート) A4版 40字×30行
※誌面レイアウト・フォーマットに揃えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

(5) 図版原稿(1ページの版面はA4)

カラー(巻頭図版) 掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

(6) 図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。

(7) 執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地(それぞれ〒、Tel.、Fax.番号)・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel. 054-263-5857
Fax. 054-263-5742

4. 日程および申込・校正手順

(1) 日程(予定)

申込締切 平成24年11月末日
入稿締切 平成25年 1月末日
発行予定 平成25年 3月末日

(2) 申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

- ・執筆者 (複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記)
- ・題名 (仮題で可)
- ・分量見込(レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。)
- ・縦書き、横書きの希望

※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

(3) 申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行いません。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

(4) 入稿の方法及び原稿の掲載

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4-(3)で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込みより増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

(5) 校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正(図版等を含む)2回を行なうことができます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

(6) レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

5. その他

(1) 文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

(2) 執筆者への成果品割当

執筆者には、15部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて30部を上限として贈呈することができます。

(3) 抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。